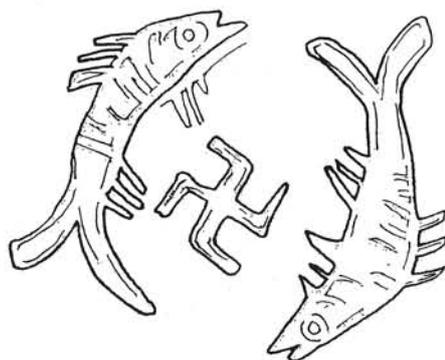


宮崎市文化財調査報告書 第59集

いけびらき え ぐち
池開・江口遺跡



2004年

宮崎市教育委員会

序

宮崎市は、大正13年の市制施行以来、今に至るまで



宮崎大学農学

遺跡遠景

序

宮崎市は、大正13年の市制施行以来、今年で80周年を迎えました。平成13年には中核市となり、県都として、現在でも大きな成長を遂げつつあります。

宮崎市が都市部としての発展を遂げた理由は様々に考えられますが、やはり母なる大淀川が与えてくれた、この肥沃な大地と、南国の太陽から惜しみなく降り注がれた光を一杯に浴びた、豊かな自然に帰するところが大きいように思います。

現在に生きる私たちの基盤となる、この宮崎市の風土は、私たちの祖先にも今と変わらず大いなる恩恵を与えていたことは言うまでもないことでしょう。私たちの足下に多くの遺跡が眠っていることこそ、その証左となるものです。

池開・江口遺跡は、海に面する砂丘上に築かれた中世の居館跡です。館の周囲を幾重にも巡る大きな溝があり、中国で作られた大量の陶磁器が出土しました。高価な輸入品に囲まれた、豊かな生活ぶりを思わせます。当時の人々もまた、宮崎を取り巻くこの豊かな自然の恩恵を受け、高い生活水準を保っていたのです。

九州の中心都市を目指し、宮崎市はこれからも大きな成長を遂げていくこととします。しかしそれが、何千年、何万年にもわたる先人たちの足跡の上に築かれたものであることを、私たちはけして忘れるべきではありません。

池開・江口遺跡の上にもまた、今に生きる私たちの新たな生活が築かれることとなります。今回の調査によって得られた多くの資料、多くの事実を、宮崎、ひいては我が国の歴史解明の一助となすべく、今後も努力を続けていくことこそ、私たちの責務と考えます。

今回の発掘調査は夏から冬にかけて実施されたものでした。照りつける太陽の下、あるいは吹き付ける寒風の中、作業に従事してくださった作業員の皆様には、末尾ながら心より御礼申し上げます。

平成16年12月

宮崎市教育委員会
教育長 内藤 泰夫

例 言

1. 本書は[]建設に伴う、宮崎県宮崎市新別府町字池開および字江口に所在する池開・江口遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成15年6月23日～平成16年1月30日までの期間実施した。

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

〈平成15年度〉

文化振興課	課長	小掠 聖
調査総括	文化財係長	田村 泰彦
調査事務	主任主事	富永 智美
調査員	技師補	竹中 克繁
	嘱託	河野賢太郎

〈平成16年度〉

文化振興課	課長	小掠 聖
調査総括	文化財係長	米良 明信
調査事務	主事	松木 勇道
整理担当	技師	竹中 克繁
補助員	嘱託	永友加奈子 稲元久美子 徳丸 理奈

4. 掲載した図面のうち、現場における実測は竹中・河野が、遺物の実測は永友・稲元・徳丸が分担して行った。
5. 現場および遺物の写真撮影は竹中・河野が分担して行った。
6. 航空写真については有限会社スカイサーベイ九州に撮影を委託した。また、土壌の自然科学分析は株式会社古環境研究所に、木質遺物の構造分析、放射性炭素年代測定及び保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。
7. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
SE……溝状遺構 SB……掘立柱建物 SD……土坑
8. 本書の図で使用する北は、すべて磁北である。
8. 本書の執筆・編集は竹中が行った。
9. 出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第I章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第II章 調査経過	
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の経過	4
第III章 池開地区の調査	
第1節 調査の概略	5
第2節 遺構	5
第3節 出土遺物	19
第IV章 江口地区の調査	
第1節 調査の概略	26
第2節 遺構	26
第3節 出土遺物	41
第V章 総括	49

挿図目次

第1図 周辺地図①	2
第2図 周辺地図②	3
第3図 池開地区遺構配置図	7・8
第4図 溝状遺構実測図①（北西部）	11
第5図 溝状遺構実測図②（南西部）	12
第6図 溝状遺構実測図③（南東部）	13
第7図 溝状遺構土層断面図	14
第8図 S B 1 実測図	16
第9図 S B 2 実測図	16
第10図 S B 3 実測図	17
第11図 S B 4 実測図	17

第12図	S B 5 実測図	18
第13図	S B 6 実測図	18
第14図	S B 7 実測図	19
第15図	池開地区出土遺物実測図① (陶磁器)	20
第16図	池開地区出土遺物実測図② (陶磁器・播鉢・土師器)	21
第17図	池開地区出土遺物実測図③ (その他土器類・石製品・木質遺物)	22
第18図	池開地区出土遺物実測図④ (土錘)	23
第19図	江口地区遺構配置図	27・28
第20図	溝状遺構実測図① (南西部)	29
第21図	溝状遺構実測図② (北西部)	30
第22図	溝状遺構実測図③ (北東部)	31
第23図	溝状遺構実測図④ (東部)	32
第24図	溝状遺構土層断面図	33
第25図	SD3 平面および土層断面図	37
第26図	S B 1 実測図	38
第27図	S B 2 実測図	38
第28図	S B 3 実測図	39
第29図	S B 4 実測図	39
第30図	江口地区出土遺物実測図① (陶磁器)	43
第31図	江口地区出土遺物実測図② (陶磁器)	44
第32図	江口地区出土遺物実測図③ (陶磁器・その他土器類・石製品)	45
第33図	江口地区出土遺物実測図④ (播鉢・石製品・木質遺物)	46
第34図	江口地区出土遺物実測図⑤ (土錘)	48
第35図	池開地区遺構変遷図	50

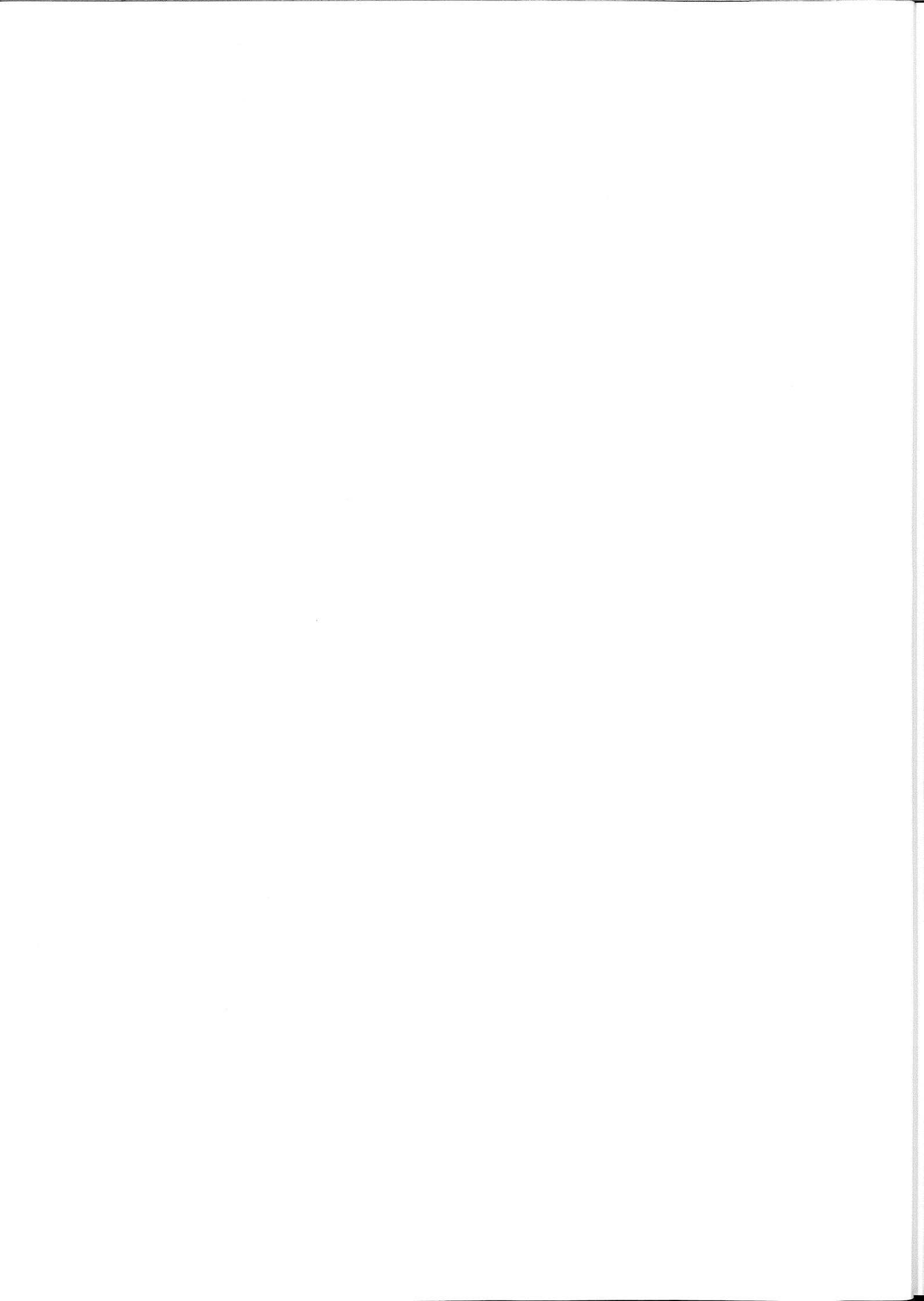
図版目次

図版 1	池開地区 全景	57
図版 2	池開地区 SE 2 青磁出土状況	57
図版 3	池開地区 SE 1 漆器出土状況	58
図版 4	池開地区 SE 1 掘り込み部	58
図版 5	池開地区 SE10 軽石検出状況	58
図版 6	江口地区 全景	59
図版 7	江口地区 SB1	59
図版 8	江口地区 南東部	60

図版 9	江口地区 SD3	60
図版 10	江口地区 SD3	61
図版 11	江口地区 SE1 遺物出土状況	61
図版 12	江口地区 ピット遺物出土状況	61
図版 13	池開地区出土遺物① (陶磁器)	62
図版 14	池開地区出土遺物② (陶磁器)	63
図版 15	池開地区出土遺物③ (陶磁器・その他土器類)	64
図版 16	池開地区出土遺物④ (その他土器類・石製品・木製品・土錘)	65
図版 17	江口地区出土遺物① (陶磁器)	66
図版 18	江口地区出土遺物② (陶磁器)	67
図版 19	江口地区出土遺物③ (陶磁器)	68
図版 20	江口地区出土遺物④ (陶磁器)	69
図版 21	江口地区出土遺物⑤ (その他土器類・播鉢・土錘)	70
図版 22	江口地区出土遺物⑥ (石製品・木製井筒)	71

表 目 次

表 1	池開地区出土土器類観察表	52
表 2	池開地区出土石製品観察表	52
表 3	池開地区出土木質遺物観察表	53
表 4	池開地区出土土錘観察表	53
表 5	江口地区出土土器類観察表①	54
表 6	江口地区出土土器類観察表②	55
表 7	江口地区出土石製品観察表	55
表 8	江口地区出土木質遺物観察表	55
表 9	江口地区出土土錘観察表	55



第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地理的環境

池開・江口遺跡は、宮崎市新別府町字池開および字江口に所在し、地理的には宮崎平野（宮崎県の東端、日向灘に面する沖積平野。都農町から宮崎市までの海岸部一帯）のほぼ中央を東進する県下最大級の河川大淀川の左岸、河口付近に位置する。現在でも成長の続く砂丘面（下田島Ⅲ面）上に位置し、東に0.8kmで一ツ葉入り江、日向灘に至る。また南に2.8kmほどで大淀川の河口付近に至るが、本遺跡と大淀川の間には、南進したのちに東に弧を描いて日向灘に至る新別府川が存在する。池開・江口遺跡から南に0.5km、あるいは西に0.6kmほどでこの新別府川に至り、本遺跡はまさに水に囲まれた環境といえる。

現在、池開・江口遺跡の周囲は水田として利用されている部分が多く、それら水田面の海拔は1.5m前後である。遺跡は、それら周囲の水田面より0.5mほど高い微高地に形成されている。

なお本遺跡の所在する一帯は、現在では宮崎市街地の東端にあたり、近年、開発の進む地域でもある。

第 2 節 歴史的環境

池開・江口遺跡の所在する、日向灘と新別府川に挟まれた砂丘面上には、数多くの遺跡が存在する。大鳥火切塚遺跡、宮神遺跡、中園遺跡、平原第1遺跡、平原第2遺跡、麓第1遺跡など、多くは弥生時代から古墳時代にかけての散布地であるが、中には城元遺跡といった、近世の散布地も含まれる。これら散布地以外にも、古墳や、実際の調査によってその様相が明らかとなっている遺跡もまた多数所在している。

新別府川に面する左岸の微高地には、櫛1号墳が所在している。近年の宮崎大学による調査の結果、国内でも最大級の木槨の存在が明らかとなり、宮崎平野部における初現期の前方後円墳として注目を集めている。この櫛1号墳をはじめとして、この一帯には櫛2号墳、櫛3号墳、麓1号墳、麓2号墳など、大淀川下流域では珍しい、平野部に築かれた古墳が多数存在し、櫛古墳群と総称されている。

櫛1号墳の北側隣接地には櫛遺跡が所在する。昭和20年代、30年代に弥生時代前期の積石墓や小児用甕棺が検出されている。櫛遺跡の約200m北に江田原第2遺跡、その北東には江田原第1遺跡、さらに北東に江田原第3遺跡が存在している。江田原第1遺跡では溝状遺構や土坑が検出され、古墳時代から平安時代にかけての土器が出土している。江田原第3遺跡は平成13年度に調査が行われ、5世紀後半の古墳周溝が確認されるとともに、土師器、須恵器が出土している。江田原第3遺跡の北西に位置する浮之城遺跡では弥生時代の水田址が検出されている。その他、江田原遺跡の東には、奈良時代の水田址が確認された櫛北小学校校庭遺跡が存在する。



- | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1 池開・江口遺跡 | 6 浮之城遺跡 | 11 麓2号墳 | 16 宮脇遺跡 |
| 2 平原第1遺跡 | 7 江田原第1遺跡 | 12 櫛1号墳 | 17 大町遺跡 |
| 3 平原第2遺跡 | 8 江田原第2遺跡 | 13 櫛古墳 | 18 浄土江門遺跡 |
| 4 江田原第3遺跡 | 9 櫛3号墳 | 14 櫛小学校遺跡 | 19 城元遺跡 |
| 5 櫛北小学校校庭遺跡 | 10 櫛遺跡 | 15 北中遺跡 | |

第1図 周辺地図① (scale : 1/20,000)

これら新別府川左岸の遺跡の他、右岸にも弥生時代、古墳時代の散布地である櫛小学校遺跡や、平成10年度、平成12年度、平成14年度の3度にわたって調査が行われた北中遺跡が存在する。北中遺跡では古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居の他、古墳時代の地下式横穴墓が検出されている。

以上、池開・江口遺跡周辺に所在する遺跡の主たるものを列挙したが、これらの多くは古墳時代を中心とするものである。中世以降の遺跡はほとんど知られておらず、10世紀より下のものは近世の散布地である城元遺跡しかない。

【参考文献】

宮崎市教育委員会 1990『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ〔リゾート地区を中心として〕』
 宮崎県 1997『宮崎県史』通史編 原始・古代1
 稲岡洋道・川原愛編 2002『江田原第3遺跡』宮崎市教育委員会
 河野賢太郎編 2002『北中遺跡Ⅱ』宮崎市教育委員会
 河野賢太郎編 2003『北中遺跡Ⅲ』宮崎市教育委員会



第2図 周辺地図② (scale : 1/2,500)

第Ⅱ章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成13年5月31日、大規模商業施設 [] の建設計画にともない、株式会社 [] より、宮崎市新別府町池開、江口外における埋蔵文化財所在の有無について、宮崎市教育委員会教育長あてに照会がなされた。当該地には周知の遺跡である櫛古墳が存在するとともに、地形的にも他の遺跡が存在する可能性があったため、市教育委員会では同年11月28・29日、12月3・20・21日、当該地において、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。調査は池開、江口両地区を対象とし、バックホーにより試掘トレンチを計30本設定した。結果として、両地区ともに数条の溝状遺構や掘立柱建物と思しきピット群の存在が確認され、陶磁器片や土錘等の遺物も検出された。この結果を受け、市教育委員会では株式会社中野産業との間に協議を重ね、池開地区3,200m²、江口地区4,700m²を対象として本調査を行うこととした。

第2節 調査の経過

発掘調査は平成15年6月23日から平成16年1月30日までの約7ヶ月間実施した。

池開、江口両地区ともに、現在、水田として利用されている部分が多く、そのほとんどは地山まで大きく削平を受けていると考えられる。試掘調査時、それら水田部分にも試掘トレンチを設定したが、遺構の検出は見られなかった。遺構、遺物の検出が見られるのは、荒蕪地、ないし畑地として利用されている部分である。これらの部分は周囲の水田部分よりも若干高く、旧地形の様相をある程度留めたものと思われる。本調査における調査区は、それら荒蕪地、畑地を中心として設定した。

詳細については次節以降に譲るが、池開地区では調査区を3箇所設定した。調査はバックホーによって表土剥ぎを行い、遺構面を検出、その後は手作業によって掘り下げを行った。掘り下げおよび記録作業の終了ののちは、両地区ともに埋め戻しを行い、現地における発掘調査を終了した。

池開地区における発掘調査面積は1,593m²、江口地区における発掘調査面積は2,665m²、計4,258m²である。

第Ⅲ章 池開地区の調査

第1節 調査の概略

調査区は、開発による掘削の行われな私道部分および攪乱の大きく及んでいる箇所を避け、西側にA1区、北東側にA2区、南東側にA3区の、計3箇所設定した。

池開地区における基本層序は、Ⅰ層が表土(75cm)、Ⅱ層が明黄褐色砂質土(やや粘性があり、固くしまる 10cm)、Ⅲ層が灰黄色砂質土(Ⅱ層とⅣ層の漸移層 15cm)、Ⅳ層が灰白色粘質土(まばらに小礫を含有 20cm)、Ⅴ層が灰色砂質土(10cm)、Ⅵ層が暗灰色砂質土(鉄分を含み、軽石の小礫を含有する 25cm)となっている。Ⅱ層以下が地山であり、遺構検出面はⅡ層である。

また表土剥ぎの際から、調査区域の南東部においては、現地表より地山(遺構検出面)までの表土の堆積が薄く、遺構の上部は大きく削平を受けていること、この削平により、南東部においては遺構の残存していないことが予測できた。そのため、調査区域南東端に南北方向のトレンチを1本設定して(Tr.1)、現地表より30cmほどで地山を検出し、同時に本調査区域の南東部においては遺構の存在しない(削平を受けている)ことを確認した。

調査面積はA1区 1,062m²、A2区 374m²、A3区 133m²、Tr.1 24m²で、池開地区における調査面積の総計は1,593m²である。

第2節 遺構

池開地区においては溝状遺構12条、ピット354基(うち掘立柱建物7棟)を検出した。以下にその詳細を述べる。なお溝状遺構の遺構番号のうち、SE7とSE13は欠番である。

a. 溝状遺構

A1区

SE1(1号溝状遺構)

A1区において検出された、池開地区最大の溝である。A1区西端においてほぼ直角に曲がるコーナーを持ち、北東-南西方向および北西-南東方向に、それぞれほぼ直線的に延びる。現状で北東-南西方向部分は長さ28.8m、幅1.68~2.64m(上場)、底面幅0.16~0.48m(後述の掘り込み部は除く)、深さ0.57~0.68m(後述の掘り込み部は除く)、北西-南東方向部分は長さ21.6m、幅1.48~3.04m(上場)、底面幅0.40~0.96m、深さ0.32~0.73mである。

北西-南東方向の東端(A1区東端)では、底面が突如として40cmほど立ち上がり、顕著に浅くなる部分が設けられている。この東端部分の深さは約0.3mであるが、SE1においては、北西-南東方向部分の北側斜面および北東-南西方向部分の東側斜面、すなわちコーナーを持つ溝の内回りの斜面において、この東端部分の底面とほぼ同じ高さで、ゆるいテラス状の中位の段が設けられている。

また北東-南西方向部分の中程やや北寄りの底面において、平面楕円形の掘り込みが存在する。平面の規模は長軸1.92m、短軸1.28m(溝底面における計測)で、溝底面からの深さは約

0.5m、上部の溝部分を含めれば、深さは最大で1.03mである。土層の堆積状況を観察すると、溝部分と埋土を共有しており、SE1に付随する施設と理解できる。なお、この掘り込み内からの遺物の出土は見られなかった。

遺物は青磁や陶器、播鉢、糸切底の土師器坏のほか、底に孔を穿った漆塗りの木椀などが出土している。

出土傾向としては、東端の顕著に浅くなる部分において遺物の出土が見られなかったことを除けば、明確な偏り等はなく、SE1のほぼ全面にわたって分布している。出土レベルについても同様で、SE1に多く出土した青磁片も、溝の上位、下位の別によらず出土している。

なおSE1は、遺構平面からの検討により、A3区SE12と同一の溝と判断される。また埋土中からは桜島3テフラ（Sz-3 桜島火山起源 1471年噴出）が検出されている。

SE2（2号溝状遺構）

A1区南端において検出した、北西-南東方向に直線的に延びる溝である。規模は現状で長さ22.8m、幅0.88～2.56m、底面幅0.24～0.72m、深さ0.10～0.48mである。

SE1北西-南東方向部分とほぼ平行に作られているが、その東端において底面が30cmほど立ち上がり、深さ0.10～0.18mの顕著に浅い部分を設けることもSE1と共通している。なお、この部分からは土錘が一点出土している。

また東端部分においては、溝の南側にゆるく弧を描く、深さ8cmほどの細く浅い溝が付随する。遺構平面の検出時や、土層堆積状況の観察からは、この細い溝とSE2との間に先後関係は見出せず、またSE2を越えて北側に延びる痕跡もないことから、SE2に伴うものと判断される。

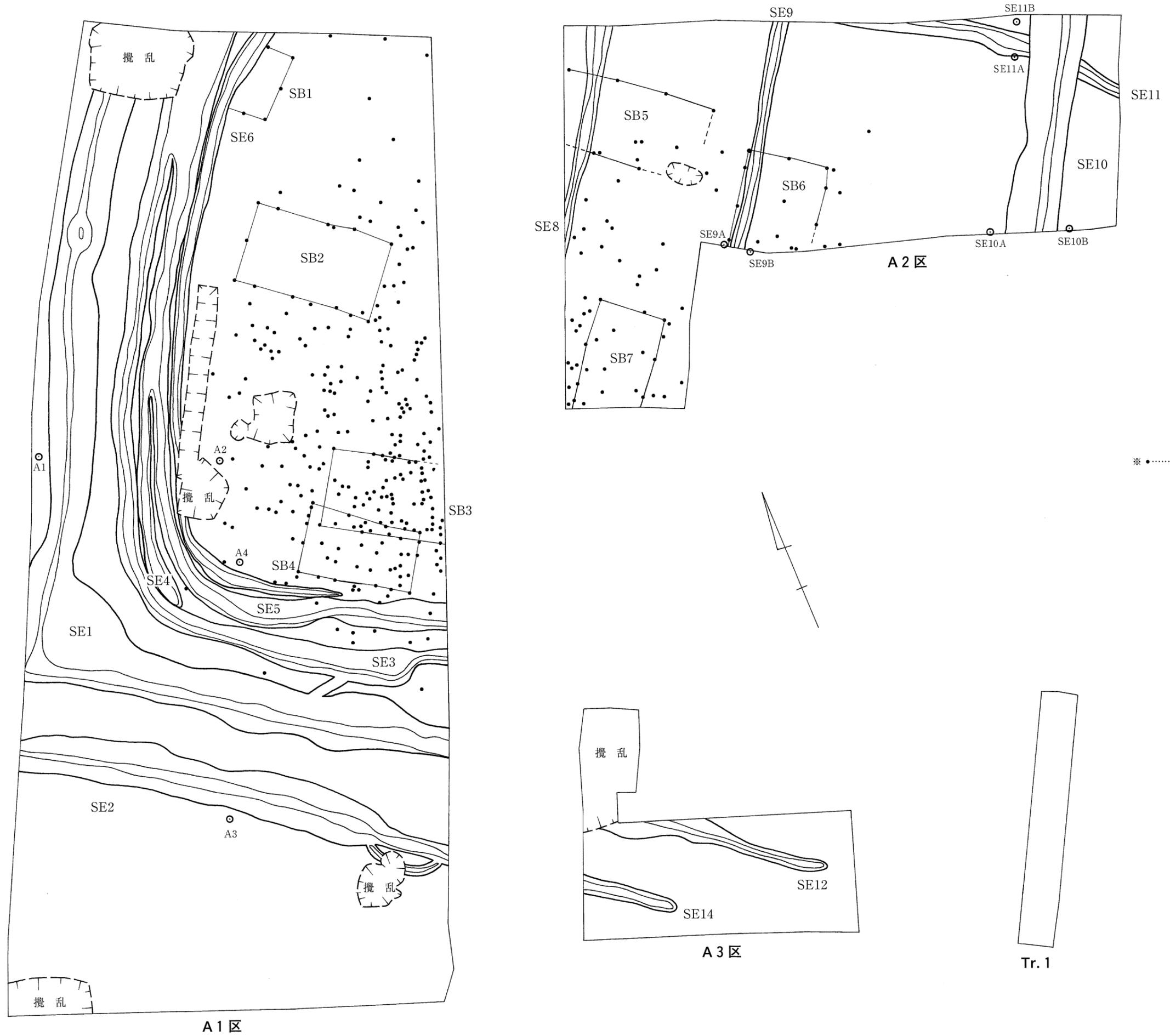
遺物は青磁片、白磁片および土製のはがまなどが出土している。出土傾向としては、溝の西半部では一切の遺物の出土は見られず、東端の顕著に浅い部分を含む、溝の東半部に集中した。また溝の上位、中位からの出土もなく、すべて溝のほぼ底面より検出されている。

なおSE2は、遺構平面からの検討により、A3区SE14と同一の溝と判断される。また埋土中からは桜島3テフラとともに、上位では霧島新燃享保テフラ（Kr-SmK 霧島火山起源 1717年噴出）が検出されている。

SE3（3号溝状遺構）

SE1の内側に位置し、SE1とほぼ同じ位置にゆるく弧を描いたコーナーを持つ。北東-南西方向部分、および北西-南東方向部分ともにSE1とほぼ平行に、直線的に延び、北端では隣接するSE4・5と上場を共有する。現況の規模は、長さ45.8m、幅0.64～2.00m（SE4・5との共有部分では2.52～2.60m）、底面幅0.16～0.56m（SE4・5との共有部分では1.60～1.72m）、深さ0.16～0.68mである。

東端において、SE1・2と同じく、底面が50cmほど立ち上がり、深さ0.16～0.19mの顕著に浅い部分を設けている。また、この浅い部分からやや西寄りの部分の南側に、深さ20cmほどの浅い溝が付随し、SE1と連結している。この浅い溝とSE1・3それぞれの間に、先後関係は見出せなかった。



第3図 池開地区遺構配置図 (scale:1/200)



遺物は青磁、染付、陶器の壺、脚付の土師器などが出土している。出土傾向としては、SE1と同じく東端の浅い部分において遺物の出土が皆無であることを除けば、SE3全体に偏りなく分布しており、出土レベルにも顕著な傾向は見られない。

なお当遺構より出土した青磁片（第15図18）がA2区SE10出土のものと接合関係にあることから、SE3とSE10は同一の溝と判断される。

SE4（4号溝状遺構）

SE3の内側に隣接し、調査区北側において、その流れの半分以上をSE5と共有する。北東－南西方向に延び、SE3と同様のカーブを描くが、そのコーナー部の途中で収束する。SE5との共有部分を除くと、長さは11.8m、幅0.52～0.96m（収束部分を除く）、底面の幅0.20～0.64m（収束部分を除く）である。深さは最深部においても10cmに満たない。

その規模にあいまって、遺物の出土は多くはなく、青磁片、播鉢片、染付片等が数点出土したのみである。

SE5（5号溝状遺構）

SE3の内側に位置し、SE3と同様のカーブを描いて屈曲する。北東－南西方向部分においてはその北側部分の多くをSE4と共有する。この共有部分における土層の堆積状況を観察すると、SE4とSE5は埋土を共有し、先後関係の存在は見出し難い。したがってSE4とSE5は途中で二股となる一本の溝であると判断できる。SE4がコーナー部付近で収束するのに対し、SE5は途中で収束することなく調査区外に伸びていることから、SE5の方がこの溝の主たる流れと判断できる。

SE4との共有部分を含めた、SE5の現況における規模は、長さ43.2m、幅0.80～1.68m、底面幅0.24～0.80m、深さ0.07～0.22mである。

遺物は白磁、染付のほか播鉢などの陶器類も出土している。また1点のみ出土している青磁片（第16図23）は、見込みにSE3（SE10）出土の青磁片（第15図18）と同範の文様を持つ。遺物の出土位置を見ると、コーナー部分においては皆無であり、分布は東端付近と北端付近に偏るという傾向がありはするが、これら分布の偏りと遺物の種別等との間に相関関係などは見出せない。

SE6（6号溝状遺構）

SE5の内側に隣接し、SE3～5と同様のコーナーを持つ。ただし、このコーナー部を過ぎた北西－南東方向部分の途上において立ち消えとなる。現況における規模は、長さ36.2m、幅0.44～1.04m（収束部分を除く）、底面の幅0.20～0.52m（収束部分を除く）、深さは最深部において0.13mである。遺物の出土はない。

A2区

SE8（8号溝状遺構）

A2区西端に位置し、北東－南西方向にほぼ直線的に延びる。現況の規模は、長さ12.2m、幅0.28～1.20m、底面幅0.07～0.56m、深さは最深部においても0.07mほどである。遺物は櫛描きの波状文を施した陶器甕片等が数点出土している。

遺構の平面関係より、A1区SE6と同一の溝である可能性が考えられるが、双方ともに遺物の出土がほとんどなく、判断材料に欠ける。

SE9（9号溝状遺構）

A2区のほぼ中央において検出された、北東－南西方向にほぼ直線的に延びる溝である。現況の規模は、長さ11.94m、幅0.55～0.87m、底面幅0.19～0.38m、深さは最深部で0.57mである。遺物の出土は皆無であった。

遺構の平面関係より、A1区SE5と同一の溝である可能性が高いが、SE9が無遺物であることもあり、断定はできない。なお埋土中から桜島3テフラが検出されている。

SE10（10号溝状遺構）

A2区東端において検出された、SE8・9とほぼ平行に延びる溝である。規模は現況で長さ11.4m、幅1.26～2.07m、底面の幅0.61～0.89m、深さは最深部で0.55mである。

SE10では、溝の西側斜面において、大量の軽石が集中して検出された（図版5）。ただし、いずれも溝の壁面、底面からは浮いた状態で検出されたため、溝本来に伴う構築物とは考えられない。

遺物は磁器、染付のほか、SE3の項で触れたとおり、SE3出土のものと接合関係にある青磁片（第15図18）が出土している。また大型の土錘が、溝南端の上位～中位にかけて集中的に検出された。本遺構においては、溝底面においての遺物の出土はなく、すべて上位～中位にかけての検出であった。

再三にわたって触れてきたことではあるが、当遺構より出土した青磁片が、A1区SE3出土のものと接合しており、SE3とSE10は同一の溝と判断される。SE3、SE10ともに、北側は調査区外に延びるため、断定することはできないが、その場合この溝は一辺約45mの、方形に巡る大型の溝と考えられる。

なお埋土中からは桜島3テフラが検出されるとともに、上層では霧島新燃享保テフラが検出されている。

SE11（11号溝状遺構）

A2区北端において検出された、北西－南東方向に直線的に延びる溝であり、SE10によって切られている。規模は現況で15.6m、幅0.45～1.38m、底面幅0.17～0.72m、深さは最深部で0.50mである。

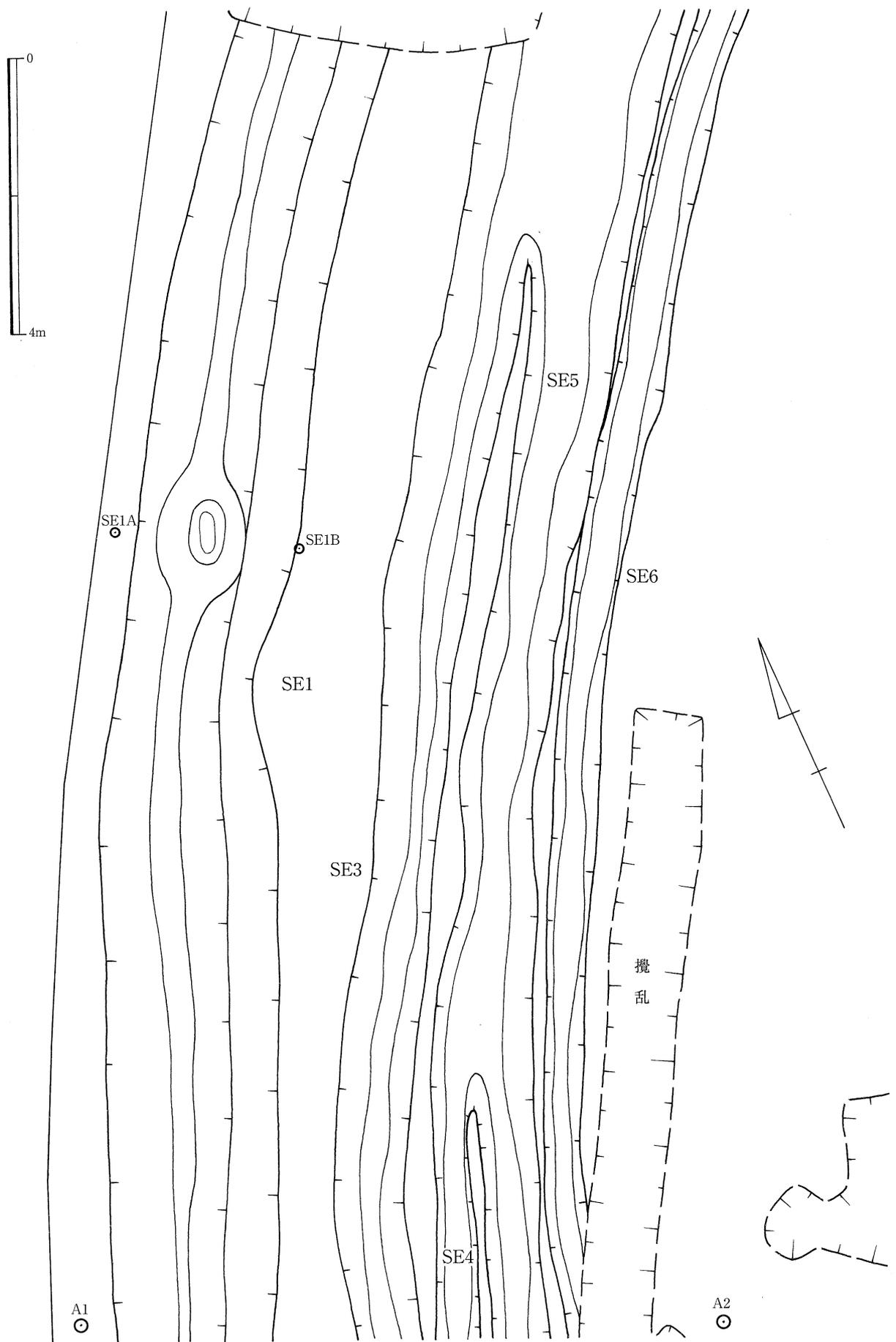
遺物は磁器片が溝の上位より出土している。

遺構平面の関係を見ると、A1区SE1もしくはSE2と同一の溝である可能性が考えられるが、決め手はない。

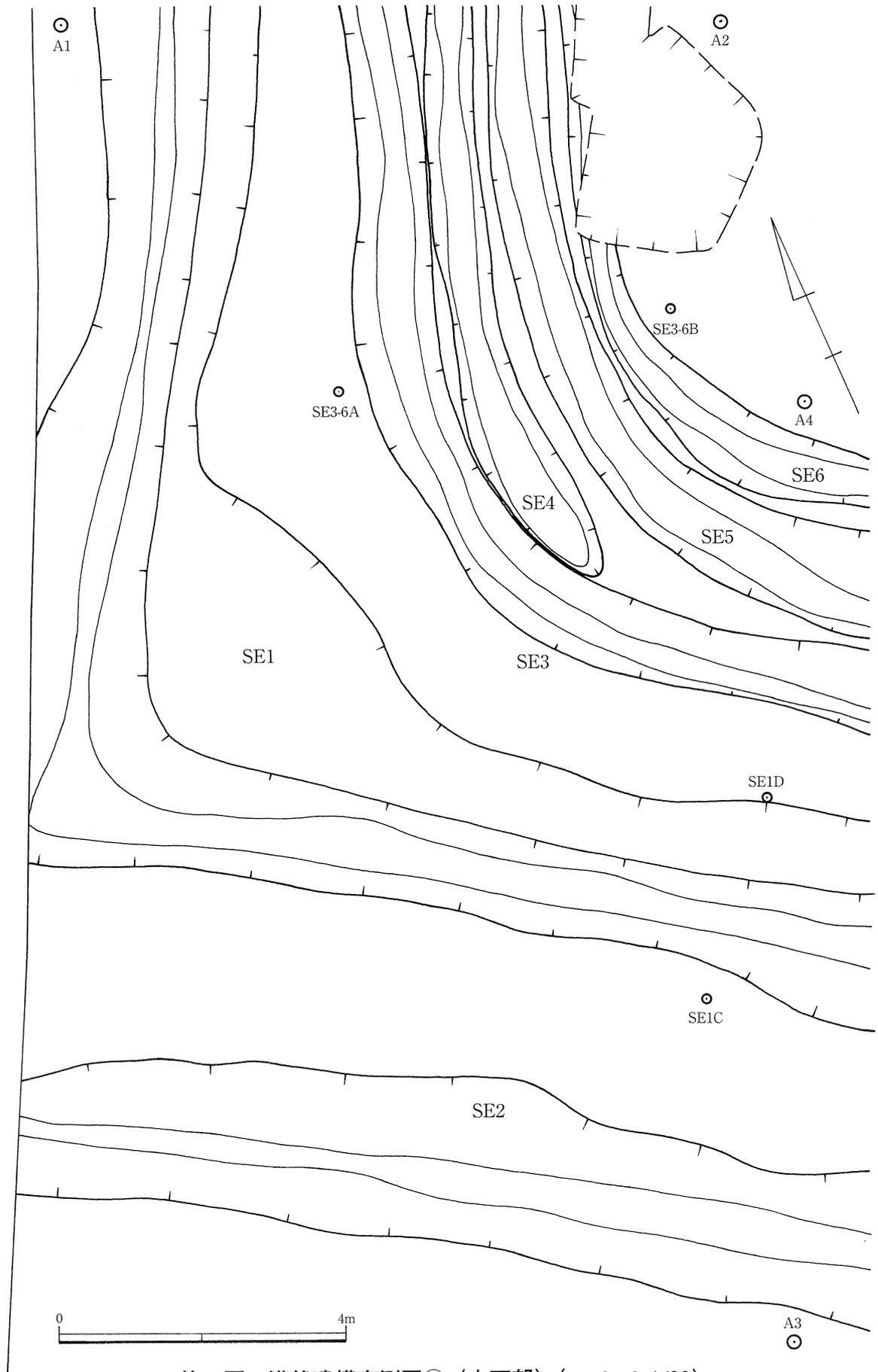
A3区

SE12（12号溝状遺構）

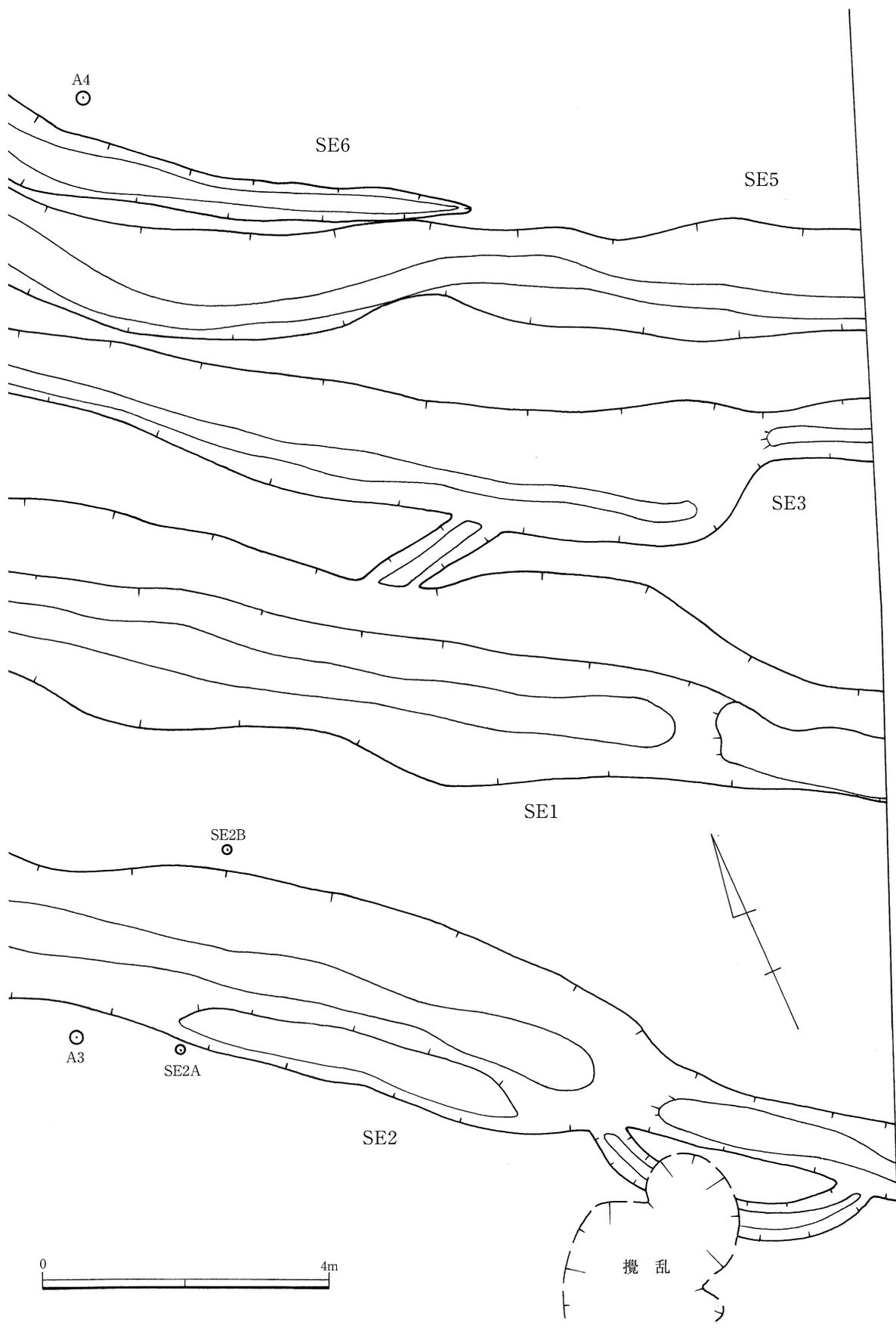
A3区において検出された北西－南東方向の溝である。A3区東端において収束するが、これは先述のとおり、池開地区南東部においては削平が大きく遺構面にまで及んでいることに起因するものであり、この収束は溝本来のあり方ではなく、削平を受けた結果である。



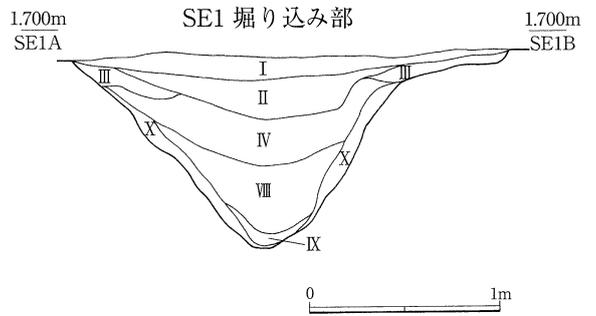
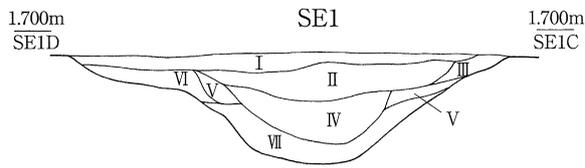
第4図 溝状遺構実測図① (北西部) (scale : 1/80)



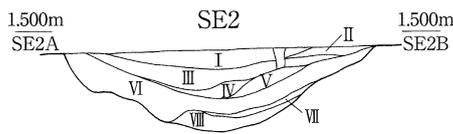
第5図 溝状遺構実測図② (南西部) (scale : 1/80)



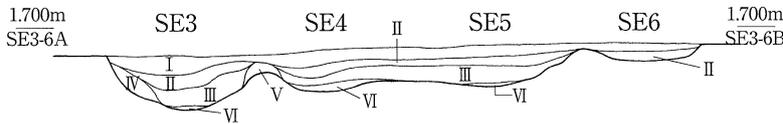
第6図 溝状遺構実測図③(南東部) (scale : 1/80)



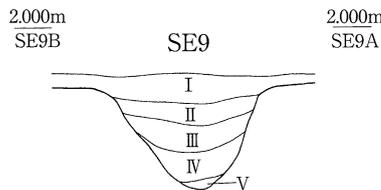
- I層 表土
- II層 暗褐色粘質土 粘性がややあり、5~20mm程度の軽石が混入する
- III層 灰色砂質土 やや粘性があり、鉄分を多く含む
- IV層 灰色粘質土 粘性が強く、1~2mm程度の軽石が混入する
- V層 灰色砂質土 やや粘性があり、鉄分を多く含む
- VI層 灰色粘質土 Vより粘性が強く、鉄分を多く含む
- VII層 灰色砂質土 鉄分を多く含む、1~2mm程度の軽石が混入する
- VIII層 暗褐色粘質土 粘性が強い
- IX層 暗褐色砂質土 VIIIに類似するが、砂質が強い
- X層 明灰色砂質土 地山の崩れ



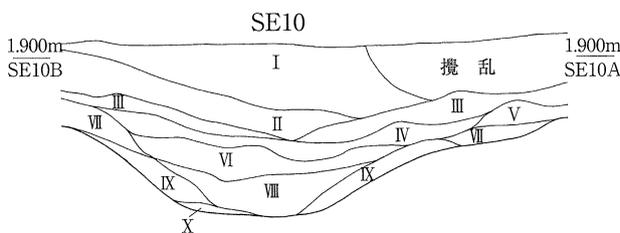
- I層 褐灰色砂質土 硬くしまる
- II層 褐灰色砂質土 Iに類似するが、より粘性が強い
- III層 明灰色砂質土 やや粘性があり、硬くしまる
- IV層 におい橙砂質土 粘性が弱く、砂質が強い
- V層 暗灰色粘質土 粘性があり、1~2mm程度の軽石が混入する
- VI層 暗灰色粘質土 Vに類似するが、より粘性が強い
- VII層 暗灰色砂質土 しまりがなく、砂質が強い
- VIII層 灰色粘土 粘性が強く、硬くしまる



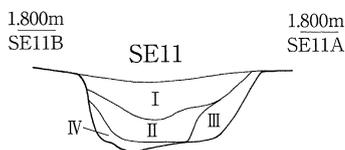
- I層 表土
- II層 暗褐色粘質土 粘性があり、硬くしまる
- III層 暗褐色粘質土 IIに類似するが、より粘性が強く、1mm程度の軽石が混入する
- IV層 暗褐色粘質土 IIに類似するが、やや粘性が弱い
- V層 褐色粘質土 1~5mm程度の軽石が混入する
- VI層 におい橙砂質土 地山の崩れ



- I層 表土
- II層 暗褐色粘質土 粘性があり、硬くしまる
- III層 暗褐色粘質土 IIに類似するが、より粘性が強い
- IV層 黒褐色粘質土 粘性が強く、硬くしまる
- V層 明灰色砂質土 地山の崩れ



- I層 褐色砂質土 しまりがあり、1~10mm程度の軽石が混入する
- II層 褐色砂質土 Iに類似するが、混入物はない
- III層 暗褐色砂質土 硬くしまる
- IV層 暗褐色砂質土 硬くしまり、軽石を多く含有する
- V層 暗灰色砂質土 粘性がないが、硬くしまる
- VI層 灰色粘質土 硬くしまる
- VII層 暗灰色粘質土 やや粘性があり、硬くしまる
- VIII層 暗灰色粘質土 粘性が強く、硬くしまる
- IX層 暗灰色砂質土 やや粘性があり、硬くしまる
- X層 暗灰色砂質土 しまりがなく、粘性が強い



- I層 暗灰色砂質土 しまりがなく、5mm程度の軽石が混入する
- II層 灰色砂質土 しまりがなく
- III層 黄褐色砂質土 地山の崩れ
- IV層 明灰色砂質土 地山の崩れ

第7図 溝状遺構土層断面図 (scale : 1/40)

現況の規模は、長さ11.8m、幅は最大で1.13m、底面幅は最大0.32m、深さは最深部で0.38mである。遺物の出土はない。

A1区SE1の項で述べたとおり、遺構平面での検討より、SE1と同一の溝と判断できる。

SE14 (14号溝状遺構)

SE12の南側に隣接する北西-南東方向の溝である。A3区の中程で収束するが、SE12と同じく削平を受けたことによる。

現況の規模は長さ5.0m、最大幅1.00m、底面最大幅0.46m、深さは最大0.17mである。遺物の出土はない。遺構平面からの検討により、A1区SE2と同一の溝と考えられる。

b. 掘立柱建物 (ピット)

池開地区より検出された総数354基のピットを平面で検討した結果、7棟の掘立柱建物が見出された。

A1区

SB1 (1号掘立柱建物)

A1区北端で検出され、大部分はSE3~6によって切られている。規模は桁行き2間(3.75m)、梁行き1間以上(1間0.98~1.30m)、柱穴の深さは35~43cm、棟方向はN-43°-Wである。桁行きの規模(1間約1.9m)に比して、梁行き部分が極端に短いので、検出されたのは底の部分かと思われる。

SB2 (2号掘立柱建物)

A1区北側のやや東寄りの地点で検出された。池開地区では数少ない、完全な形で検出された掘立柱建物の1つである。規模は桁行き2間(4.13~4.25m)、梁行き4間(7.17~7.24m)で、面積は約30m²、柱穴の深さは24~68cmである。棟方向はN-50°-Wで、西側に底部分を持つ。

SB3 (3号掘立柱建物)

A1区の東端において検出され、一部は調査区外へと出る。桁行き1間(3.95m)、梁行き3間以上(1間1.87~2.22m)、柱穴の深さ27~31cm、棟方向はN-57°-Wである。

SB4 (4号掘立柱建物)

A1区の東寄り、SE5・6の北西-南東方向部分の北側に隣接して、ほぼ完全な形で検出された。規模は桁行き2間(3.21~3.33m)、梁行き3間(5.29~5.74m)、面積は約18m²で、柱穴の深さ20~32cm、棟方向はN-54°-Wである。

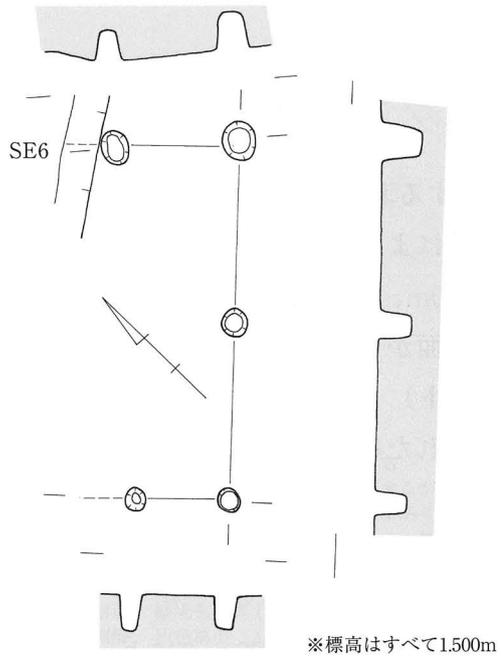
A2区

SB5 (5号掘立柱建物)

A2区において検出された、SE8と切り合う掘立柱建物である。A2区西端に位置し、一部は調査区外へと出ている。規模は桁行き1間(攪乱に切られ、実距離測定は不可能)、梁行き3間以上(1間2.47~2.63m)、柱穴の深さは31~43cm、棟方向はN-50°-Wである。

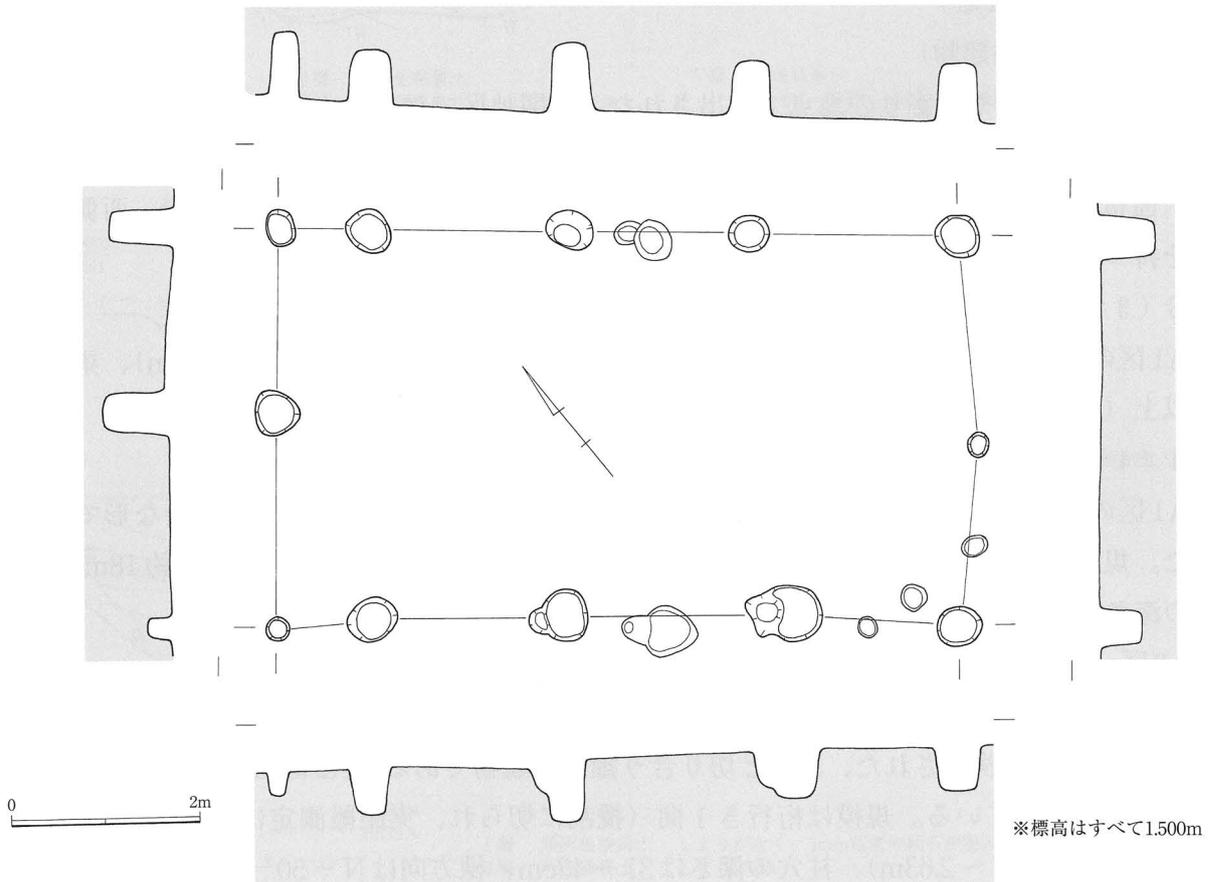
SB6 (6号掘立柱建物)

A2区の南端、中程の位置において検出された。SE9と切り合っており、一部は調査区外へ



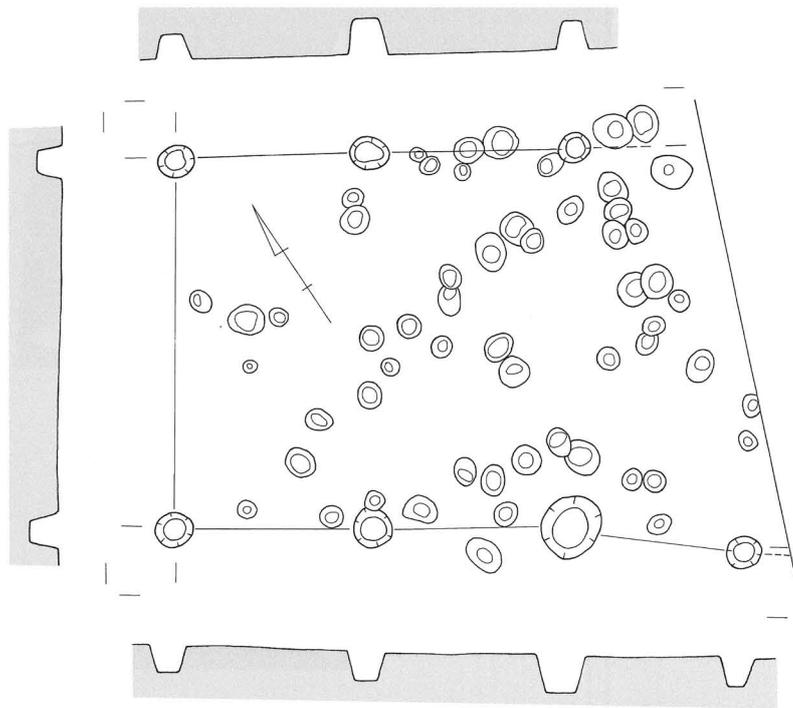
0 2m

第8図 SB1 実測図 (scale : 1/80)



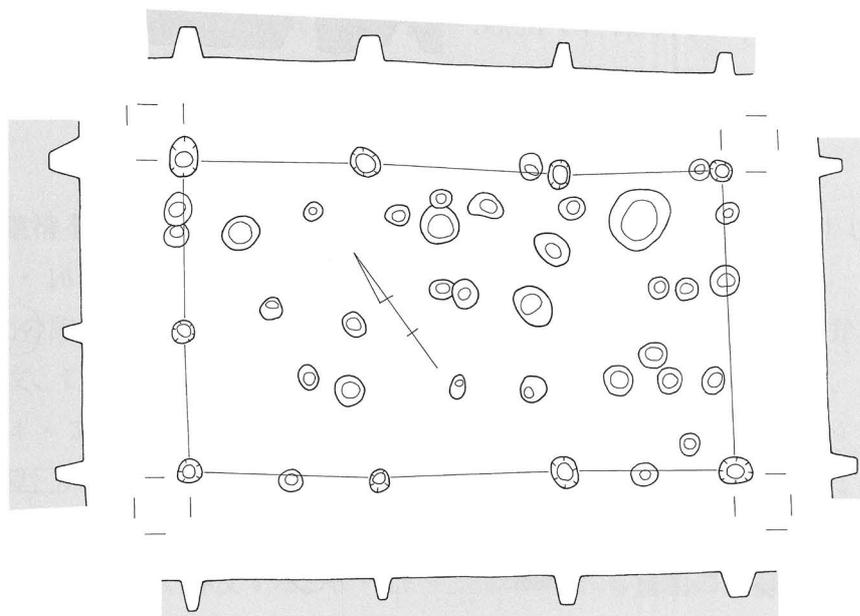
0 2m

第9図 SB2 実測図 (scale : 1/80)



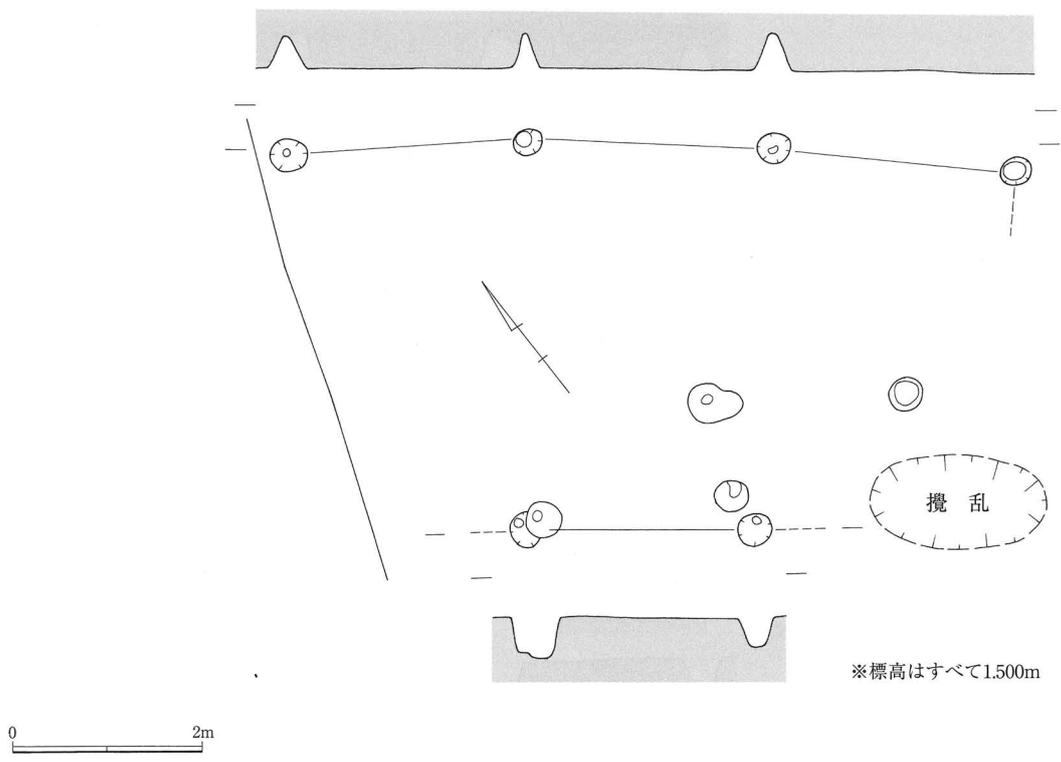
※標高はすべて1.500m

第10図 SB3 実測図 (scale : 1/80)

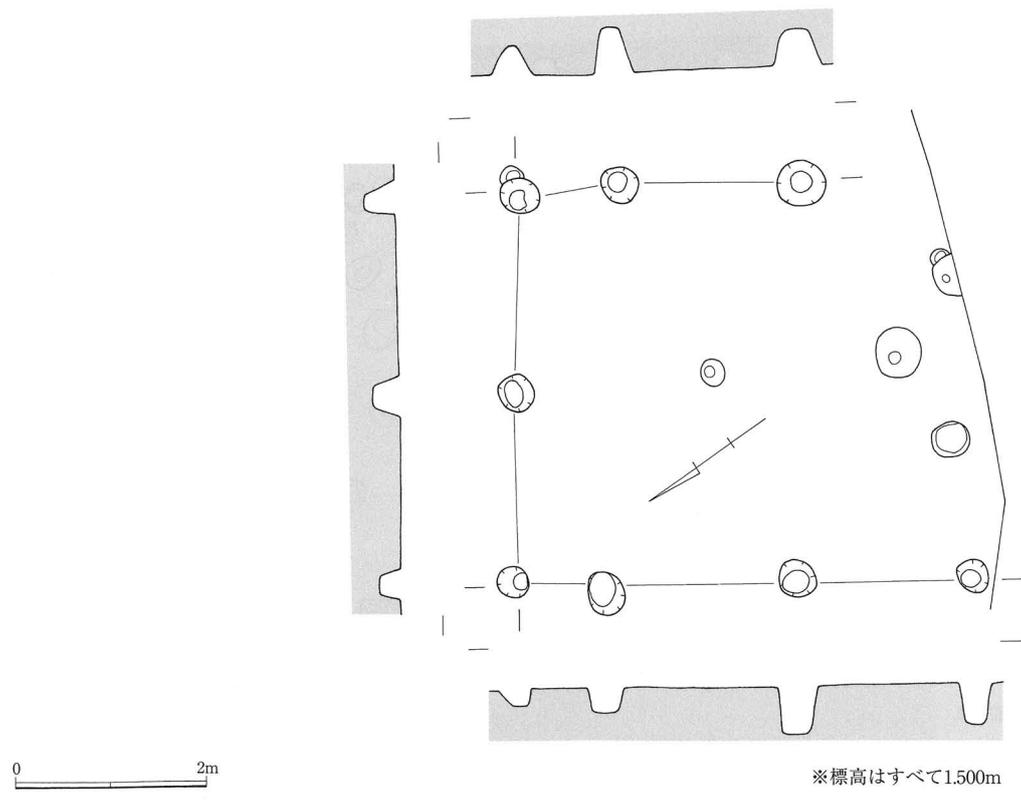


※標高はすべて1.500m

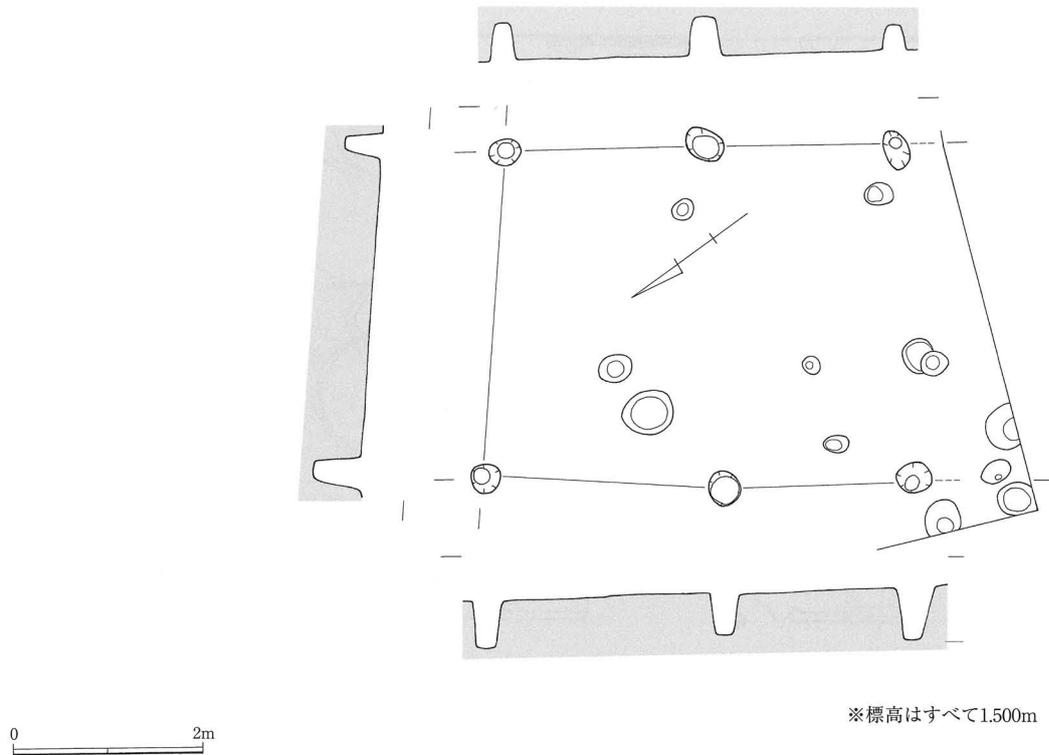
第11図 SB4 実測図 (scale : 1/80)



第12図 SB5 実測図 (scale : 1/80)



第13図 SB6 実測図 (scale : 1/80)



第14図 SB7 実測図 (scale : 1/80)

と出る。規模は桁行き2間(4.05m)、梁行き3間以上(1間0.89~2.05m)、柱穴の深さは17~52cmである。棟方向はN-34°-Eで、北側に庇部分を持つ。

SB7(7号掘立柱建物)

A2区の調査区南西角にて検出され、南半部分は調査区外へと出る。桁行き1間(3.48m)、梁行き2間以上(1間2.00~2.57m)、柱穴の深さ27~56cmで、棟方向はN-38°-Eである。

第3節 出土遺物

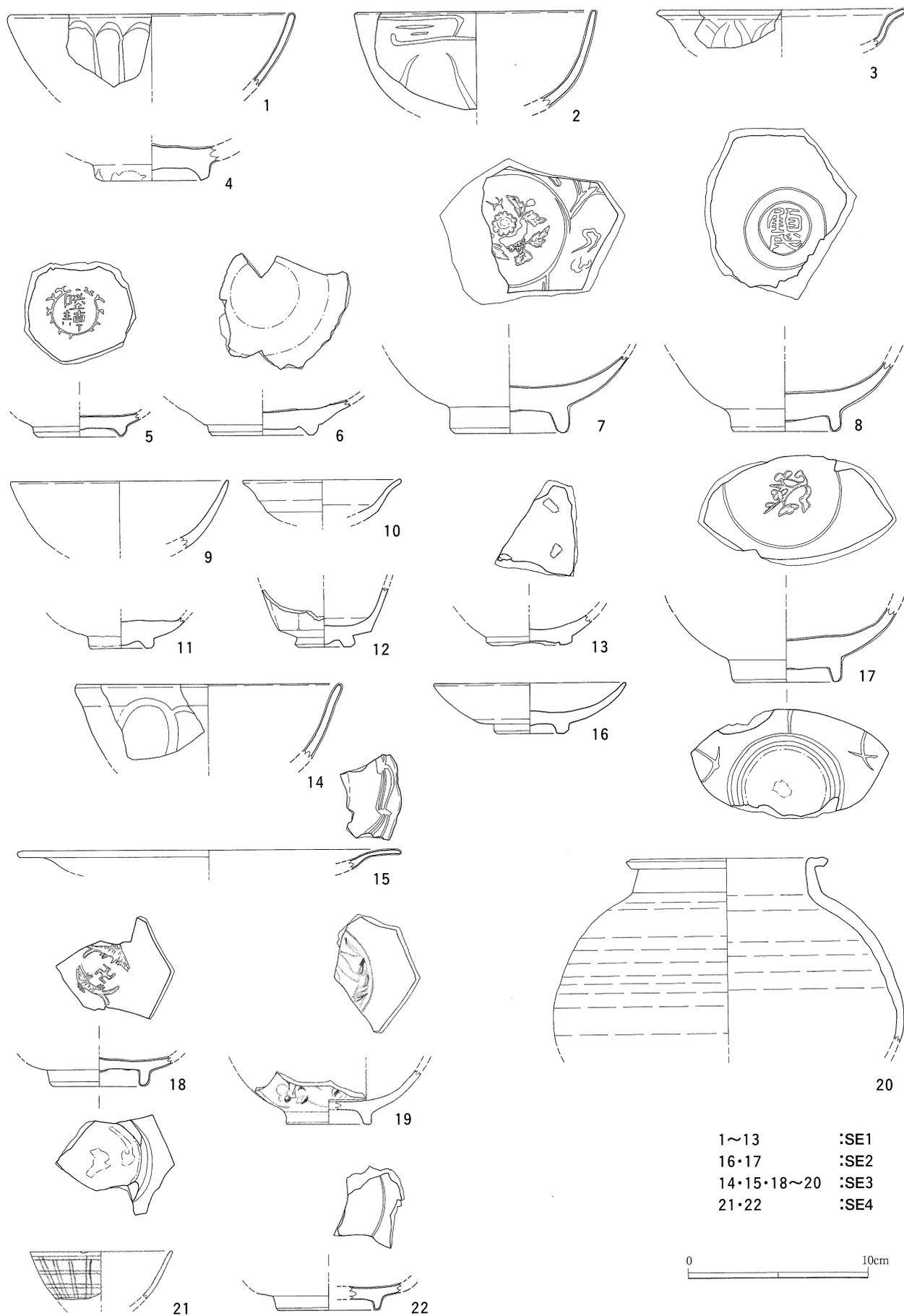
池開地区では溝状遺構を中心に、青磁をはじめ、多数の陶磁器類や土錘などが出土している。

a. 陶磁器類(第15・16図)

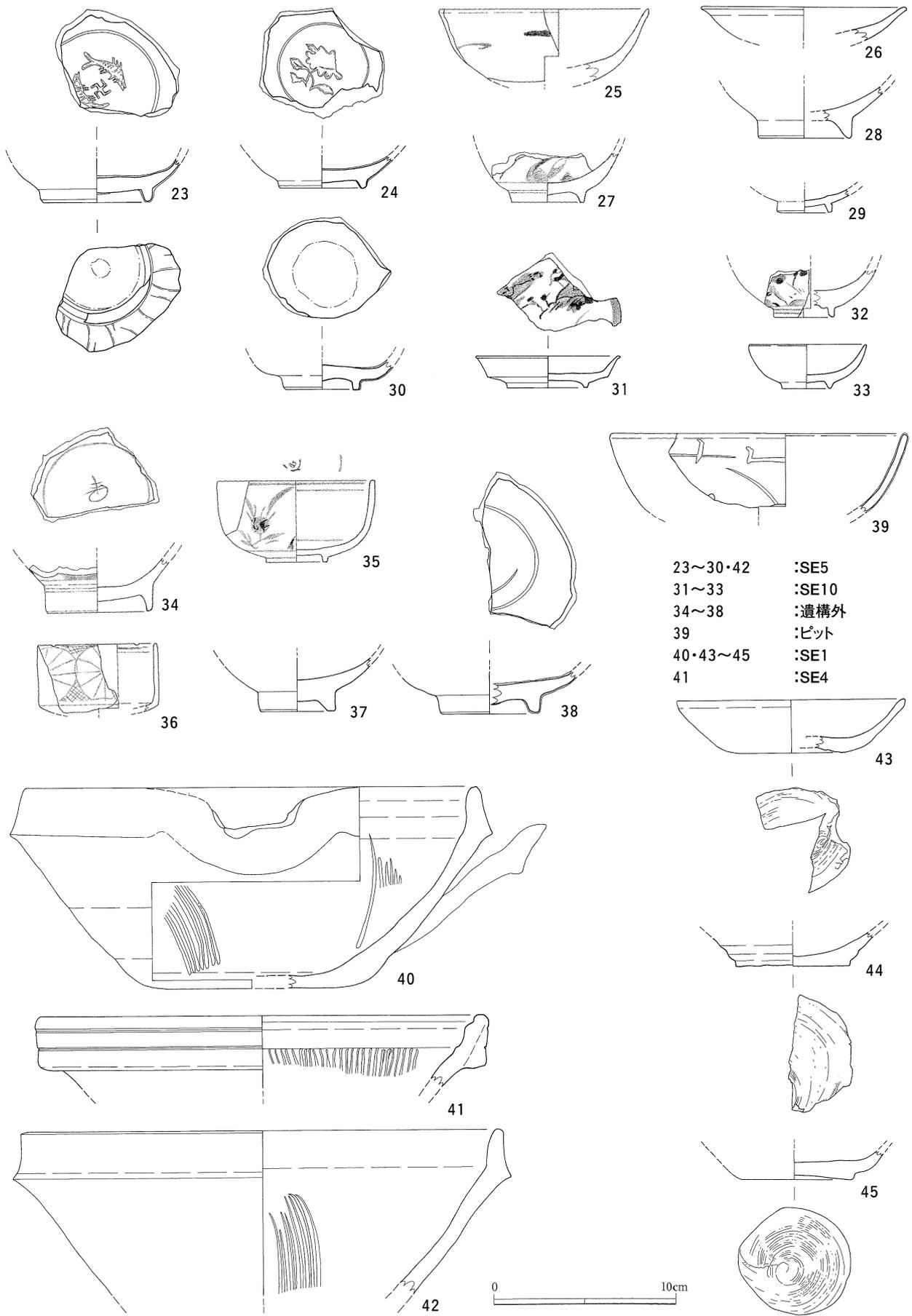
1~13はSE1出土の陶磁器である。1・2は青磁碗の口縁部で、1は丸彫の蓮弁文、2は胴部に片切彫の蓮弁文、口縁部に雷文帯が施されている。3は端反口縁の青磁皿で、片切彫の蓮弁文が施される。4・5・7・8は青磁の底部で、8は見込みに「願氏」銘が、7は草花文が、5は不明文字(陞□)が見える。1~7ともに中国龍泉窯の製品である。なお1は上田秀夫氏による分類(上田 1982)のB-Ⅲ類に、2はC-II-a類に該当する。9・10は白磁の口縁部で、10は口縁部が大きく外反する。6・11~13はいずれも施釉の陶器で、6は見込みに輪状の釉剥ぎが、13は胎土目が見える。12は多角坏である。

16・17はSE2出土の青磁と白磁である。17は龍泉窯の青磁碗で、外面には線刻による不明文様が、内面見込みには草花文が施される。高台断面の形状より、15世紀と判断される。16は白磁皿で、外面高台部は無釉である。

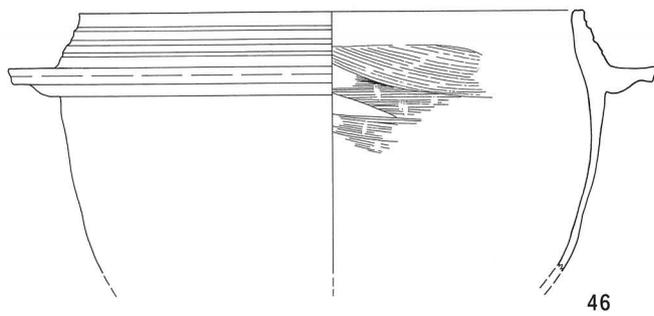
14・15・18~20はSE3出土のものである。14・15・18は龍泉窯の青磁で、14は丸彫蓮弁



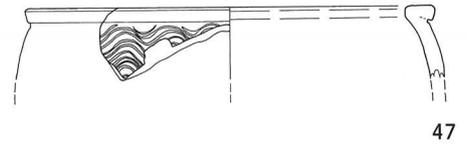
第15図 池開地区出土遺物実測図①(陶磁器) (scale : 1/3)



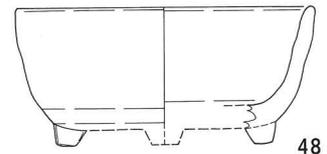
第16図 池開地区出土遺物実測図②(陶磁器・摺鉢・土師器) (scale : 1/3)



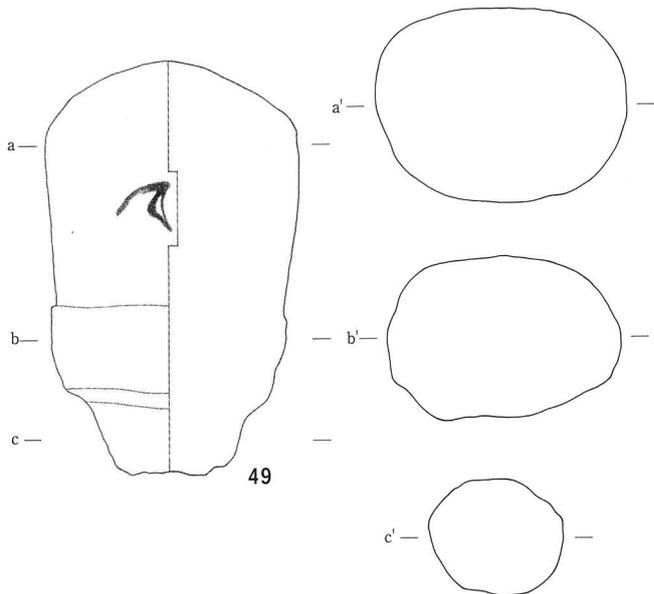
46



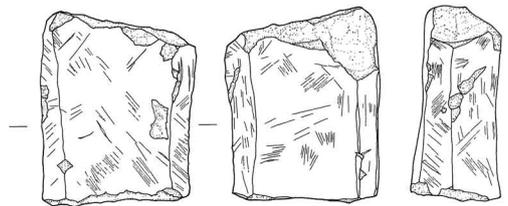
47



48



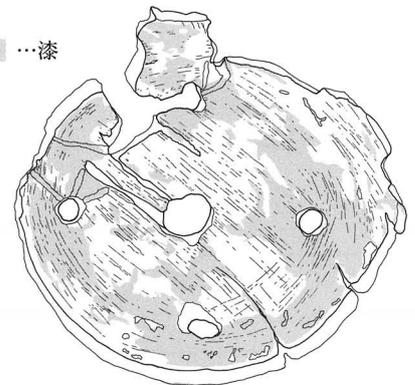
49



50

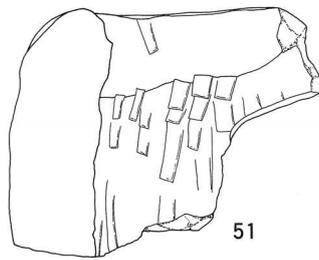
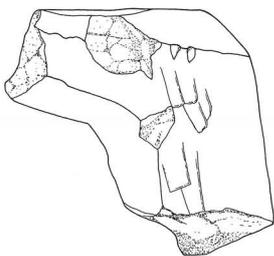
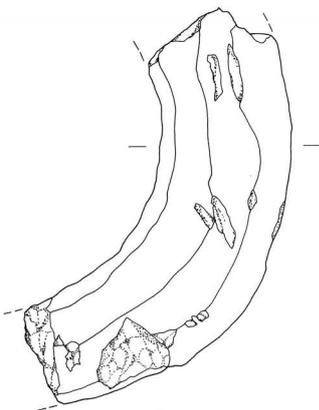


※ ...漆



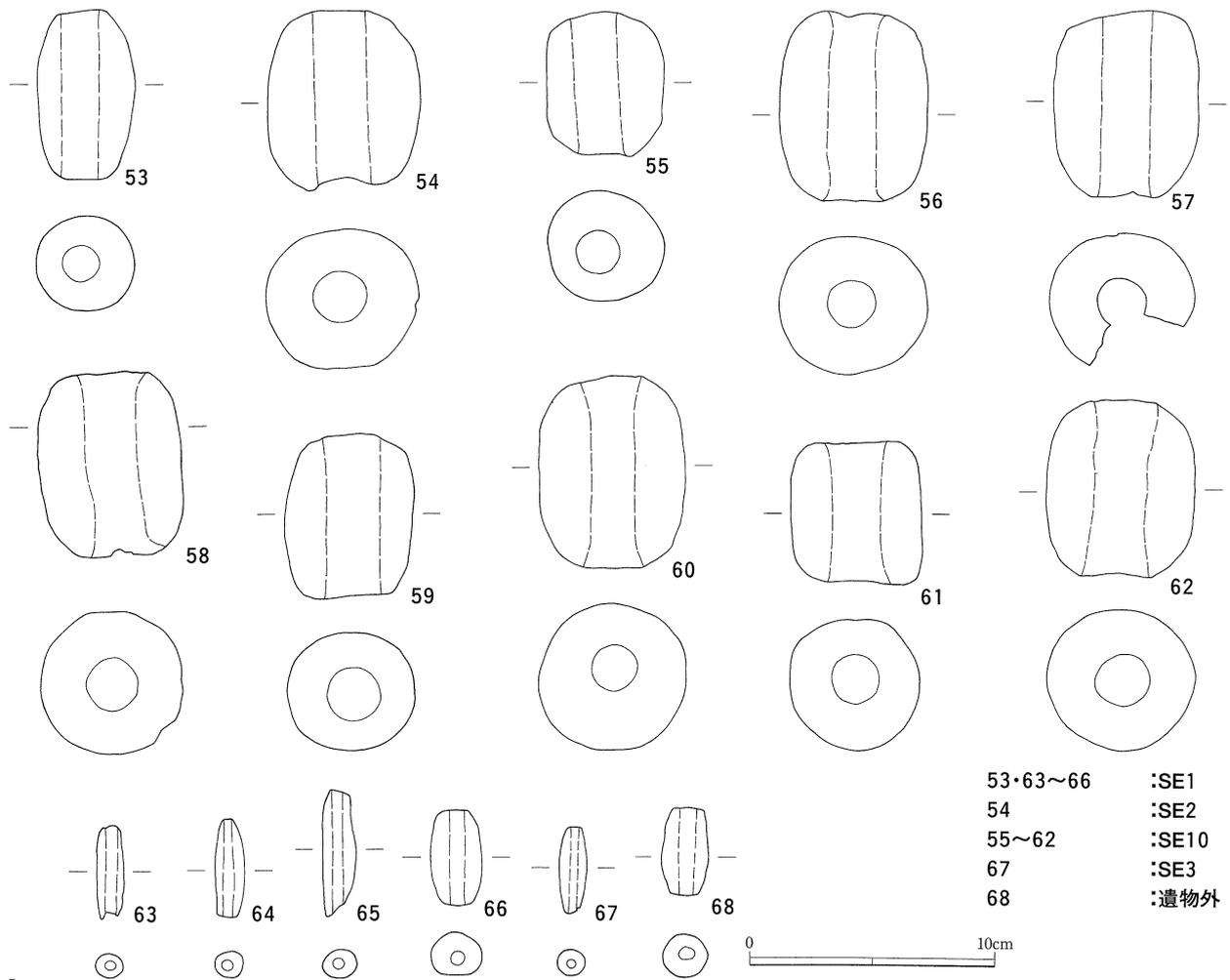
52

46 :SE2
 47 :SE8
 48・49 :SE3
 50・51・52 :SE1



51

第17図 池開地区出土遺物実測図③(その他土器類・石製品・木質遺物)(scale:1/3 ※49・51 1/4)



第18図 池開地区出土遺物実測図④ (土錘) (scale : 1/3)

文を施した埴、15は稜花皿である。18はSE3とSE10出土の破片が接合したもので、外面に片切彫の蓮弁文が、内面見込みには双魚文と、その中に卍文が施されている。14は上田氏による分類のB-Ⅲ類(15世紀)、18はB-Ⅱ類(14世紀末～15世紀)に該当する。19は染付で、外面に草花文、内面見込みに巻貝文かと思しき描写が見える。20は陶器の壺である。

21はSE4出土の染付で、外面に二重格子目文が施されている。22は同じくSE4出土の青磁底部である。

23～30はSE5出土の陶磁器類である。23・24・30はいずれも青磁の埴であり、23は外面に片切彫の蓮弁文が、内面見込みには双魚文と卍文が施される。この双魚と卍の文は、SE3およびSE10出土の18と同範のものであり、意匠はもとより、双魚と卍の位置関係も寸分の違いなく一致している。なお23は18と同様、上田氏による分類のB-Ⅱ類(14世紀末～15世紀)に該当する。24は見込みに草花文が見られ、30は蛇の目釉剥ぎが施されている。25・27は染付の埴で、両者とも外面に施文が見られる。26は端反口縁の白磁皿、28・29は施釉陶器である。

31～33はSE10出土の陶磁器で、31は染付の皿、32は同じく染付の埴である。31は見込み

に東屋などの風景が、32は外面に草花文が描写されている。33は磁器小塚である。

34～38は遺構外出土の陶磁器である。34・35は染付の塚で、34は見込みに簡略化された「寿」の文字が、35は外面に草花文が描写されている。36は小型の筒型塚で、口唇にかすかな刻みが施されている。38は龍泉窯の青磁塚で、見込みに線刻が見えるが、意匠は不明である。

39は掘立柱建物として抽出しえなかったピットの中から出土した青磁塚の口縁部であり、簡略化した雷文帯が見える。

b. 播鉢（第16図）

40～42は池開地区出土の播鉢である。40はSE1出土のもので、全体に輪積痕が残る。内面の櫛目は単位として完全に残るものがないが、1単位8本以上の原体を用い、下から上に施されている。41はSE4出土の口縁部で、内面のほぼ全面にわたって櫛目が施されている。小片ゆえに、1単位あたりの櫛目は抽出できなかった。42はSE10出土で、SE1出土の40に酷似する。櫛目は1単位あたり8本で構成され、下から上に向けて施されている。40と42は備前の製品で、14世紀後半～15世紀の所産である。

c. 土師器坏（第16図）

43～45は糸切り底の土師器坏で、全体に摩滅が激しい。3点ともSE1からの出土である。全形を復元しうるのは43のみで、口径11.8cm、底径8.9cm、器高3.0cmである。

d. その他土器類（第17図）

46はSE2出土の土製はがまである。口縁部に3条の沈線を巡らせ、外面には全面に煤が付着する。器壁は薄く、加えて全体的に軟質である。

47はSE8より出土した土師質の小型甕である。全面に櫛描きの波状文が施されている。

48は台形の小さな脚を4本持つ、土師質の塚である。全体に磨耗が激しい。SE8出土。

e. 石製品（第17図）

49はSE3より出土した五輪塔の空風輪である。砂岩製で、表面は風化が激しいが、墨で書かれたと思しき梵字が残る。

50はSE1から出土したもので、砥石かと思われる。残存するすべての面において、1方向に限らない擦り痕が無数に残る。

51はSE1出土のかまどである。砂岩製で、前面の火焚き部分や、はがま等を置く上部の内面などに煤が付着している。内面には製作時の鑿痕が深い溝として顕著に残るが、外面は比較的丁寧な成形がなされ、特に火焚き部は表面平滑に整えられている。

f. 木質遺物（第17図）

52はSE1出土の漆器であり、表面に塗られた漆もいくらか残存している。クスノキ製の椀で、口径17.3cm、底径7.3cm、器高5.9cm、高台部の中央に最大径2.0cmの孔が穿たれ、さらにその高台部を囲むように、径1.0cm前後の孔が4つ、規則正しく配されている。内外面ともに透明漆が塗布され、下地として渋柿に木炭粉を混和した、黒色の炭粉渋下地が用いられている。この漆は底面に穿たれた孔の穿孔面においても一部残存している。加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定では、1440AD - 1480ADとの結果が出ている。

なお、表面に塗布された漆が底面の孔の穿孔面にも見られるということは、これら5つの孔は木椀の「転用」として二次的に開けられたものではなく、製作の段階から存在していたと理解できる。つまりこの漆器は底に5つの孔を持つ製品として作られたものということになるが、残念ながらこの漆器の用途については、現段階では不明とせざるをえない。

g. 土錘（第18図）

53～62は大型の土錘である。53はSE1、54はSE2出土、それ以外はすべてSE10からの出土である。53はこの中では小振りな方であるが、長さ7.2cm、幅4.1cm（長さ、幅ともに最大値）、孔径1.5cmで、重量は92.2 gである。最も大型の60に至っては、長さ8.2cm、幅6.1cm（長さ、幅ともに最大値）、孔径2.5cmで、重量は260 gである。

63～68は小型の土錘で、63～66はSE1、67はSE3、68は遺構外からの出土である。いずれも長さは4cm前後、幅は1.5cm前後、孔径0.5cm前後で、重量には多少ばらつきがあり、最小の63で4.0 g、最大の66で16.9 gである。

【参考文献】

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会

第Ⅳ章 江口地区の調査

第1節 調査の概略

江口地区で調査の対象としたのは、周囲の水田部に比して若干レベルが高く、旧来の地形をとどめていると思しき荒蕪地の部分である。平成13年の試掘調査時にも、周りの水田部では地山深くまで削平がおよび、遺構等の残存を確認できなかったのに対し、この荒蕪の部位では遺構の存在が確認されている。

江口地区における基本層序は、池開地区に準じるものである。遺構検出面も池開地区と同じⅡ層であり、現地表より0.5～1.0mほどの高さにある。

江口地区における発掘調査面積は2,665m²である。

第2節 遺構

江口地区においては溝状遺構17条、土坑3基、ピット510基（うち掘立柱建物4棟）を検出した。以下にその詳細を述べる。

a. 溝状遺構

SE1（1号溝状遺構）

調査区北端にコーナーを持ち、北東－南西方向、北西－南東方向にそれぞれ直線的に延びる溝である。コーナーの角度は約70°であり、直角とは言い難い。北西－南東方向部分の東端、および北東－南西方向部分の南端それぞれにおいて収束する。特に北東－南西方向部分の収束部では、底面をさらに10cmほど掘り込み、明確な始点ないし終点を設けている。

現況の規模は長さ84.8m、幅は最大で1.56m、底面幅は最大0.70m、最深部の深さ0.81m（南西収束部を除く）である。北東－南西方向部分においては、おおむね0.50～0.60mの深さを持って延びるが、北西－南東方向部分では東に行くにつれて深度がなくなり、東端収束部近くでは0.20m以下となる。

遺物は青磁、白磁、染付、陶器などが多数出土しているほか、弥生土器の底部が1点出土している。

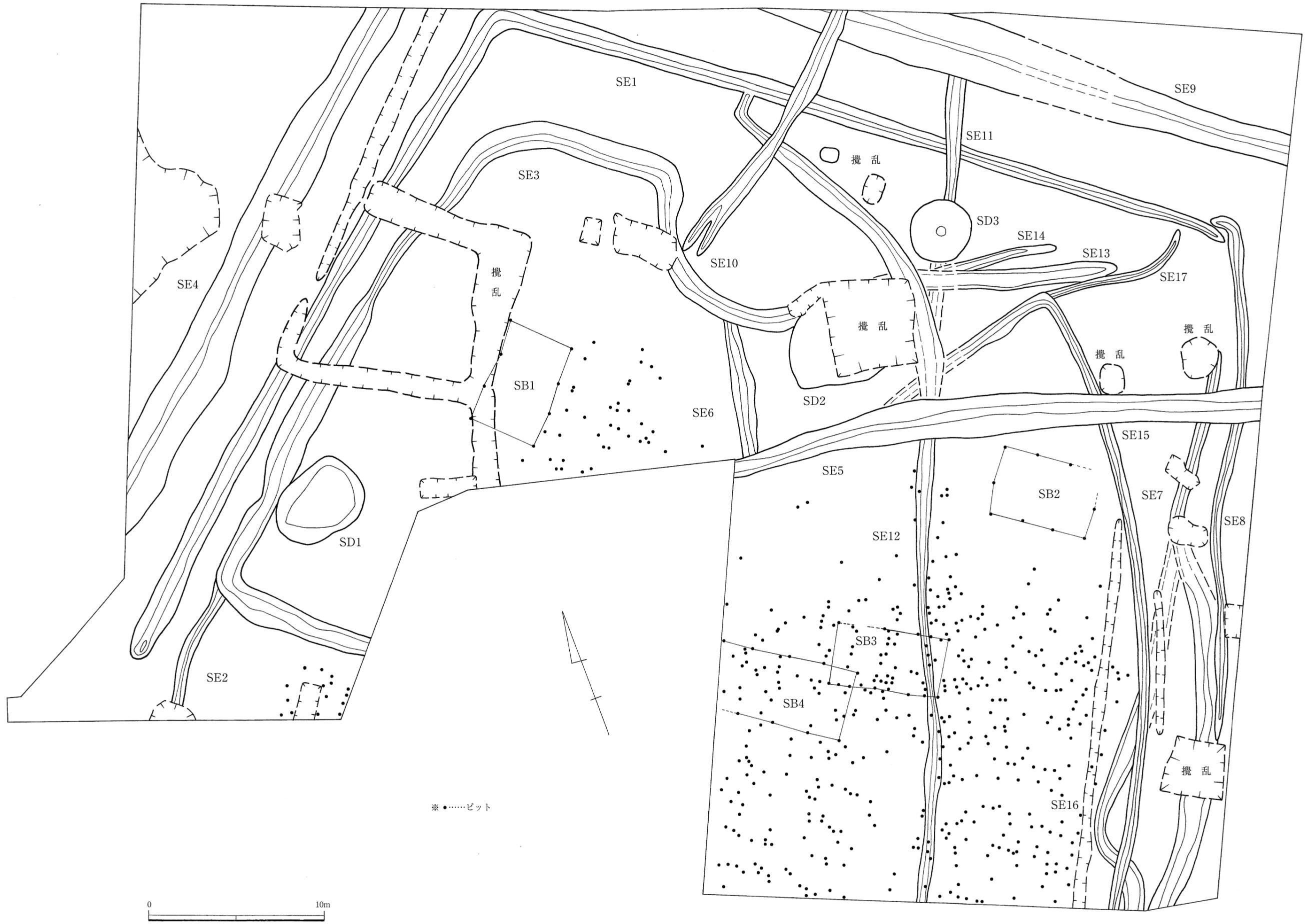
遺物の出土傾向としては、平面的に、あるいはレベル的に、偏重は見出されず、また中世の青磁片が溝の上位、下位を問わず出土しており、池開地区における溝状遺構と同じく、長年にわたって、埋土が攪拌されていたものと考えられる。

なお、埋土中より桜島3テフラ（Sz-3 桜島火山起源 1471年噴出）が検出されている。

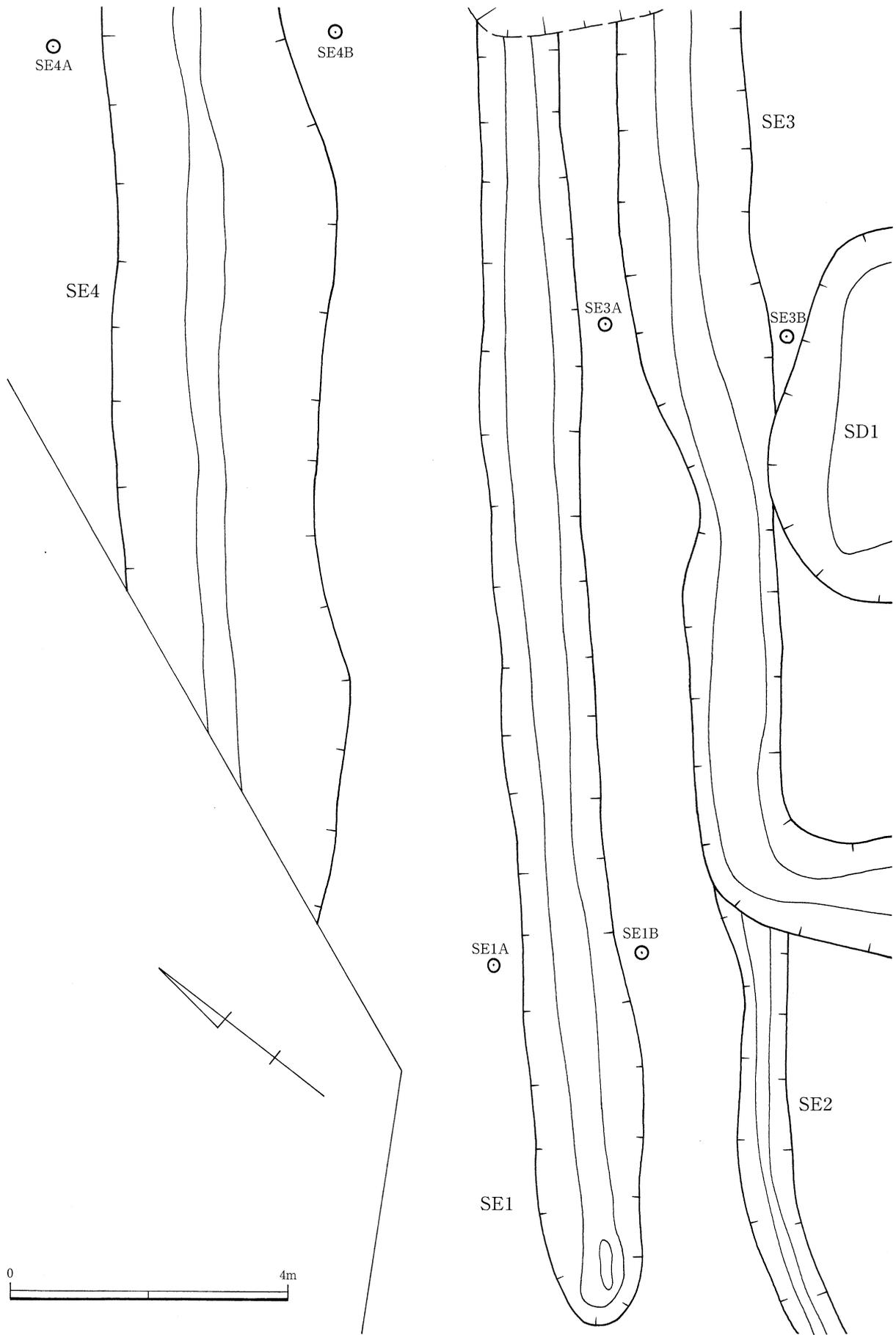
SE2（2号溝状遺構）

調査区南西部において検出された溝であり、SE3のコーナー部によって切られる。検出された部位の規模は、長さ6.4m、幅0.60～0.80m、底面幅0.12～0.32m、深さは最深で0.27mである。陶器片数点が出土している。

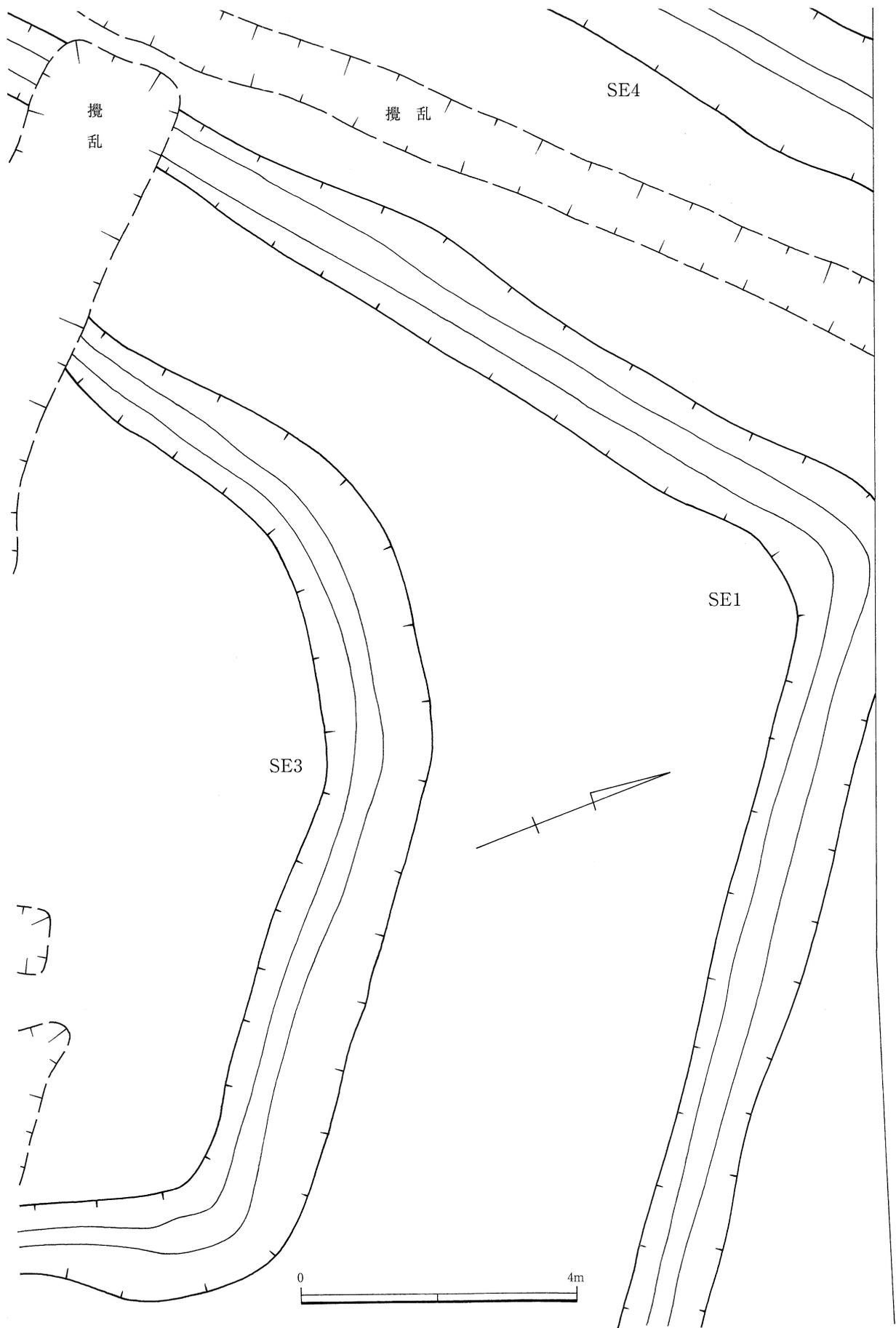
なお先述のとおり、本遺構はSE3のコーナー部によって切られるのであるが、他の位置において、このSE2の続きと思しき溝は見つからない。したがって、SE2は本来、SE3と同一



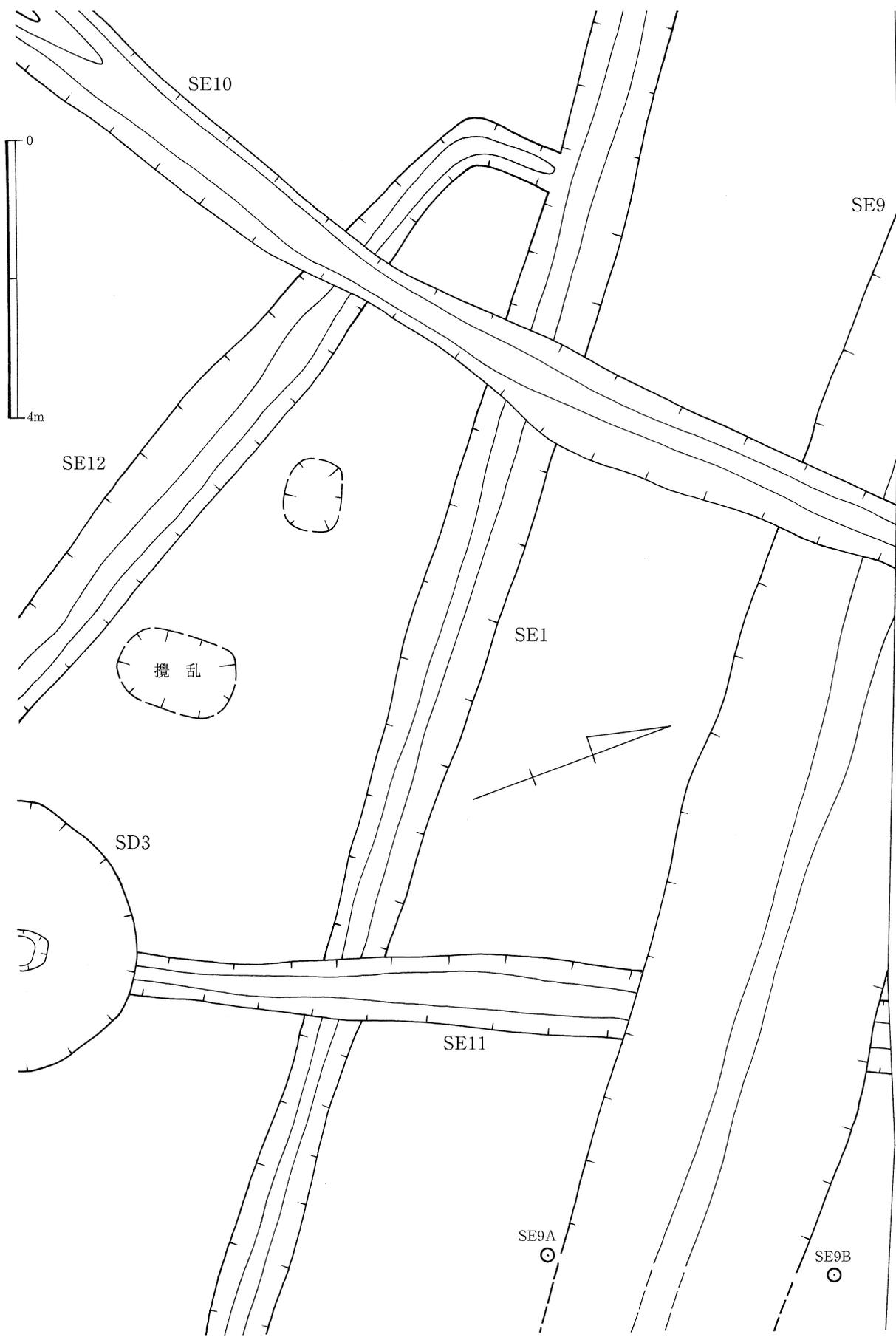
第19図 江口地区遺構配置図 (scale:1/200)



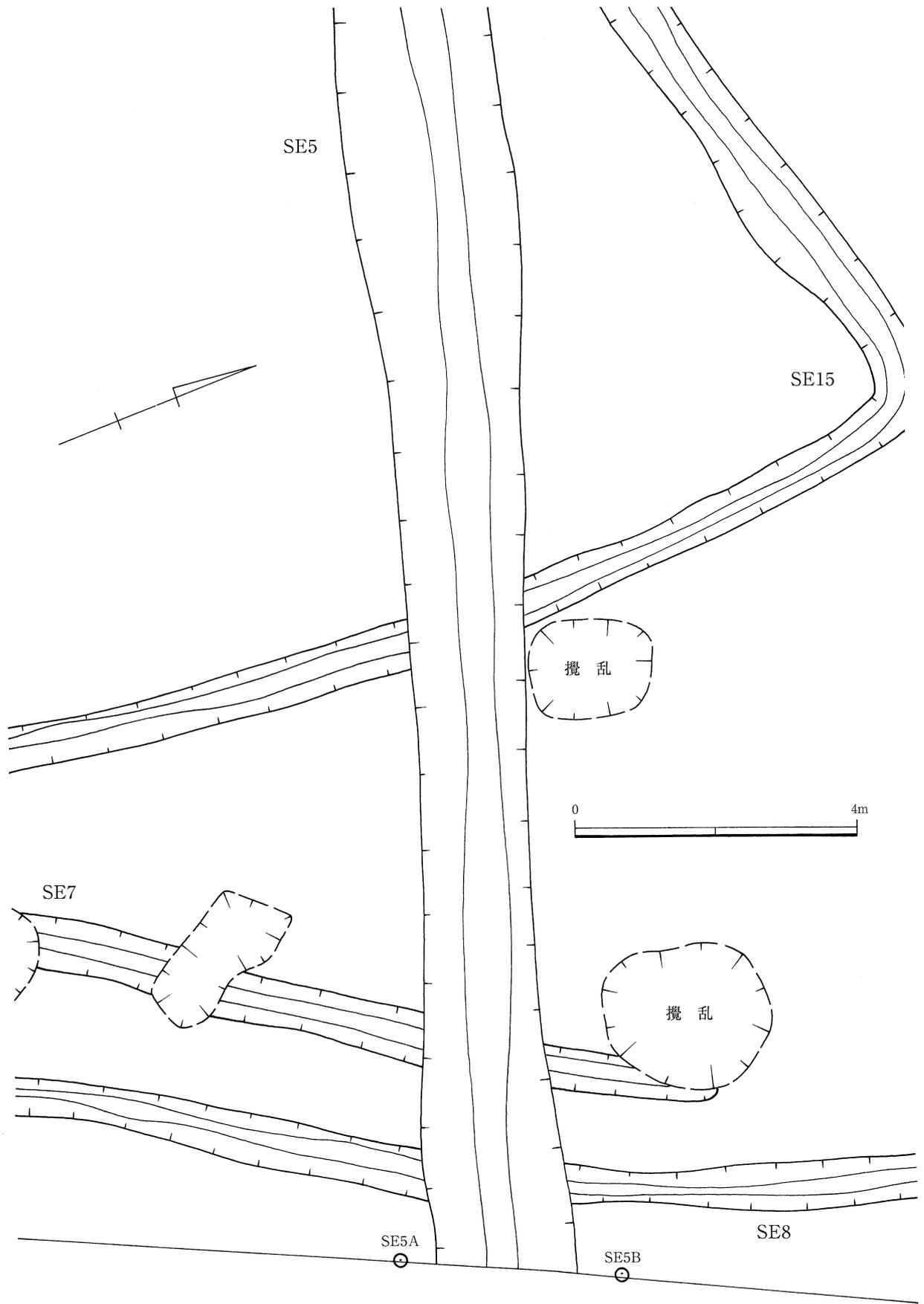
第20図 溝状遺構実測図① (南西部) (scale : 1/80)



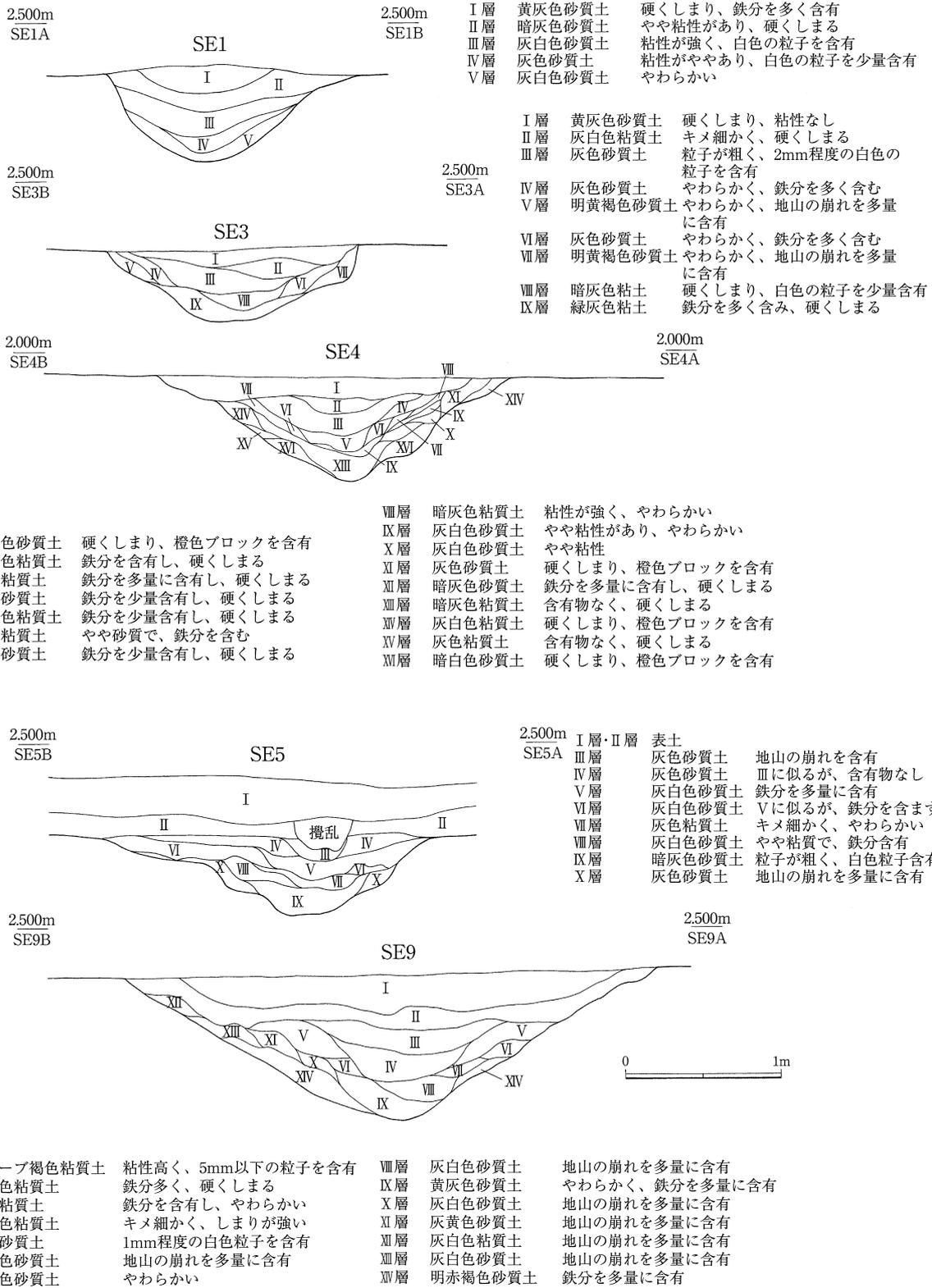
第21図 溝状遺構実測図②（北西部）（scale : 1/80）



第22図 溝状遺構実測図③ (北東部) (scale : 1/80)



第23図 溝状遺構実測図④ (東部) (scale : 1/80)



第24図 溝状遺構土層断面図 (scale : 1/40)

の溝であり、後にSE3の南西部コーナーが作られたものと考えられる。

SE3（3号溝状遺構）

3箇所のコナー部を持つ溝である。調査区西部の東壁から北西-南東方向に延びた後、直角に近い角度で折れ曲がり、北東-南西方向にほぼ直線的に延びる。そののち屈曲して再び北西-南東方向に延びるが、三たび折れ曲がり、南東方向にゆるく弧を描いて延び、調査区中央部やや東寄りに位置するSD2および攪乱によって切られる。現状の規模は全長61.1m、幅0.54~1.96m、底面幅0.18~0.79m、深さは最深で0.48mである。北東-南西方向部分の中程、やや北寄りの部位では、急激に幅が狭まり、深さも0.1m前後となるが、コーナー部に近くなるとふたたび本来の幅と深度となる。

遺物は青磁、白磁、陶器などが出土している。また本遺構より出土した播鉢と思しき陶器の破片（第33図142）が、後述のSE5と接合関係にあり、SE3はSE5と同一の溝であると考えられる。出土傾向としてはSE1と同じく、平面やレベルでの偏重は見られず、遺物別での相関関係も見られない。

また、埋土中からは桜島3テフラとともに、溝の上位からは霧島新燃享保テフラ（Kr-SmK 霧島火山起源 1717年噴出）が検出されている。

SE4（4号溝状遺構）

調査区西端において検出された、北東-南西方向に直線的に延びる溝である。現状の規模は長さ33.2m、幅1.80~3.16m。底面幅は0.24~0.56mと狭く、断面V字状に立ち上がる。最深部の深さは0.71mである。

規模の割りに遺物は意外と少なく、青磁片や染付のほか、数点の陶器片があるのみであった。北半部での遺物の出土はなく、皆、南半部での出土である。

SE5（5号溝状遺構）

調査区東半部のほぼ中央を東-西方向に直線的に流れる幅広の溝であるが、調査区南東部の西壁近くでは、やや幅が狭くなる。現状の規模は長さ30.5m、幅1.00~2.30m、底面幅は0.24~0.70m、最深部の深さ0.52mである。

遺物は青磁、染付、播鉢などが出土している。出土傾向としては他の溝と同じく、溝の上位、下位に偏ることはない。

また、SE3の項で述べたとおり、SE5出土の陶器片がSE3出土のものと接合しており、SE3とSE5は同一の溝であると考えられる。

SE6（6号溝状遺構）

調査区のほぼ中央において検出された、北-南方向に直線的に延びる溝であり、北に位置するSE3、南に位置するSE5に切られる。検出された部位の規模は、長さ7.5m、幅0.72~1.34m、底面幅0.19~0.40m、深さは0.15m前後である。

遺物は染付片など数点が、遺構上面より出土しているのみである。

SE6はその北端と南端において、SE3とSE5に切られているのであるが、不思議なことにそれぞれの先においてSE6の続きは検出されていない。先述のとおり、SE3とSE5は同一の溝と

考えられるのであるが、SE6もまた、もともとはこれらと同一の溝であったと理解できる。SE6埋没ののち、SE3およびSE5部分のそれぞれにおいて、東への延長部分が作られたのであろう。

SE7（7号溝状遺構）

調査区南東端より北-南方向に蛇行しながら伸びたのちSE5に切られ、その後、調査区東端の中程で収束する。現況の規模は長さ32.2m、幅は最大で1.60m、底面最大幅は1.02m、深さは0.15m前後である。

遺物は青磁の皿などが出土している。

SE8（8号溝状遺構）

調査区東端で検出された、北-南方向に伸びる細い溝である。現況の規模は長さ31.4m、幅は最大で0.86m、底面最大幅は0.30m、深さ0.10m前後である。SE7と同じく、SE5に切られ、北端、南端のそれぞれにおいて収束する。遺物の出土は見られなかった。

SE9（9号溝状遺構）

調査区北東端において検出された、北西-南東方向に直線的に流れる溝であり、SE10に一部切られている。大型の溝であるが、東端および北端はそれぞれ調査区外へと出、その全容を知ることにはできない。現況の規模は長さ31.8m、幅1.70～3.32m、底面幅0.28～0.62m、最深部の深さは0.96mである。SE4と同じく、底面の幅が狭く、断面V字状である。

遺物は青磁、白磁、陶器などが出土している。

遺構平面での検討より、SE4と同一の溝である可能性が高い。また、埋土中より桜島3テフラが検出されている。

SE10（10号溝状遺構）

調査区北端より、SE9、SE12を切って北東-南西方向に流れ、SE3にぶつかる直前に、二股に分かれて収束する。現状の規模は長さ16.1m、幅は最大で1.34m、底面最大幅0.64m、深さは0.10m前後である。遺物の出土はほとんどなかった。

SE11（11号溝状遺構）

調査区北端より始まり、SE9、SD3に切られながら、北-南方向に直線的に伸びる溝である。現状の規模は長さ7.1m、幅0.60～1.04m、底面幅0.18～0.50m、深さは0.10m未満であった。遺物の出土はない。

SE12（12号溝状遺構）

調査区南東部南壁より出て、北-南方向にやや蛇行しつつもほぼ直線的に伸びる。調査区中央部付近でSE5に切られた後、東にふくらむゆるやかなカーブを描きつつ北西に伸びる。さらにSE10に切られた後、北東-南西方向に屈曲し、SE1に連結して収束する。規模は、長さ50.1m、幅0.42～1.48m、底面最大幅0.56m、最深部の深さ0.21mである。遺物は磁器の碎片が数点出土している。

SE13（13号溝状遺構）

調査区北東部、SD2の東に位置する、東-西方向に伸びる溝である。検出した長さは8.3m

で、SE17に切られた直後に収束する。規模は最大幅1.20 m、底面最大幅0.80 m、最深部の深さ0.08 mである。青磁の稜花皿が出土している。

遺構平面の関係より、SD2に切られたSE3の続きかとも思われるが、確証はない。

SE14 (14号溝状遺構)

SE13の北に隣接して検出された東-西方向の溝である。SE13に切られており、長さ5.8 mで収束する。検出部分の規模は最大幅0.58 m、底面最大幅0.30 m、深さは0.05 m前後である。遺物の出土はない。

SE13と同じく、遺構平面の関係より、SE3の続き部分である可能性が考えられる。

SE15 (15号溝状遺構)

調査区南東部の南壁、東寄りの地点より始まり、若干、西に屈曲しながらも、北-南方向に延びる。SE5に切られながらもさらに北に延び、SE13に接する直前、南西方向にほぼ90°折れ曲がる。収束部分の検出はされなかったため、SE5ないしSE12に結合するのではないかと考えられる。現状の規模は長さ40.8 m、幅0.58~0.98 m、底面幅0.10~0.32 m、最深部の深さ0.26 m、遺物の出土はない。

SE16 (16号溝状遺構)

調査区南東角近くの南壁より、北に大きく蛇行しながら延びる溝である。SE15に切られた後の流れは、攪乱等に阻まれて確認することができなかったが、おそらくはSE8に連結する溝であろう。検出部分の規模は長さ13.2 m、幅0.60~1.14 m、底面幅0.24~0.72 m、深さは最深で0.32 m。遺物の出土はなかった。

SE17 (17号溝状遺構)

調査区北東部、SE15のコーナー部より出て、ゆるやかに弧を描きながら東に延び、北方向に屈曲してSE1に接する手前で収束する。検出した規模は長さ8.7 m、最大幅0.50 m、底面最大幅0.19 m、深さは最深部でも0.10 m未満であった。遺物の出土はない。

SE15のコーナーに切られる部位では、他の場所にSE17と思しき溝が存在しないため、本来、SE15と同一の溝であったと考えられる。

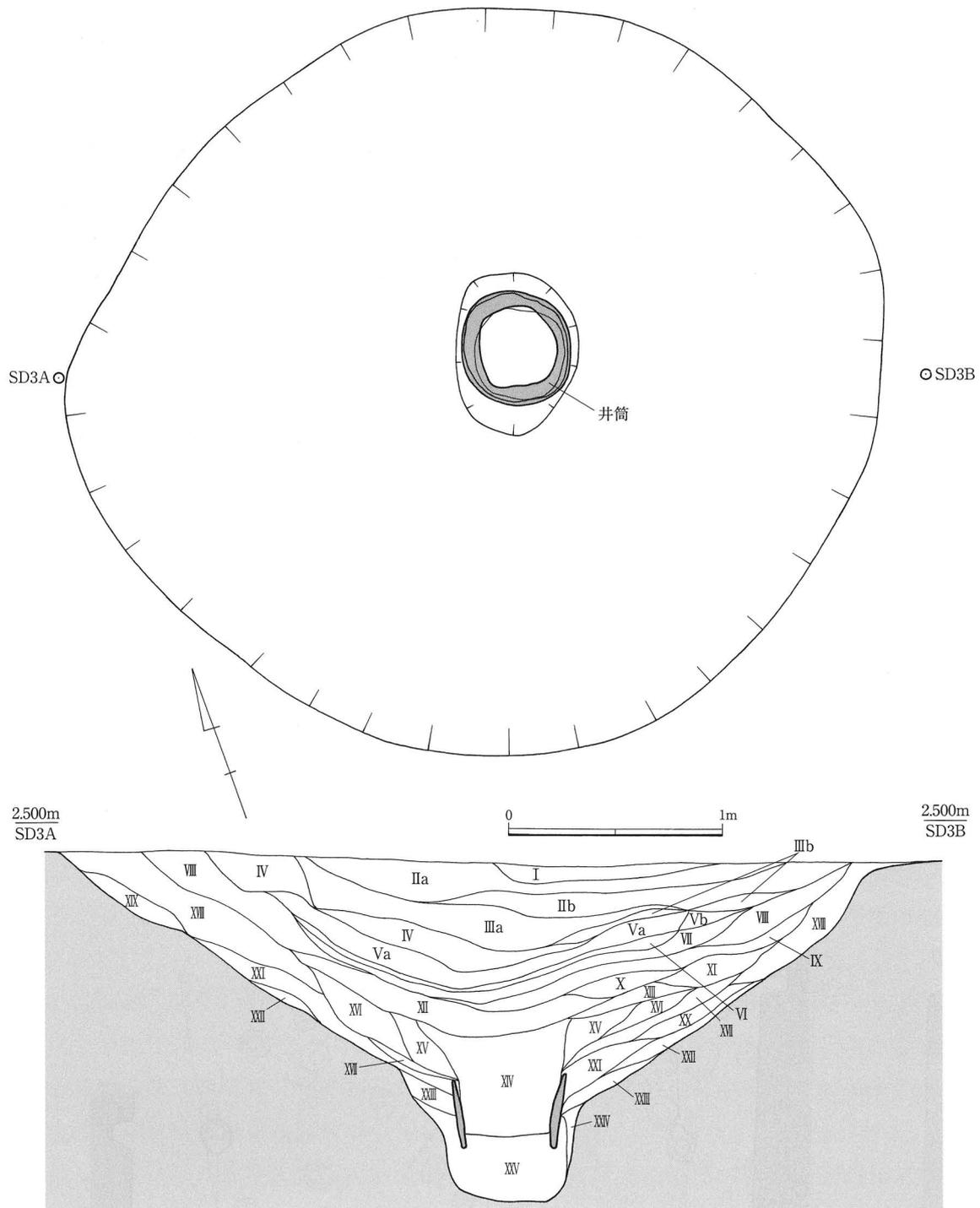
b. 土坑

SD1 (1号土坑)

調査区南西部、SE3の一部を切って存在する土坑である。長軸を北東-南西方向に持つ平面楕円形で、深さは最深部で0.23 mときわめて浅く、平坦で広い底面と急峻な立ち上がりを持つ。平面の規模は長軸5.44 m、短軸3.70 m、底面規模は長軸4.40 m、短軸2.76 mである。遺物の出土はほとんどなく、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

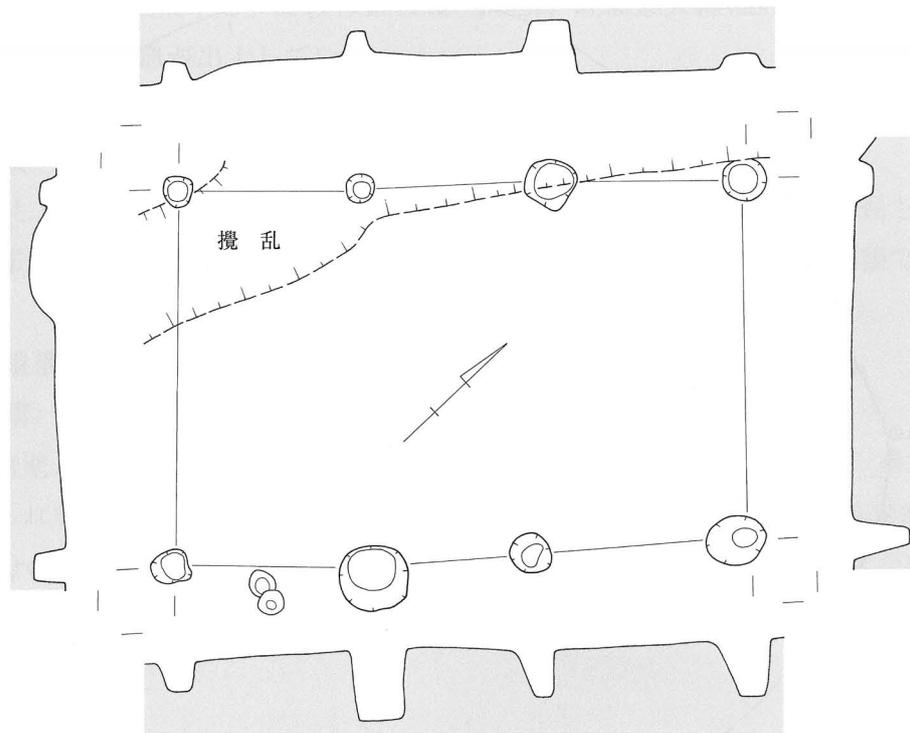
SD2 (2号土坑)

調査区中央やや東寄りに存在する大型の土坑であるが、残念ながらその大半を攪乱で破壊されている。平面不整形の円形で、規模は直径5.5 m以上と思われる。2m以上掘り下げを行ったが、攪乱によって底面を確認することはできなかった。遺物は陶器、白磁、染付等、土坑の上位、下位を問わず出土している。



I層	明灰色砂質土	硬くしまる	XII層	暗灰色粘質土	キメ細かい
II層 a	暗灰色砂質土	硬くしまる	XIII層	灰白色砂質土	粘性があり、橙色ブロックを含有
II層 b	暗灰色砂質土	aに類似するが、白色粒子を含有	XIV層	暗灰色粘質土	粘性が強く、やわらかい。木の葉を含む
III層 a	黄色砂質土	橙色ブロック（地山の崩れ）を含む	XV層	灰色粘質土	キメ細かい
III層 b	黄色砂質土	aに類似するが、橙色ブロックはまばら	XVI層	暗灰色粘質土	灰白色粘質土のブロックを含む
IV層 a	灰白色砂質土	砂質が強く、白色粒子を多量に含有	XVII層	灰白色砂質土	やや粘性あり
IV層 b	灰色砂質土	やや粘性で、白色粒子をまばらに含む	XVIII層	明黄褐色砂質土	地山の崩れを含有
V層 a	灰色砂質土	aに類似するが、鉄分多量	XIX層	明黄褐色砂質土	XIIIに類似するが、より地山に近い
V層 b	灰色砂質土	IIIに類似するが、白色粒子を含有	XX層	灰白色砂質土	しまりがなく、やわらかい
VI層	黄色砂質土	含有物なし	XXI層	灰色砂質土	やや粘性で、植物質が混入
VII層	黒色砂質土	砂のブロックを含有	XXII層	灰色砂質土	やわらかく、鉄分を若干含有
VIII層	褐色砂質土	地山の崩れと思われる	XXIII層	明黄褐色砂質土	地山の崩れ
IX層	黄色砂質土	粘性が強く、硬くしまる	XXIV層	明黄褐色砂質土	XIIIに類似するが、よりやわらかい
X層	暗灰色砂質土	地山の崩れを含有	XXV層	明黄褐色砂質土	XXIVに類似するが、よりやわらかい
XI層	褐色砂質土				

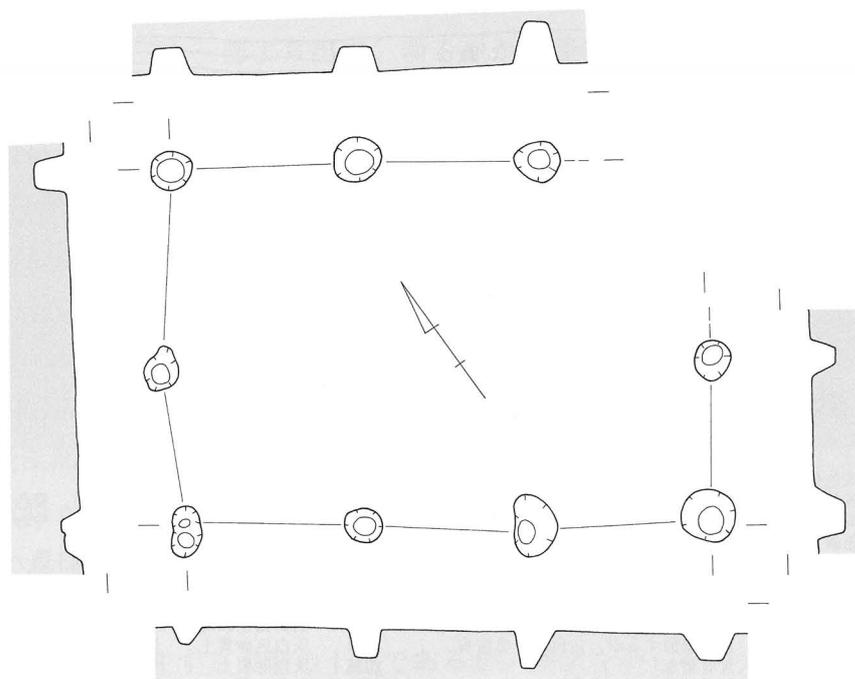
第25図 SD3平面および土層断面図 (scale : 1/30)



0 2m

※標高はすべて2.500m

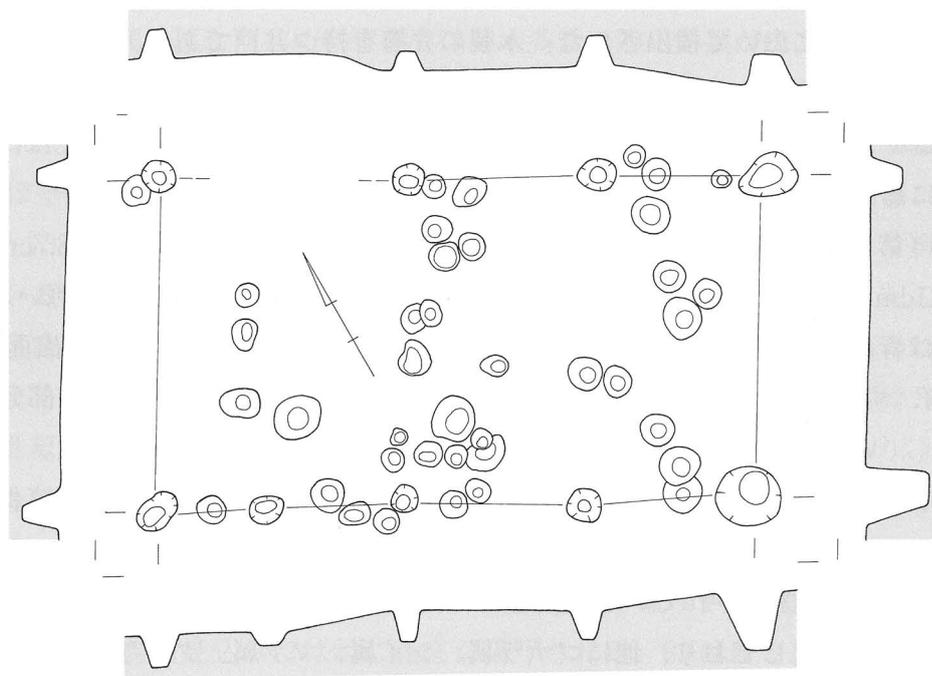
第26図 SB1実測図 (scale : 1/80)



0 2m

※標高はすべて2.500m

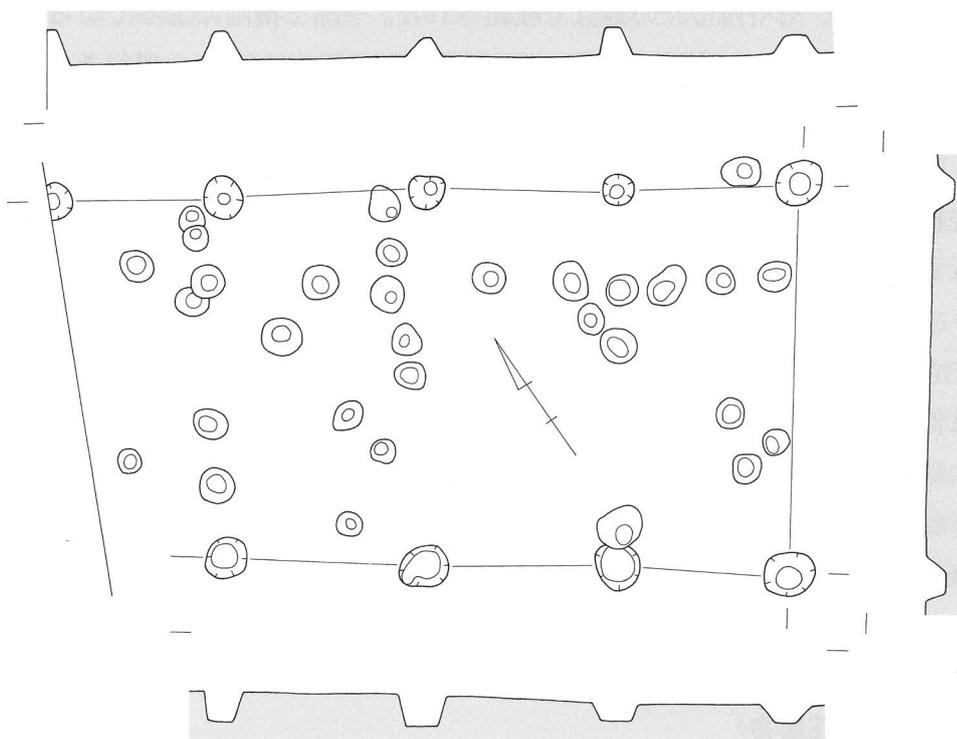
第27図 SB2実測図 (scale : 1/80)



0 2m

※標高はすべて2.500m

第28図 SB3実測図 (scale : 1/80)



0 2m

※標高はすべて2.500m

第29図 SB4実測図 (scale : 1/80)

SD3 (3号土坑 井戸)

調査区北東部において検出された、木製の井筒を持つ井戸である。平面形はほぼ真円で、最大径3.59m、深さは1.61m、底面の径0.53mである。検出面より下へ0.9mほどは、比較的勾配のゆるやかなすり鉢状の壁面であるが、中央に設置された井筒の上面とほぼ同じ高さからほぼ垂直に落ち込み、底面へと至る。

井筒(第34図149)はクスノキを削り貫いたもので、上部の直径は53.7cm、下部44.3cm、高さ35.1cmで、井戸の底面に設置されていた。詳細については次節を参照いただきたい。

遺物は青磁、白磁、陶器、播鉢などが出土している。遺物の出土は検出面よりのレベル50cm以内、すなわち、すり鉢状部分の上半部に限られている。底面や井筒部分からの遺物の出土はなく、いわゆる井戸祭祀に伴うと思しき遺物や痕跡は見出せなかった。

埋土中からは桜島3テフラが検出されるとともに、上層からは霧島新燃享保テフラが検出されている。また井筒内埋土の植物珪酸体分析では、イネ属が3,300/g、メダケ(雌竹・女竹)属が147,500/g採取されている。同じく井筒内埋土の花粉分析においては、樹木花粉ではマテバシイ属が卓越しており、他にコナラ属、シイ属、マツ属、クリなどが、草本花粉ではイネ科が、次いでカヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、ソバ属、アブラナ科などが検出されている。井筒の放射性炭素年代測定では、1450AD - 1515ADという値が出ている。

c. 掘立柱建物(ピット)

検出された総数510基のピットを検討した結果、4棟の掘立柱建物が見出された。

SB1 (1号掘立柱建物)

調査区中央部、やや西よりの地点で検出された。一部を攪乱によって切られてはいるものの、ほぼ完全な形で残存している。規模は桁行き1間(3.83~3.97m)、梁行き3間(6.02~6.54m)、柱穴の深さは17~78cm。面積は約24m²で、棟方向をN-42°-Eにもつ。

SB2 (2号掘立柱建物)

調査区東部、中程の地点において、SE5の南に隣接して検出された。桁行き2間(3.72m)、梁行き3間(5.55m)で、柱穴の深さは18~45cm、棟方向はN-56°-Wである。柱穴の深さより、比較的残存状況の良い掘立柱建物と言えるが、不思議なことに北東角の柱穴は、どうあっても検出することができなかった。検出された9基の柱穴以外に、周囲、あるいは建物内部には他にピットもなく、建物南東部を1間×1間の張り出し部と考えるのも難しい。北東角の柱穴は削平を受けているものとする以外にない。面積は推定で約21m²である。

SB3 (3号掘立柱建物)

調査区南西部、中央やや西より地点で、一部、SE12と重複して検出された。桁行き1間(3.32~3.47m)、梁行き3間(6.36m)、面積は約22m²で、柱穴の深さは14~63cm、棟方向はN-60°-Wである。

SB4 (4号掘立柱建物)

調査区南東部において検出され、一部を調査区壁に切られる。桁行き1間(4.19m)、梁行き4間以上(1間1.80~2.22m)、柱穴の深さは20~38cmで、棟方向はN-55°-Wである。

第3節 出土遺物

江口地区においても池開地区と同じく、青磁をはじめ多数の陶磁器類が出土している。

a. 陶磁器類 (第31～32図)

69～86はSE1出土の陶磁器類である。69～72は青磁碗の口縁部で、69・70は口縁部端反、72は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる筒形碗の器形である。71は口縁に雷文帯、胴部に片切彫の蓮弁文を施す。73・77は青磁碗の底部で、73は内面見込みに草花文、外面には片桐彫の蓮弁文が施されている。74は青磁稜花皿の口縁部で、波状文が線刻されている。上記の青磁はいずれも中国龍泉窯の製品であるが、76のみは例外で、日本製の国産青磁かと思われる。71は上田秀夫氏による分類(上田 1982)のC-II類(14世紀後半～15世紀)、73はB-II類(14世紀末～15世紀)に該当する。75と79は白磁の、それぞれ口縁部と底部であり、79は豊付部が無釉となっている。78と80は施釉陶器で、80は皿である。両者ともに外面の体部半ばまで施釉が行われ、80は見込みに胎土目痕があり、17世紀初頭の所産である。81～84は染付で、81の碗は外面に唐草文が、内面にはモチーフ不明の文様が描写される。82は口縁端反の碗で、外面には唐草文、内面見込みにねじ花文が描写される。83は皿と思われる底部であり、内面見込みに折菊と思しき文様を、外面にはモチーフ不明の文様を配す。84は内面見込みに巻貝文を施した碗の底部である。いずれも中国製と思われ、81と84は小野正敏氏による染付碗、皿分類(小野 1982)のC類(15世紀後半～16世紀後半)に、82は染付碗B(XI)類(14世紀末～15世紀半ば)に該当する。85と86はいずれも陶器の壺で、86は全高48.9cmの大型品で、ハケ調整ののちに、全面に横位のナデを施す。

87～104はSE3出土の陶磁器である。87・88は青磁の口縁部と底部片で、87は線刻と丸彫を組み合わせた蓮弁文を施す。88の底部は内面見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、露胎部が赤焼けとなっている。87は上田氏による分類のB-IV類(15世紀末～16世紀)に該当する。89・90・92は白磁である。89は端反の皿で、豊付部は釉剥ぎを施している。90・92は白磁の碗である。91は陶器の壺で、SE2とSE3出土の破片が接合したものである。93と94は染付の碗で、93は外面に唐草文を、94は二重格子目文を描写する。93はSE1出土の81に酷似し、小野氏による分類のC類(15世紀後半～16世紀後半)に該当する。96は龍泉窯青磁に類似する釉を用いるが、施釉陶器に分類される皿である。97は陶器で、所謂「湯呑み」に類する形状であるが、内面見込みに焦げ痕が見られ、火入れと思われる。外面体部の大半および内面口縁部が施釉され、また口唇部には、窯詰めの際のハマに類する道具によると思われる痕が4箇所に残る。98は陶器の碗である。平面四角形を基本とし、四隅に直角の折込部分を設けている。外面は体部半ばまで施釉、内面は全面施釉である。99は陶器の皿で、98と同じく、外面は体部半ばまで施釉、内面は全面施釉である。100・102は底部を欠損した陶器の碗で、残存部分においては全面施釉である。103は陶器の皿、104は陶器の碗で、両者とも内面は全面施釉、外面は体部半ばまで施釉している。

105・106はSE4出土の青磁と染付である。105は青磁の碗で、内面見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。外面は外底部無釉で、「大」という字が赤色の顔料を用いて書かれている。

106は染付堦の底部で、外面には草花文が描写される。

107～112はSE5出土の陶磁器である。107は青磁皿の口縁部である。外面には線刻による、内面には丸彫と線刻を組み合わせた蓮弁文を施している。108～112は染付である。108は堦の口縁部で、外面には緑色の顔料を用いて樹木が描かれる。109は筒型堦で、外面には空を飛ぶ鳥と思しき情景が描写される。110は堦の底部で、内面見込みの蛇の目釉剥ぎ、および畳付釉剥ぎが施されている。また、外面には草花文かと思しき描写が、内面見込みにはコンニャク印判が見える。111は畳付釉剥ぎの施された皿の底部で、内面にはモチーフ不明の描写が見える。112は堦と思しき底部で、外面は高台部の半ばまで施釉され、内面には巻貝文かと思しき描写がある。

113はSE6より出土した染付堦で、外面に何らかの風景と思しきモチーフ不明の描写がなされている。

114・115はSE7出土の陶磁器で、114は陶器壺の口縁部と思しき破片、115は青磁皿の口縁部である。

116～118はSE9出土の陶磁器である。116は白磁皿の底部、117は陶器堦の底部である。117は高台部無釉で、釉のかかる部分は全面に貫入が見られる。118は龍泉窯青磁の堦で、外面には細線による蓮弁文が施されている。

119～126はSD2出土の陶磁器で、119・121・122・124～126は施釉陶器である。119は端反口縁の皿で、残存部においては全面施釉である。121は甕の口縁で、内面には釉溜まりが見られる。122は切高台の底部である。124は堦で、外面は体部半ばまで施釉、内面は全面施釉で、砂敷焼成によるものである。125は124に類似するが、砂敷焼成の痕跡は見られなかった。126は堦の底部で、全体に貫入が見られる。120は白磁皿で、口縁部端反である。123は染付皿の口縁部である。

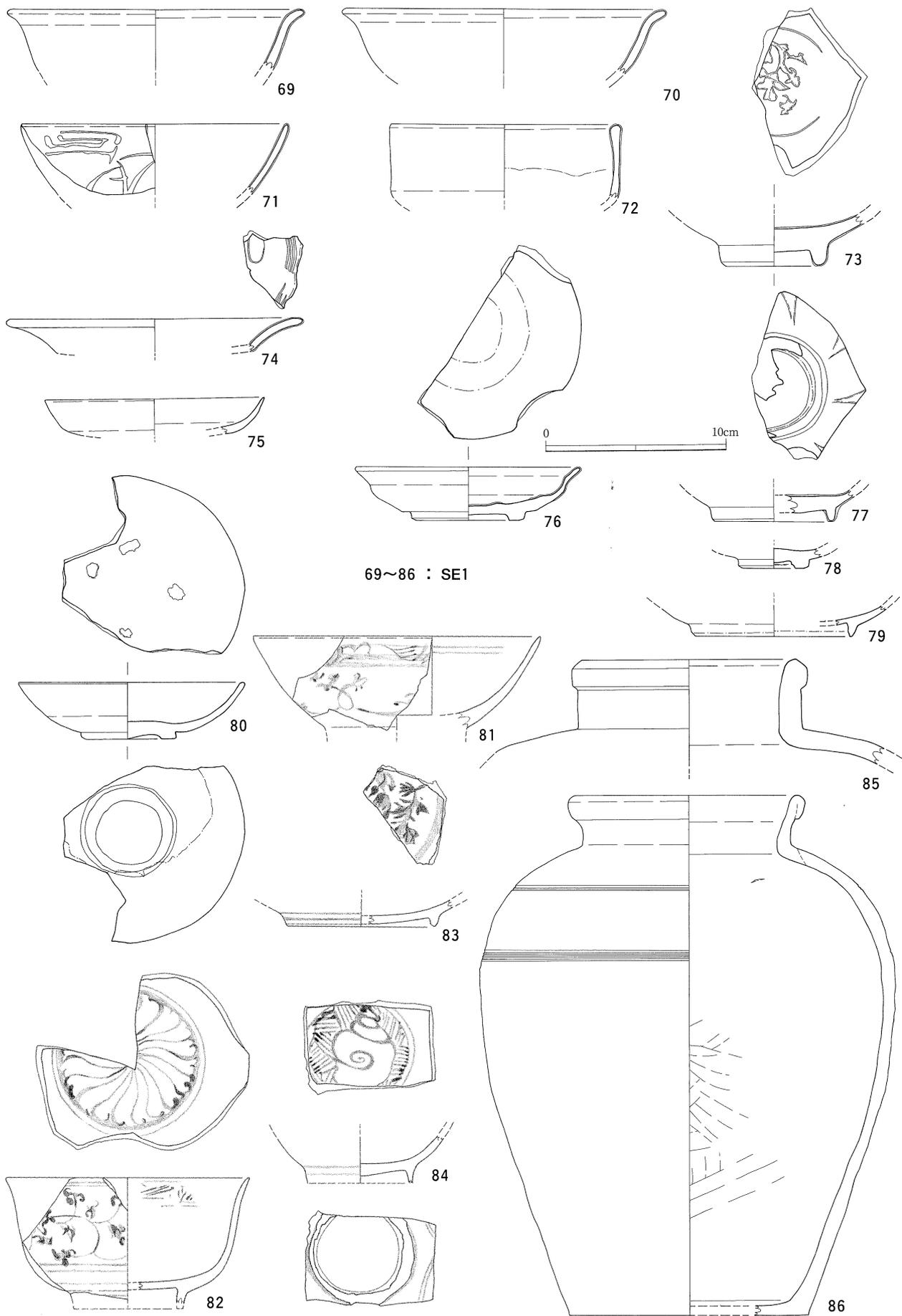
127～129はSD3出土の陶磁器である。127は龍泉窯青磁堦の口縁部、128は白磁皿で、畳付部は釉剥ぎが施されている。129は砂敷焼成による陶器皿で、高台部は無釉である。

130・131はピット内出土の青磁と陶器である。130は端反口縁の堦、131は陶器の底部で、畳付部に細い刻みが入るとともに、内外面に凹凸の意匠が施されている。なお130の出土したピット、131の出土したピットともに、検出しえた掘立柱建物には含まれず、遺構の年代を決する材料とはなりえなかった。

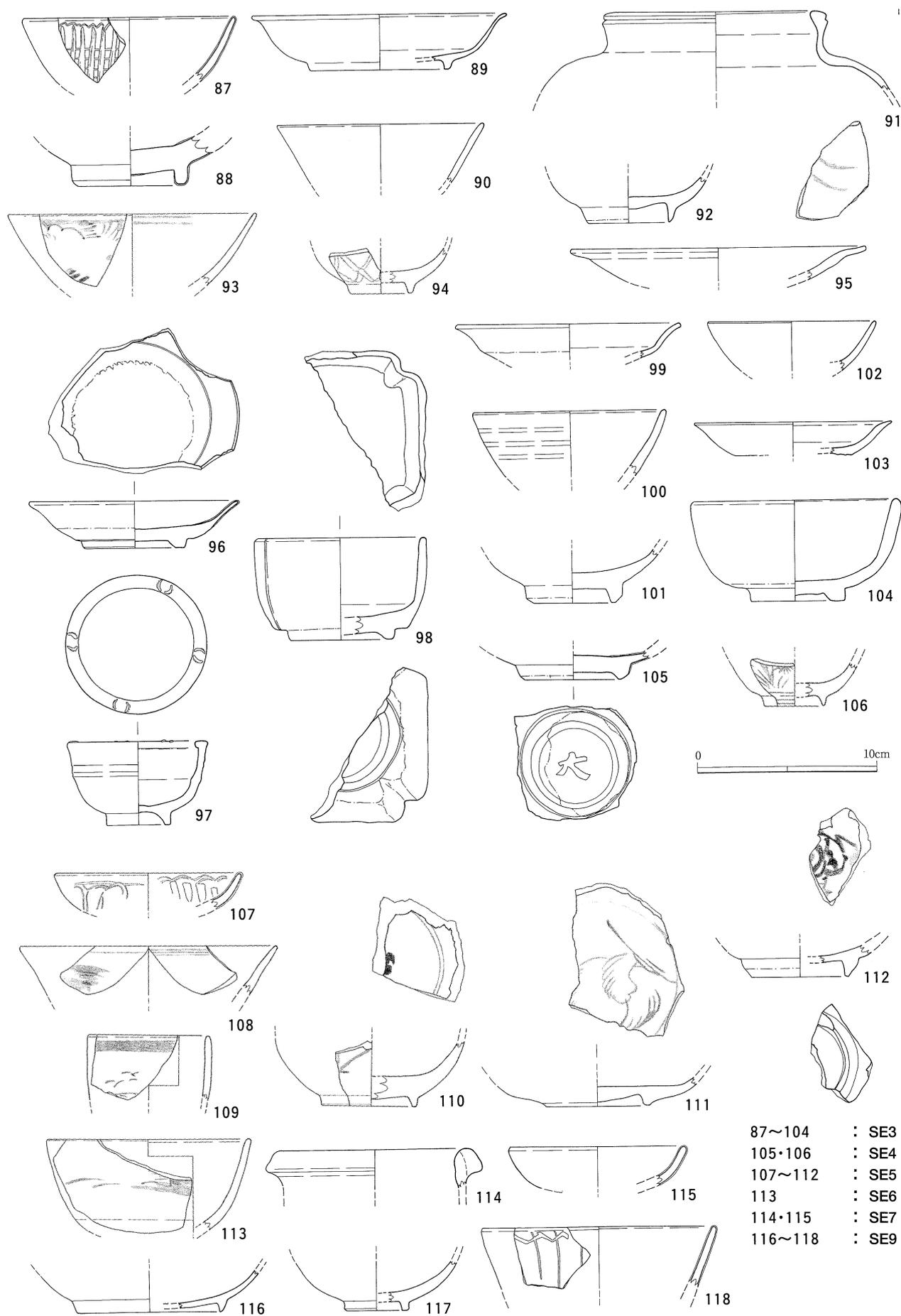
132～134は遺構外出土の陶磁器である。132は龍泉窯の青磁堦で、内面見込みには草花文が、外面にはヘラ先によると思われる蓮弁文が施されている。133は陶器の堦で、黒色の顔料により、草花文が描写されている。134は染付堦で、外面には緑色の顔料により、何らかの描写がなされている。また、口縁部のみの出土ではあるが、内面においては、体部の途中までしか釉がかかっておらず、見込み部は無釉であると思われる。

b. 土師器坏 (第32図)

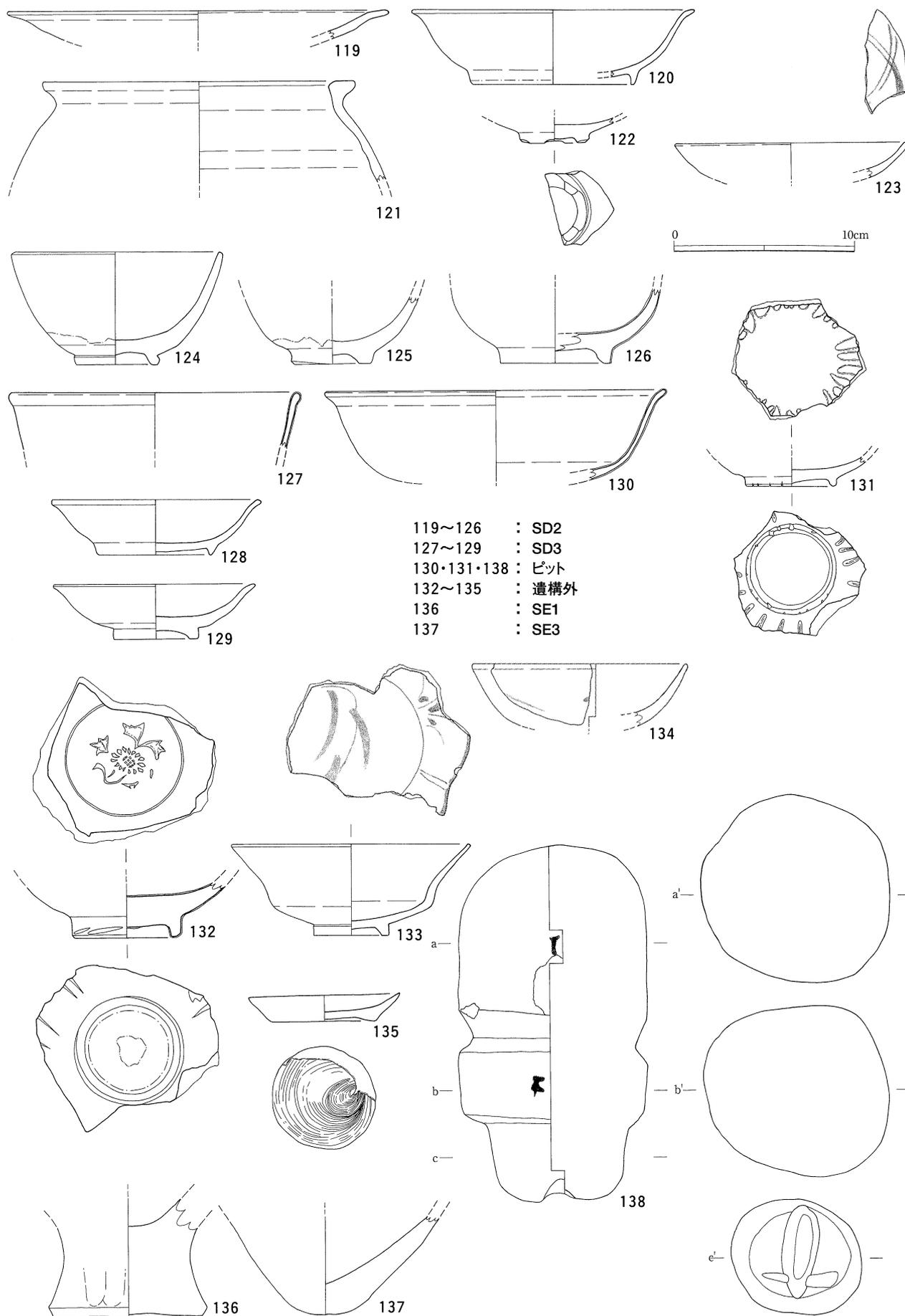
135は遺構外出土の土師器坏である。糸切底で、全体に摩滅が激しい。ほぼ完形に近く、口径8.4cm、底径5.8cm、器高1.4cmである。



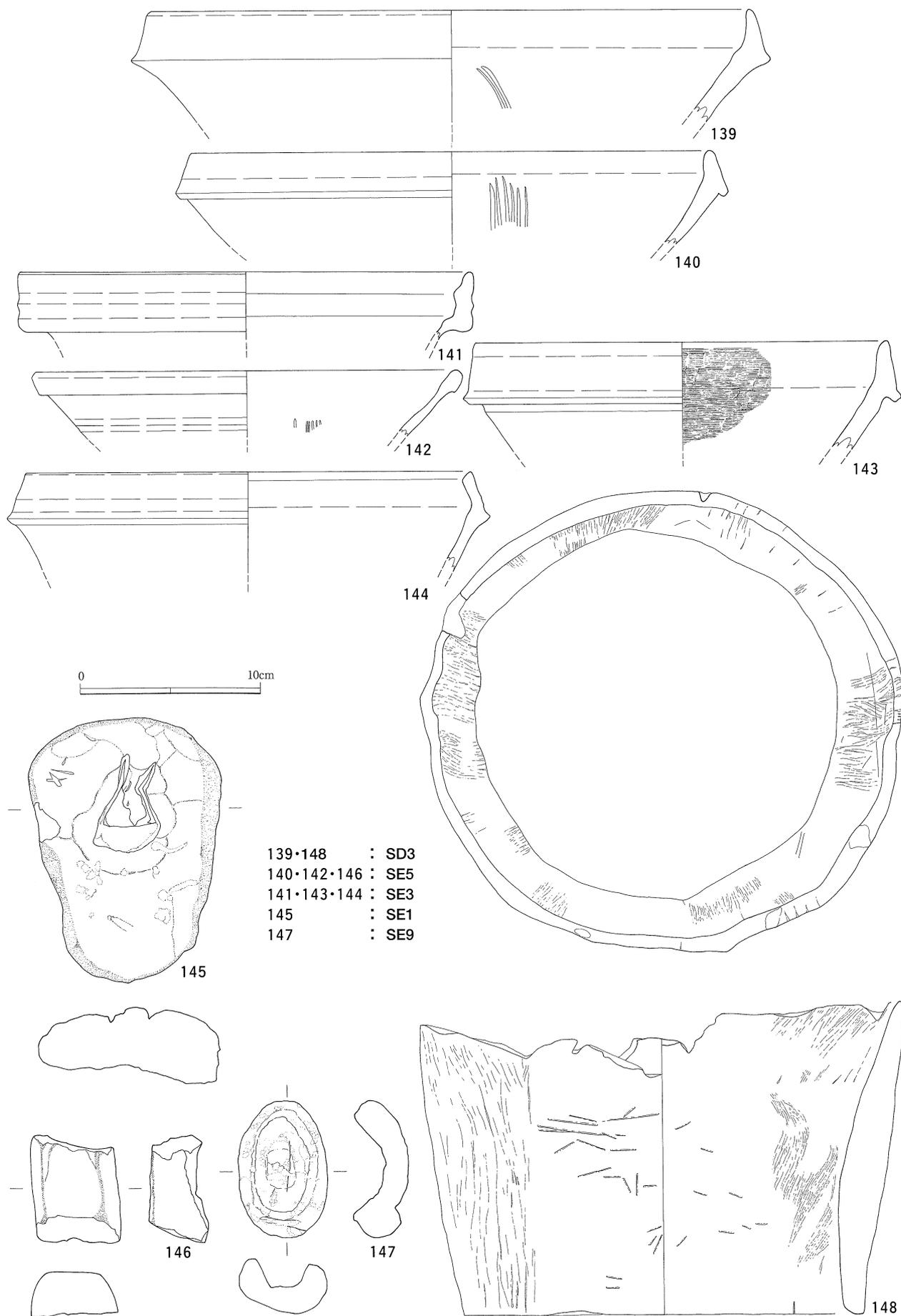
第30図 江口地区出土遺物実測図①(陶磁器) (scale : 1/3 ※86のみ1/5)



第31图 江口地区出土遺物実測図②(陶磁器) (scale : 1/3)



第32図 江口地区出土遺物実測図③(陶磁器・その他土器類・石製品) (scale : 1/3 ※ 138のみ 1/4)



第33図 江口地区出土遺物実測図④(播鉢・石製品・木質遺物)(scale: 1/3 ※148のみ1/6)

c. 播鉢（第33図）

139はSD3出土の播鉢口縁部である。口縁部のみに釉がかかる。140・142はSE5出土の播鉢である。小片ではあるが、140の櫛目は6本を一単位とし、下から上に施されていることが知れる。141はSE3出土の破片とSE5出土の破片が接合したものであり、口縁部の形状は池開地区出土の41に類似する。143・144はSE3出土のものであり、両者ともに櫛目は残存していないが、口縁部の形状より播鉢と判断した。143は内面に細かな横位のハケ目が残る。

d. 石製品（第32図）

138は調査区南西部のピット内より出土した五輪塔の空風輪である。砂岩製で、軸部の底にはほぞが切られている。空輪部に2箇所、風輪部に1箇所、それぞれ墨で書かれた梵字が確認できる。

145はSE1より出土した用途不明の軽石製石製品である。長軸19.9cm、短軸14.3cm、最大厚5.8cmで、正面中央やや上の位置に三角形に似た形が削り出されている。人の顔のようにも見え、あるいは面の未製品の可能性も考えられる。

146はSE5より出土した砥石である。その大半を欠損しているものの、わずかに残る面より砥石として使用されたものと判断できる。

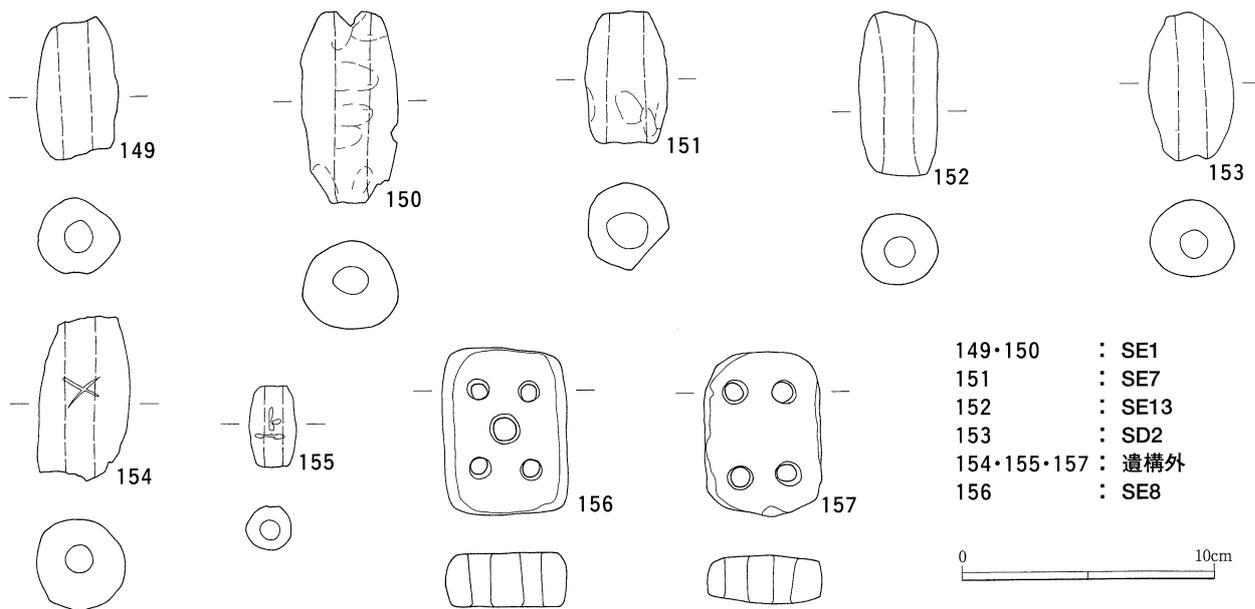
147はSE9より出土した軽石製の石製品である。全体に大きく彫りくぼめてあり、かつその加工面はきわめて平滑に整えられている。残念ながら使用によると思われる痕跡は見出せず、用途不明としておくよりない。

e. 井筒（第33図）

148はSD3の底面に設置されていた刳り貫きによるクスノキ製の井筒である。全体に残りが良いが、上部は若干、破損している（井戸底面における設置の状態から、上・下の判別を行った）。全体としては、下部から上部にかけてほぼ直線的に、やや開く形状をなしている。断面は上端と下端が細く、中程は大きく内面に膨らんでいる。また内面、外面ともに、製作時の加工痕が観察できた。いずれの加工痕においても直線的であることから、加工に使われた道具は、先の平らなものと判断できる。また大小二種類の加工痕が見て取れることから、平鑿と手斧の二種を使い分けているものと思われる。なお内面の加工痕には、道具を上から下へ振るうことのでついた痕跡が多いが、外面では、道具の使われた方向が一定しておらず、縦横に痕跡が残る。大小二種類の加工痕のうち、どちらかが一定の方向ということもなく、道具二種ともに縦横に振るわれている。

f. 土錘（第34図）

149～155は江口地区出土の筒型の土錘である。149・150はSE1、151はSE7、152はSE13、153はSD2、154・155は遺構外からの出土である。池開地区SE10における状況のように、特定遺構への集中は見られなかった。また池開地区で大量に出土した大型品もなく、当地区最大の150で長さ7.7cm、幅4.0cm、（長さ、幅ともに最大値）、孔径1.5cmで、重量は75.5gである。なお最小のものは155で、長さ3.3cm、幅1.9cm（長さ、幅ともに最大値）、孔径0.8cm、重量9.9gである。154には「×」、155には「上」の字がそれぞれ線刻されている。



149・150 : SE1
 151 : SE7
 152 : SE13
 153 : SD2
 154・155・157 : 遺構外
 156 : SE8

第34図 江口地区出土遺物実測図⑤ (土錘) (scale : 1/3)

156と157は長方形の土錘で、156はSE8、157は遺構外での出土である。両者ともに丁寧な仕上げがおこなわれており、きわめて平滑に面が整えられている。四隅に穿孔が施され、156では中央にも穿孔をしかけた痕跡が残る。

g. その他土器類 (第32図)

136・137ともに弥生土器の底部で、136はSE1、137はSE3の出土である。両者ともに摩滅が激しい。

【参考文献】

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会

第V章 総括

最後に、前章までに列挙した事実のいくつかをまとめ、本書を終えることとしたい。

池開地区における遺物の出土傾向について

池開地区は検出された遺構の大半を溝状遺構が占め、当然、得られた遺物のほとんどが溝状遺構から出土したものである。いずれの溝状遺構においても、場所による遺物の偏重は特に見られず、また層的にも遺構の上位、下位を問わない出土の仕方であった。池開地区出土の遺物の中では「新しい」と表現できる近世の染付などは、やや遺構の上層における出土が多いようではあるが、その上層中からも中世の青磁が多数出土している。また調査区を異にする溝から出土した青磁片が接合関係にある。これらのことから考えて、池開地区の溝の多くでは、おそらくは水の流れにより、一度ならず堆積土の攪拌が行われたものと判断される。

池開地区における溝状遺構の構築および存続年代について

池開地区検出の溝状遺構のうち、SE1、SE2、SE3、SE4、SE5、SE10からは多くの青磁片が出土している。これら青磁片を出土する溝状遺構は、池開地区の溝状遺構の中では大型で、残存状態のよい、当地区の中心となる遺構群であり、共通して出土している青磁片は、これら遺構の先後関係を考える上での好資料となるはずであった。しかし予想に反して、これら青磁片はいずれも14世紀末から15世紀の枠内におさまるものであり、そこに明確な時期差は存在しない。またSE2出土の木椀からも、放射性炭素年代測定により1440AD - 1480ADという結果が出ている。これらのことから、池開地区の溝状遺構の多くは、(構築年代には多少の差を想定するのが当然であろうが、)15世紀を中心として使用が行われ、多くは並存していたものと思われる。

池開地区における溝状遺構および掘立柱建物群の変遷について

出土遺物からは遺構の時期差を見出すことができなかったが、数箇所で見られる溝状遺構の切り合い関係、掘立柱建物の棟方向の異同、および溝状遺構と掘立柱建物との切り合い関係より、池開地区における遺構の変遷について検討してみたい。

池開地区における溝状遺構の切り合い関係は、A2区におけるSE10とSE11(SE10が新しい)の一箇所があるのみであるが、他にSE8とSB5、SE9とSB6という、溝状遺構と掘立柱建物との切り合い関係が存在する(先後関係は明らかではない)。掘立柱建物の棟方向の異同については、SB2とSB4、およびSB5の棟方向がほぼ平行であり、このグループとSB7がほぼ直交の関係にある。またSB3とSB6の棟方向も直交する。以上より、SB2・SB4・SB5・SB7のグループ、SB3・SB6のグループ、そしてSB1という3つのパターンを見出せる。以上をまとめると、池開地区の遺構群には、第35図に示すとおり、3段階の変遷過程が存在したと考えることができる。

第1段階は、最も外側に位置するSE2(SE11およびSE14を、SE2と同一の溝と想定)と、調査区北西端に位置するSB1の段階である。SB1だけでは、あまりにも住居が少ないが、この段階における居住域の中心は攪乱によって遺構面の存在しない部分にあったものとする以外

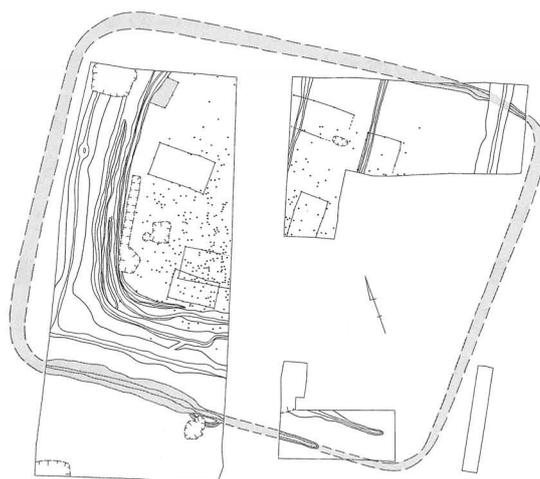
にない。第2段階はSE1（SE12を同一の溝と想定）、SE3（およびSE10）、SE6の3条の溝と、SB3、SB6の組み合わせである。SE1とSE3は連結部分の存在より同時期と考えられる。またこの段階ではSB1は廃絶していたものと考えられる。第3の段階は前段階から継続するSE1、SE2とSE5の3条の溝と、SB2、SB4、SB5、SB7の4軒である。この段階ではSB6は廃絶、また浅い溝であるSE8も埋没していたものであろう。

江口地区における遺物の出土傾向について

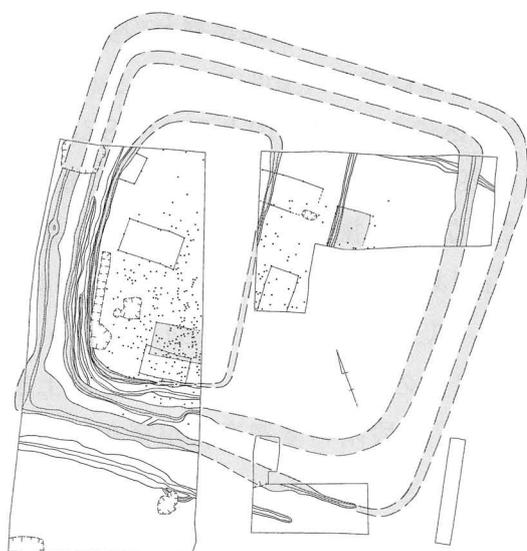
江口地区においても、遺物のほとんどは溝状遺構からの出土である。池開地区と同じく、その出土は遺構の上位、下位によって傾向があるわけでもなく、同時期の遺物が上位からも下位からも出土するという状況であった。したがって、江口地区の溝状遺構においてもまた、水の流れ等による、埋土の攪拌がたびたび起こったものと考えられる。

江口地区における溝状遺構の構築および存続年代について

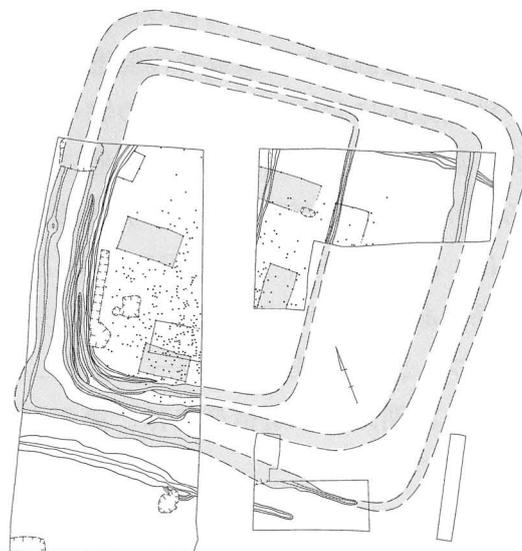
江口地区の溝状遺構においても、池開地区と同じくSE1、SE3、SE5など大型の溝で、15世紀を中心とする青磁が出土している。それ以外にもSE1では15世紀後半～16世紀後半の染付が、SE5からは15世紀末～16世紀の青磁が出土しているが、これらはそれぞれの遺構の存続期間の長さを物語るものであろう。



第1段階



第2段階



第3段階

第35図 池開地区遺構変遷図

江口地区における溝状遺構および掘立柱建物群の変遷について

江口地区においては、掘立柱建物の検出数が少なく、棟方向の異同による分類は難しい。また溝状遺構の切り合いは何箇所かに存在するものの、方形区画の大型溝に関しては、その先後関係を検討できるような切り合いがなく、検討する術がない。

江口地区の井戸遺構（江口地区SD3）について

SD3からは刳貫木製の井筒が検出された。この井筒の残存状態の良さは、埋土中に水分が多く含まれ、常に水に浸っているのと同じ状態にあったことに起因しよう。SD3底面における水の潤沢さは、現在も変わっておらず、調査時、井筒部分の上面近くまで、常に水をたたえている状態であった。

SD3においては、再利用のための井筒の抜き取りが行われておらず、また井戸神に対する祭祀行為（土器の供献や、水神の通り道としての竹筒等の差し込み）の痕跡等も皆無であった。このことから、この井戸は意図的に「埋められた」のではなく、「埋まった」可能性が高い。

なお井筒内埋土の花粉分析では、マテバシイ属（ドングリ）が卓越しており、その集塊も検出されていることから、分析を行った株式会社古環境研究所の報告中では、アク抜きなどの目的で遺構内に入れられた可能性も指摘されている。

今回の調査により、これまで中世の遺跡がほとんど知られていなかった砂丘上における、数条の溝によって区画された15世紀の居館の存在が明らかとなった。輸入物の青磁や染付などを有する一方で、大量の土錘の存在など、この居館に住む人々が、労働を行うこともあったことを伺わせる。このことから、今で言う中産階級の人々が形成した遺跡であると考えられる。

宮崎市域における同時期の遺跡としては、平野部に面した丘陵上に建てられた本城や宮崎城など、支配階級の遺跡は知られているが、被支配階級層の遺跡やその様相はまだまだ明らかではない。この報告書が宮崎における中世研究の一助となれば幸いである。

表1 池開地区出土土器類観察表

番号	種別	器種	出土位置	法量			手法・調整・文様等		色調		備考	注記記号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	青磁	壺	SE1	16.1			丸彫蓮弁文	全面施釉	灰白	灰白色	龍泉窯	IE03ASE1・58
2	青磁	壺	SE1	13.2			口縁部雷文帯 胴部片切彫蓮弁文	全面施釉	灰白色	灰白色	龍泉窯	IE03ASE1・50
3	青磁	皿	SE1	13.4			片切彫蓮弁文	全面施釉	灰白色	灰白色	端反り口縁 龍泉窯	IE03ASE1・54
4	磁器	壺	SE1		5.5		高台外面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	縮緬高台	IE03ASE1・55
5	青磁	壺	SE1		4.6		外底円形状釉剥ぎ	見込み陰刻文字	オリーブ灰色	オリーブ灰色		IE03ASE1・66
6	陶器	壺	SE1	5.6			無釉	見込み蛇の目釉剥ぎ 内面緑釉	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	高台赤焼け 内野山窯か	IE03ASE1・1
7	青磁	壺	SE1		6.1		外底輪状釉剥ぎ	見込みスタンプ草花文	灰白色	灰白色	龍泉窯	IE03ASE1・41
8	青磁	壺	SE1		6.1		高台内面釉剥ぎ	見込みに「願氏」銘	オリーブ灰色	オリーブ灰色	龍泉窯	IE03ASE1・13
9	白磁	壺	SE1	12.1			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03ASE1・61
10	白磁	壺	SE1	8.6			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	端反り口縁	IE03ASE1・67
11	陶器	壺	SE1		3.4		全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03ASE1・60
12	陶器	坏	SE1		2.1		体部のみ施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	多角坏	IE03ASE1・57
13	陶器	壺	SE1		4.7		無釉	全面施釉 胎土目	灰白色	灰白色	切高台	IE03ASE1・40
14	青磁	壺	SE3	15.1			丸彫蓮弁文	全面施釉	オリーブ灰色	オリーブ灰色		IE03ASE3・32
15	青磁	盤	SE3	20.2			全面施釉	口縁部練刻波状文	オリーブ灰色	オリーブ灰色	稜花皿	IE03ASE3・15
16	白磁	皿	SE2	10.4	3.7	2.9	高台部釉なし	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03ASE2・3
17	青磁	壺	SE2		6.1		練刻	見込みスタンプ草花文	灰白色	灰白色	龍泉窯	IE03ASE2・20
18	青磁	壺	SE3+SE10		5.1		片切彫蓮弁文 外底輪状釉剥ぎ	見込みスタンプ双魚+ 卍文	灰白色	灰白色	龍泉窯	IE03ASE3・1 IE03ASE10・57
19	染付	壺	SE3		4.6		全面施釉 草花文	畳付釉剥ぎ 巻貝文か	灰白色	灰白色		IE03ASE3・7
20	陶器	壺	SE3	9.4			輪積み痕あり 全面褐釉	輪積み痕あり 全面褐釉	暗赤褐色	暗赤褐色		IE03ASE3・30
21	磁器	壺	SE4	8.1			二重格子目文		灰白色	灰白色		IE03ASE4・3
22	青磁	壺	SE4		5.2		外底釉剥ぎ		灰白色	灰白色		IE03ASE4
23	青磁	壺	SE5		5.8		片切彫蓮弁文 外底輪状釉剥ぎ	見込みスタンプ双魚+ 卍文	灰白色	灰白色	龍泉窯 文様は18と同范	IE03ASE5・2
24	青磁	壺	SE5		4.8		高台内面無釉	見込み草花文	灰白色	灰白色	龍泉窯	IE03ASE5一括
25	染付	壺	SE5				不明文様	全面透明釉	灰白色	灰白色		IE03ASE5・1
26	白磁	皿	SE5	10.8			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03ASE5・3
27	染付	壺	SE5		3.6		外底圏線 草花文か	砂目か	灰白色	灰白色		IE03ASE5・6
28	陶器	壺	SE5		5.1		畳付釉剥ぎ	全面施釉	にぶい黄色	にぶい黄色		IE03ASE5・17
29	陶器	壺か	SE5		2.6		高台部無釉	全面施釉 貫入	灰白色	灰白色		IE03ASE5・14
30	青磁	壺	SE5		4.3		高台外まで施釉	見込み円形状釉剥ぎ	灰白色	灰白色		IE03ASE5・4
31	染付	小盤か	SE10	8.1	4.4	1.8	全面透明釉	見込みに情景文	灰白色	灰白色		IE03ASE10・1
32	染付	壺	SE10		3.3		梅花文	全面透明釉	灰白色	灰白色		IE03ASE10・6
33	磁器	小碗か	SE10	6.4	2.7	2.5	全面透明釉	全面透明釉	灰白色	灰白色		IE03ASE10・7
34	染付	壺	遺構外		5.5		高台部二重圏線	圏線 見込みに「寿」	灰白色	灰白色		IE03A
35	染付	壺	遺構外	8.6	3.1	4.6	草花文	圏線 見込みに文	灰白色	灰白色		IE03A
36	染付	筒形碗	遺構外	6.6			輪花文	口縁および見込み圏線	灰白色	灰白色		IE03A・1
37	陶器	壺	遺構外		4.3			褐釉	橙色	黒褐色		IE03A・2
38	青磁	壺	SE13		5.8		外底輪状釉剥ぎ	見込み練刻か	灰白色	灰白色	龍泉窯	IE03ASE13・1
39	青磁	壺	ピット内	17.6			口縁部雷文帯		オリーブ灰色	オリーブ灰色		IE03AP109・1 IE03AP109・2
40	陶器	播鉢	SE1	25	9.8	11.3	輪積み痕あり 回転ナデ	8本以上1単位クシ描き 下→上	灰白色	灰色	備前	IE03ASE1・43
41	陶器	播鉢	SE4	24.6			口縁部外面のみ施釉	ほぼ全面にクシ描き	暗赤褐色	赤褐色	産地不明	IE03ASE4・2
42	陶器	播鉢	SE5	25.8			回転ナデ	8本1単位のクシ描き 下→上	にぶい赤褐色	灰赤色	備前	IE03ASE5・19
43	土師器	坏	SE1	12.6	5.9	3.1	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	糸切り底	IE03ASE1・25 IE03ASE1・30
44	土師器	坏	SE1		3.2		回転ナデ	回転ナデ	灰白色	橙色	糸切り底	IE03ASE1・12
45	土師器	坏	SE1		6.1		回転ナデ	ナデか	灰白色	灰白色	糸切り底	IE03ASE1・52
46	陶器	はがま	SE2	19.6			ナデ? 全面すす付着 口縁部三条沈線	口縁部ナデ 胴部横位のハケ	黒褐色	灰色		IE03ASE2・4
47	陶器	甕か	SE8	16.2			クシ描きの波状文	横位のナデ	橙色	にぶい橙色		IE03ASE8・1
48	土師器	脚付	SE3	11.8	8.9	5.6	回転ナデ	回転ナデ	橙色	にぶい橙色	全面磨滅	IE03ASE3・4
	青磁	壺	SE1	13.2			全面施釉	全面施釉	オリーブ灰色	オリーブ灰色		IE03ASE1・37
	染付	皿か	SE3	11.1			草花文か	口縁部圏線	灰白色	灰白色		IE03ASE3・3
	磁器	盤	SE11	13.8			胴部下半釉剥ぎ	全面透明釉	灰白色	灰白色		IE03ASE11・1
	青磁	壺	遺構外		5.1		外底輪状釉剥ぎ	見込みスタンプ草花文	オリーブ灰色	オリーブ灰色		IE03A4

表2 池開地区出土石製品観察表

番号	種別	器種	出土位置	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考	注記記号
49	石製品	空風輪(五輪塔)	SE3	砂岩	22.1	13.3	10.5	空輪正面に、墨書きによる梵字	IE03A1SE3・5
50	石製品	砥石	SE1	—	7.8	5.9	3.5	方向の一定しない擦痕無数	IE03A1SE1・18
51	石製品	かまど	SE1	砂岩	13.2	—	7.4	火焚き部等に煤付着	IE03A1SE1・29

表3 池開地区出土木質遺物観察表

番号	種別	器種	出土位置	樹種	法量(cm)			放射性炭素年代	備考
					口径	底径	器高		
52	漆器	椀	SE1	クスノキ科クスノキ属 クスノキ	17.3	7.3	5.9	1440AD- 1480AD	高台部中央に穿孔、およびその周囲 4箇所と同様の穿孔 用途不明

表4 池開地区出土土錘観察表

番号	種別	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考	注記記号
53	土錘	SE1	7.18	4.10	1.50	92.20		IE03ASE1・10 IE03ASE1・63
54	土錘	SE10	7.90	5.95	2.10	185.00		IE03ASE10・39 IE03ASE10・44
55	土錘	SE10	6.10	4.80	1.85	125.00		IE03ASE10・30
56	土錘	SE10	8.10	6.10	2.10	245.00		IE03ASE10・31
57	土錘	SE2	7.60	6.30	2.20	240.00		IE03ASE2・6
58	土錘	SE10	7.70	5.90	2.20	220.00		IE03ASE10・33 IE03ASE10・34 IE03ASE10・35 IE03ASE10・38 IE03ASE10・49
59	土錘	SE10	6.90	5.30	2.20	150.00		IE03ASE10・37
60	土錘	SE10	8.20	6.10	2.50	260.00		IE03ASE10・3
61	土錘	SE10	6.01	5.50	1.98	160.00		IE03ASE10・32
62	土錘	SE10	7.80	6.10	2.70	235.00		IE03ASE10・36 IE03ASE10・45 IE03ASE10・46
63	土錘	SE1	4.10	1.10	0.40	3.95		IE03ASE1・26
64	土錘	SE1	4.20	1.20	0.50	5.47		IE03ASE1・27
65	土錘	SE1	5.35	1.40	0.45	8.30		IE03ASE1・53
66	土錘	SE1	4.10	2.10	0.60	16.85		IE03ASE1・56
67	土錘	SE3	3.65	1.15	0.32	4.07		IE03ASE3・31
68	土錘	遺構外	3.80	1.90	0.58	11.24		IE03A・6

表5 江口地区出土土器類観察表①

番号	種別	器種	出土位置	法量			手法・調整・文様等		色調		備考	注記記号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
69	青磁	碗	SE1	15.9			全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	端反口縁 龍泉窯	IE03BSE1-158
70	青磁	碗	SE1	17.4			全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	端反口縁 龍泉窯	IE03BSE1-317
71	青磁	碗	SE1	15.1			雷文帯 片切彫蓮弁文	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯	IE03BSE1-276
72	青磁	碗	SE1	12.4			全面施釉	体部半ばまで施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯 口唇部に胎土付着	IE03BSE1-82
73	青磁	碗	SE1		5.1		外底円形状釉剥ぎ 片切彫蓮弁文	見込みスタンプ草花文	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯	IE03BSE1-192
74	青磁	皿	SE1	16.2			全面施釉	口縁部線刻波状文	灰オリーブ色	灰オリーブ色	稜花皿	IE03BSE1-314
75	白磁	皿	SE1	12.2			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE1-58
76	青磁	盤	SE1				体部半ばまで施釉	蛇の目釉剥ぎ	明緑灰色	明緑灰色	端反口縁	IE03BSE1-275
77	青磁	碗	SE1	6.6			外底部釉剥ぎ	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯	IE03BSE1-304
78	陶器	碗か	SE1	3.9			体部半ばまで施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE1-178
79	白磁	皿	SE1	8.4			畳付部無釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE1-181
80	陶器	皿	SE1	12.4	4.3	3.2	体部半ばまで施釉	見込み胎土目 全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色		IE03BSE1-175
81	染付	碗	SE1	15.9			唐草文	見込み不明文様	灰白色	灰白色	中国製	IE03BSE1-11
82	染付	碗	SE1	13.5			唐草文	見込みねじ花文	灰白色	灰白色	端反口縁	IE03BSE1-51 IE03BSE1-131
83	染付	皿か	SE1	8.2			不明文様	見込み折菊か	灰白色	灰白色		IE03BSE1-2
84	染付	碗	SE1					見込み巻貝文	灰白色	灰白色	中国製	IE03BSE1-31
85	陶器	壺	SE1	11.8			横位のナデ 体部自然釉	横位のナデ	褐灰色	褐灰色		IE03BSE1-57
86	陶器	壺	SE1	12.3	13.3	29.1	横位のナデ 体部自然釉	ナデ	褐灰色	褐灰色		IE03BSE3-173
87	青磁	碗	SE3	11.8			線刻・丸彫りによる蓮弁文	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯	IE03BSE3-118
88	青磁	碗	SE3	5.8			外底円形状釉剥ぎ	蛇の目釉剥ぎ	灰オリーブ色	灰オリーブ色	見込露胎部赤焼	IE03BSE3-16
89	白磁	皿	SE3	14.2	7.6	3.2	畳付釉剥ぎ	全面施釉	灰白色	灰白色	端反口縁	IE03BSE3-208
90	白磁	碗	SE2	11.4			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE2-23
91	陶器	壺	SE3	10.9			横位のナデ	横位のナデ	灰白色	灰白色		IE03BSE3-105 IE03BSE3-108
92	白磁	碗	SE3	4.6			畳付部無釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE3-216
93	染付	碗	SE2	13.8			唐草文	口縁部二重圈線	灰白色	灰白色		IE03BSE2-16
94	染付	碗	SE2	3.4			二重格子目文 畳付釉剥ぎ	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE2-26
95	陶器	皿	SE3	16.6			全面施釉	全面施釉 不明染付	灰白色	灰白色	体部半ばで外反	IE03BSE3-203
96	青磁	皿	SE3	11.6	4.6	2.8	体部半ばまで施釉	見込み無釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	端反口縁	IE03BSE3-12
97	陶器	火入か	SE2	6.5	3.6	4.8	高台部を除いて施釉	口縁部のみ施釉	褐灰色	明褐灰色	見込みに焦げ痕	IE03BSE2-3
98	陶器	碗	SE3			5.8	体部半ばまで施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	四隅折込	IE03BSE3-193 IE03BSE3-197
99	陶器	皿	SE3	12.4			体部半ばまで施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	端反口縁	IE03BSE3-一括
100	陶器	碗	SE3	10.6			全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色		IE03BSE3-205
101	陶器	碗	SE2	4.6			畳付部まで施釉	全面施釉	暗灰黄色	暗灰黄色		IE03BSE2-20
102	白磁	碗	SE3	8.9			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE3-157 IE03BKSE1-66
103	陶器	皿	SE3	11.1			体部半ばまで施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	端反口縁	IE03BSE3-158
104	陶器	碗	SE3 SE5	11.7	5.4	5.6	体部半ばまで施釉	全面施釉	浅黄色	浅黄色		IE03BSE3-201 IE03BSE5-一括
105	青磁	碗	SE4	5.2			赤褐色の顔料にて外底に「大の字」一部畳付まで施釉	蛇の目釉剥ぎ	灰オリーブ色	灰オリーブ色		IE03BSE4-12
106	染付	碗	SE4	3.4			草花文	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE4-10
107	青磁	皿	SE5				線刻蓮弁文	丸彫り・線刻蓮弁文	灰オリーブ色	灰オリーブ色		IE03BSE5-一括
108	染付	碗	SE5	14.4			情景文	口縁部圈線3本	灰白色	灰白色		IE03BSE5-44
109	染付	碗	SE5	6.6			情景文		灰白色	灰白色		IE03BSE5-一括
110	染付	碗	SE5	5.2			畳付釉剥ぎ 草花文か	蛇の目釉剥ぎ 見込みコンニャク印	灰白色	灰白色		IE03BSE5-23
111	染付	皿か	SE5	5.8			畳付釉剥ぎ	モチーフは鳥か	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色		IE03BSE5-一括
112	染付	碗か	SE5	5.4			高台外半ばまで施釉	見込みに巻貝文	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色		IE03BSE5-19
113	染付	碗	SE6				情景文か	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE6-1
114	陶器	壺か	SE7	10.5			全面施釉	全面施釉	灰赤色	灰赤色		IE03BSE7-9
115	青磁	皿	SE7	9.4			全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色		IE03BSE7-8
116	白磁	皿	SE9		8.1		全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE9-9
117	陶器	碗	SE9		3.1		高台部無釉	全面施釉	淡黄色	淡黄色	貫入	IE03BSE9-3
118	青磁	碗	SE9	12.7			細線による蓮弁文	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯	IE03BSE9-6
119	陶器	皿	SD2	21.1			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	端反口縁	IE03BSD2-115
120	白磁	皿	SD2				全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	端反口縁	IE03BSD2-3
121	陶器	甕	SD2	17.2			体部に釉かけ	全面施釉	灰オリーブ色 暗赤褐色	灰オリーブ色		IE03BSD2-100
122	陶器	碗か	SD2	3.8			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	切高台	IE03BSD2-113
123	染付	皿	SD2	12.8			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSD2-24
124	陶器	碗	SD2	11.2	4.1	6.3	体部途中まで施釉	全面施釉	灰赤色 灰褐色	灰赤色	砂敷焼成	IE03BSD2-10
125	陶器	碗	SD2	3.6			体部半ばまで施釉	全面施釉	オリーブ色 灰色	オリーブ色	縮緬高台	IE03BSD2
126	陶器	碗	SD2	6.1			高台外まで施釉	全面施釉	明緑灰色	明緑灰色	貫入	IE03BSD2-一括
127	青磁	碗	SD3	15.8			全面施釉	全面施釉	オリーブ灰色	オリーブ灰色		IE03BSD3-6

表6 江口地区出土土器類観察表②

番号	種別	器種	出土位置	法量			手法・調整・文様等		色調		備考	注記記号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
128	白磁	皿	SD3	11.4	6.2	3.1	畳付釉剥ぎ	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSD3・8 IE03BSD3・10 IE03BSD3・11
129	陶器	皿	SD3	11.1	4.1	3.1	高台部以外全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色	砂敷焼成	IE03BSD3・1
130	青磁	碗	ピット	18.8			全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	端反口縁	IE03BP・23
131	陶器	碗か	ピット		5.1		高台部無釉量付に刻み組 册 部一定の間隔で凹部を配す	一定の間隔で凸部を配す	淡黄色	淡黄色		IE03BP・16
132	青磁	碗	遺構外		4.9		外底輪状釉剥ぎへラ先による選弁文か	見込みにスタンプ草花文	灰オリーブ色	灰オリーブ色	龍泉窯	IE03表
133	陶器	碗	遺構外	13.1	4.1	5.2	高台外面まで施釉	黒色顔料による草花文	暗灰黄色	暗灰黄色		IE03B表
134	染付	碗	遺構外	11.8			全面施釉 緑色顔料で染付け	見込み無釉	灰白色	灰白色		IE03BKSE1・43
135	土師器	坏	遺構外	8.4	5.8	1.4	横位のナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	糸切底	IE03BSE14一括
136	土器	甕	SE1		8.3		縦方向ナデ		にぶい橙色	淡橙色	弥生土器	IE03BSE1・151
137	土器	甕	SE3						浅黄褐色	浅黄褐色	尖底 摩滅激しい	IE03BSE3・173
139	陶器	播鉢	SD3	33.2			横位のナデ 口縁部自然釉	横位のナデ	にぶい褐色	にぶい褐色		IE03BSD3・2
140	陶器	播鉢	SE5	28.8			横位のナデ	横位のナデ 6本一単位クシ描き 下→上	暗赤褐色	暗赤褐色	備前	IE03BSE5・75
141	陶器	播鉢か	SE3 SE5	25.1			横位のナデ	横位のナデ	灰白色	灰白色		IE03BSE3・119 IE03BSE5一括
142	陶器	播鉢	SE5	23.4			横位のナデ 全面施釉	横位のナデ 全面施釉 8本以上一単位へラ描き	黒褐色	黒褐色		IE03BSE5・59
143	陶器	播鉢	SE3	23.1			横位のナデ	横位のナデ	黒褐色	黒褐色	備前か	IE03BSE3・107
144	陶器	播鉢	SE3	23.1			横位のナデ 口縁部自然釉	横位のナデ	灰色	灰色		IE03BSE2・51
	陶器	甕	SE1	36.2			横位のナデ	横位のナデ	橙色	灰赤色		IE03BSE1・62
	陶器	碗	SE3	9.2			全面施釉	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSE3・157 IE03BKSE1・66
	陶器	皿	SE3				全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色		
	陶器	皿	SE3	12.5	5.2	3.4	体部半ばまで施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	胎土目なし	IE03BSE3・200
	青磁	盤か	SE5		13.4		全面施釉	全面施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色		IE03BSE5・75
	青磁	皿	SE13				全面施釉	口縁部線刻波状文	灰オリーブ色	灰オリーブ色	稜花皿	IE03BSE13・2
	白磁	皿か	SD2				畳付釉剥ぎ	全面施釉	灰白色	灰白色		IE03BSD2・5
	陶器	碗	SD2		4.2		体部半ばまで施釉か	全面施釉 釉溜りあり	灰黄色	灰黄色		IE03BSD2
	陶器	碗	遺構外	12.8	5.3	2.6	体部半ばまで施釉 糸切り底	全面施釉 見込み胎土目	にぶい赤褐色 淡赤褐色	にぶい赤褐色		IE03BKSE1・55
	陶器	甕	遺構外	35.8			横位のナデ	横位のナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		IE03BKSE1・65
	陶器	碗	遺構外		4.7		畳付釉剥ぎ	見込み胎土目 全面施釉	灰白色	灰白色		IE03B表土一括

表7 江口地区出土石製品観察表

番号	種別	器種	出土位置	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考	注記記号
138	石製品	空風輪(五輪塔)	ピット	砂岩	25.9	14.1	13.9	空輪部2箇所、風輪部1箇所に梵字	IE03BP・2
145	石製品	—	SE1	軽石	19.8	14.2	5.1	鼻のような表現があり、石面の可能性	IE03BSE1・267
146	石製品	砥石	SE5	—	6.1	5.1	2.6		IE03BSE5・14
147	石製品	—	SE9	軽石	7.8	5.1	1.4	中央部を大きく掘りくぼむ 用途不明	IE03BSE9・2

表8 江口遺跡出土木質遺物観察表

番号	種別	器種	出土位置	樹種	法量(cm)			放射性炭素年代	備考
					上部径	下部径	器高		
148	木質遺物	井筒	SD3	クスノキ科クスノキ属 クスノキ	53.7	44.3	35.1	1450AD- 1515AD	井戸の底面ほぼ中央に設置 上部はやや破損が目立つが、残存状態は良好

表9 江口地区出土土錘観察表

番号	種別	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考	注記記号
149	土錘	SE1	5.70	3.30	1.20	46.21		IE03BSE1・282
150	土錘	SE1	7.70	4.04	1.50	75.46		IE03BSE1・215 IE03BSE1・217 IE03BSE1・218
151	土錘	SE7	5.30	3.30	1.60	45.73		IE03BSE7・6
152	土錘	SE13	6.60	2.95	1.20	55.00		IE03BSE13
153	土錘	SD2	5.90	3.30	1.10	48.00		IE03BSD2
154	土錘	遺構外	6.63	3.50	1.15	64.58	線刻で「×」	IE03B・表
155	土錘	遺構外	3.30	1.90	0.80	9.87	線刻で「上」	IE03B・174
156	土錘	SE8	6.60	4.90	0.80	97.89	長方形 四隅穿孔	IE03BSE8・1
157	土錘	遺構外	6.60	4.60	1.10	70.00	長方形 四隅穿孔	IE03B



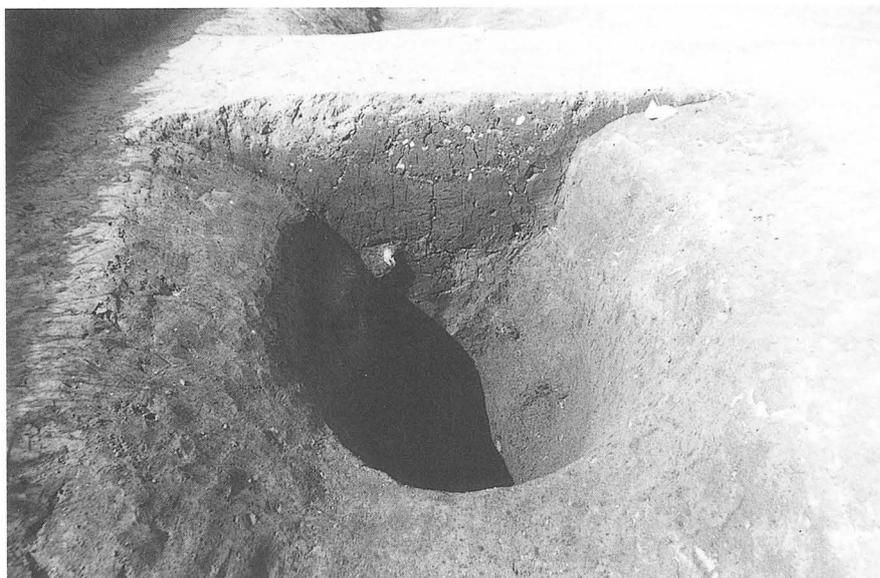
図版1 池開地区全景（天が北）



図版2
池開地区 SE2
青磁出土状況



図版 3
池開地区 SE1
漆器出土状況



図版 4
池開地区 SE1
掘り込み部（南より）



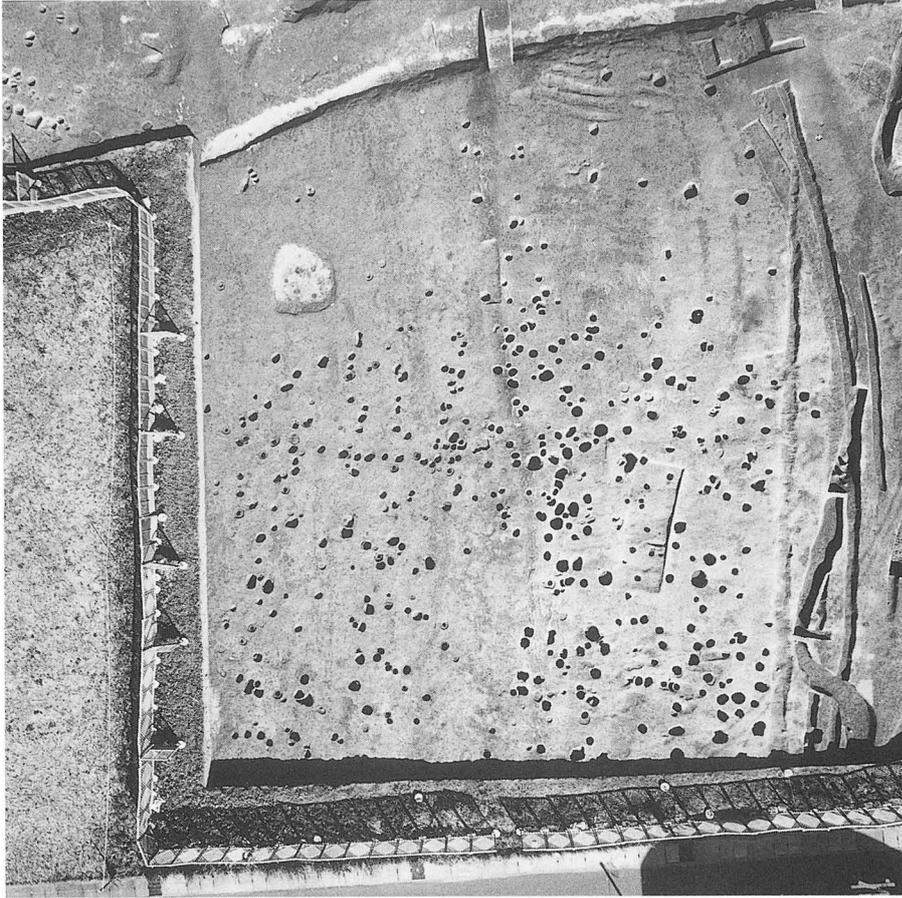
図版 5
池開地区 SE10
軽石検出状況（南より）

図版 6
江口地区全景（天が北）



図版 7
江口地区 SB1（天が北）





図版 8
江口地区南東部(天が北)



図版 9
江口地区 SD3 (地が北)

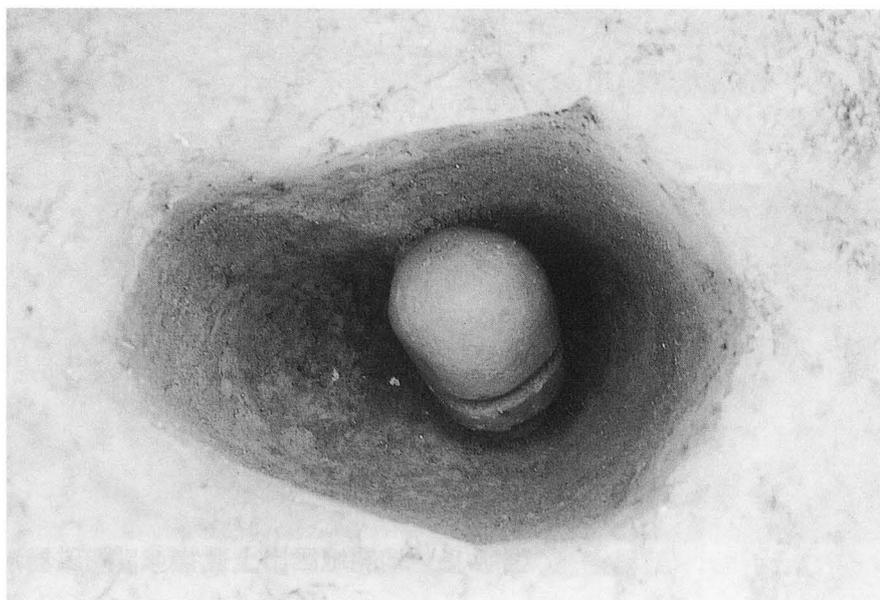
図版10
江口地区 SD3(南西より)

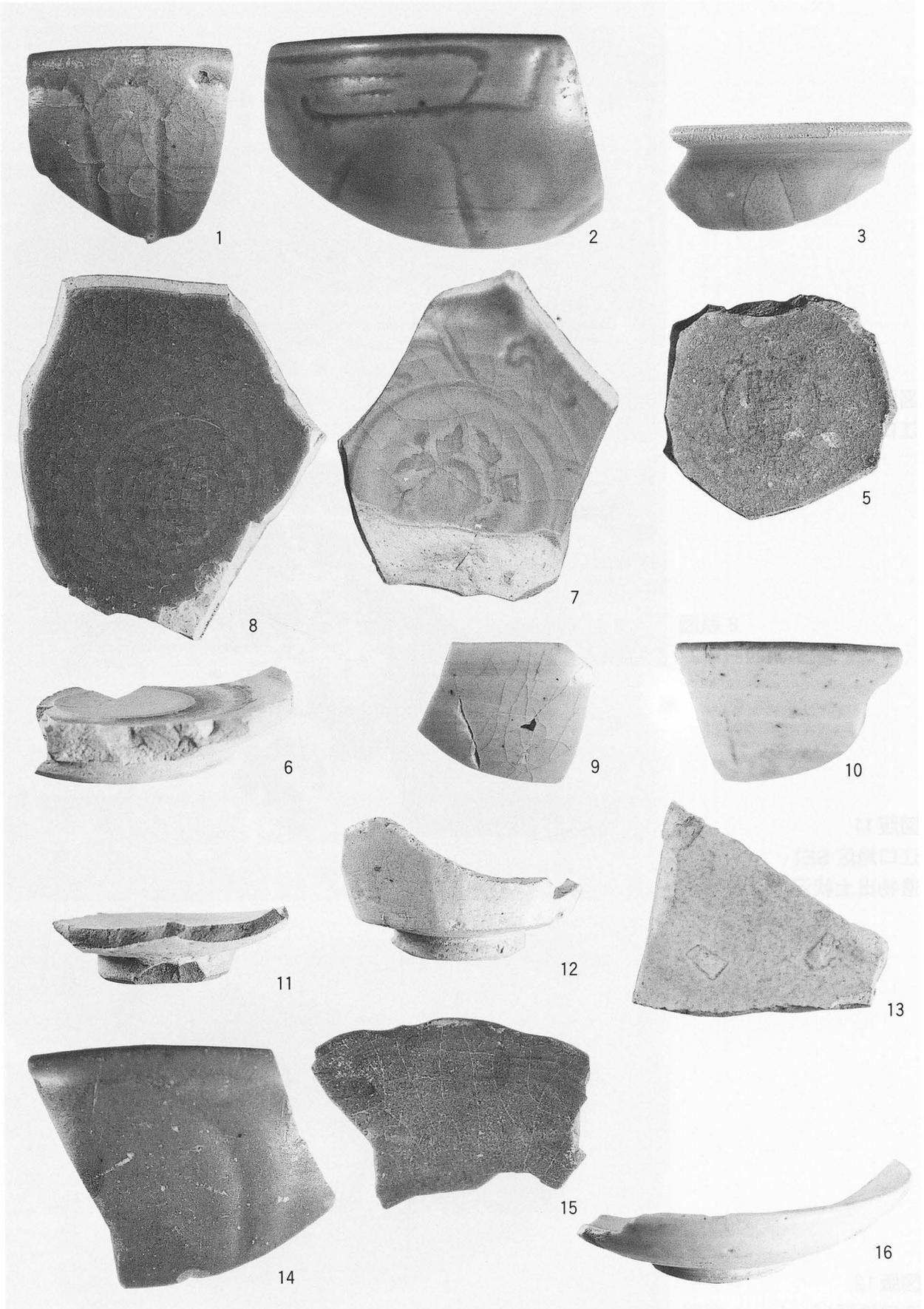


図版11
江口地区 SE1
遺物出土状況

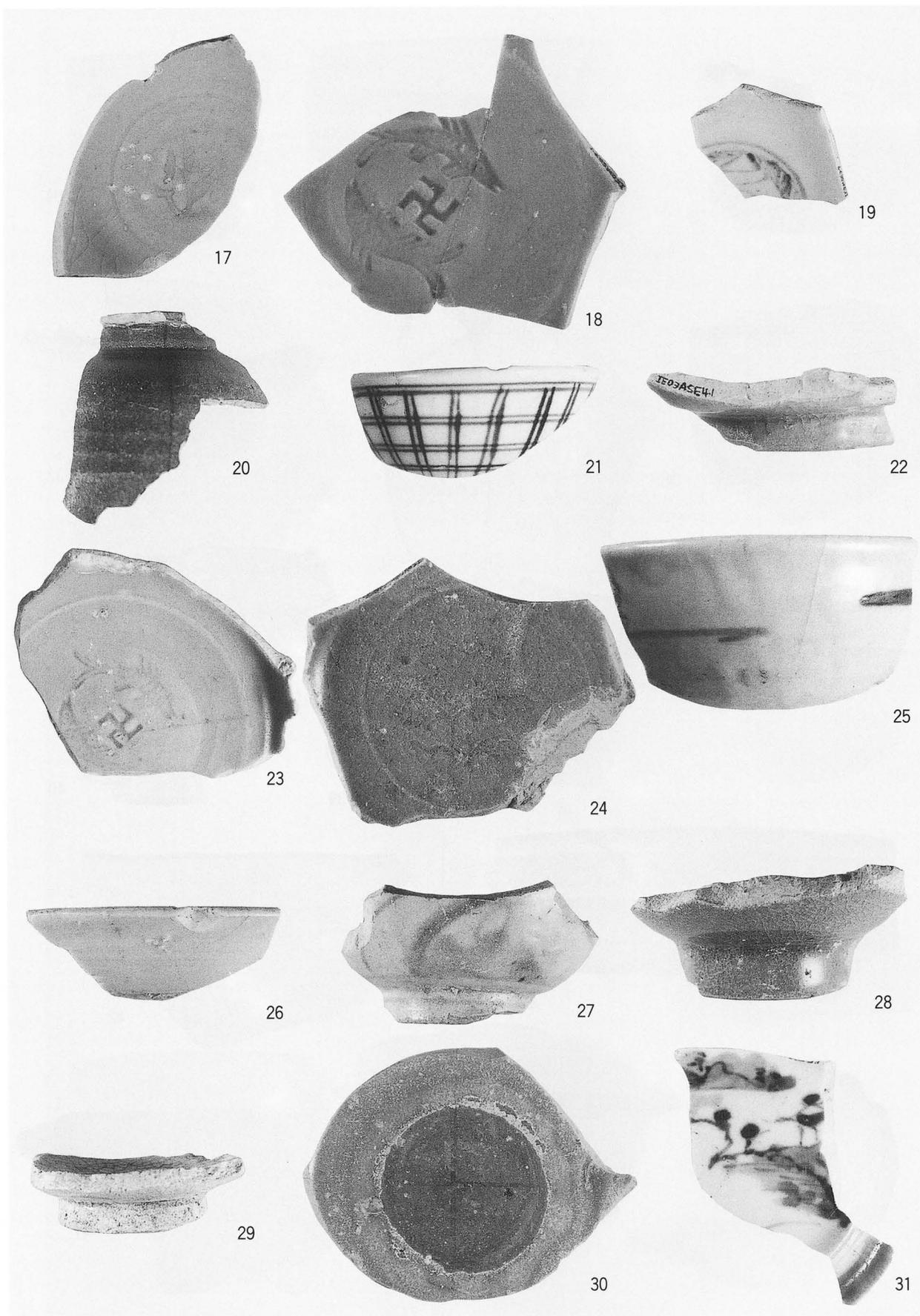


図版12
江口地区ピット
遺物出土状況

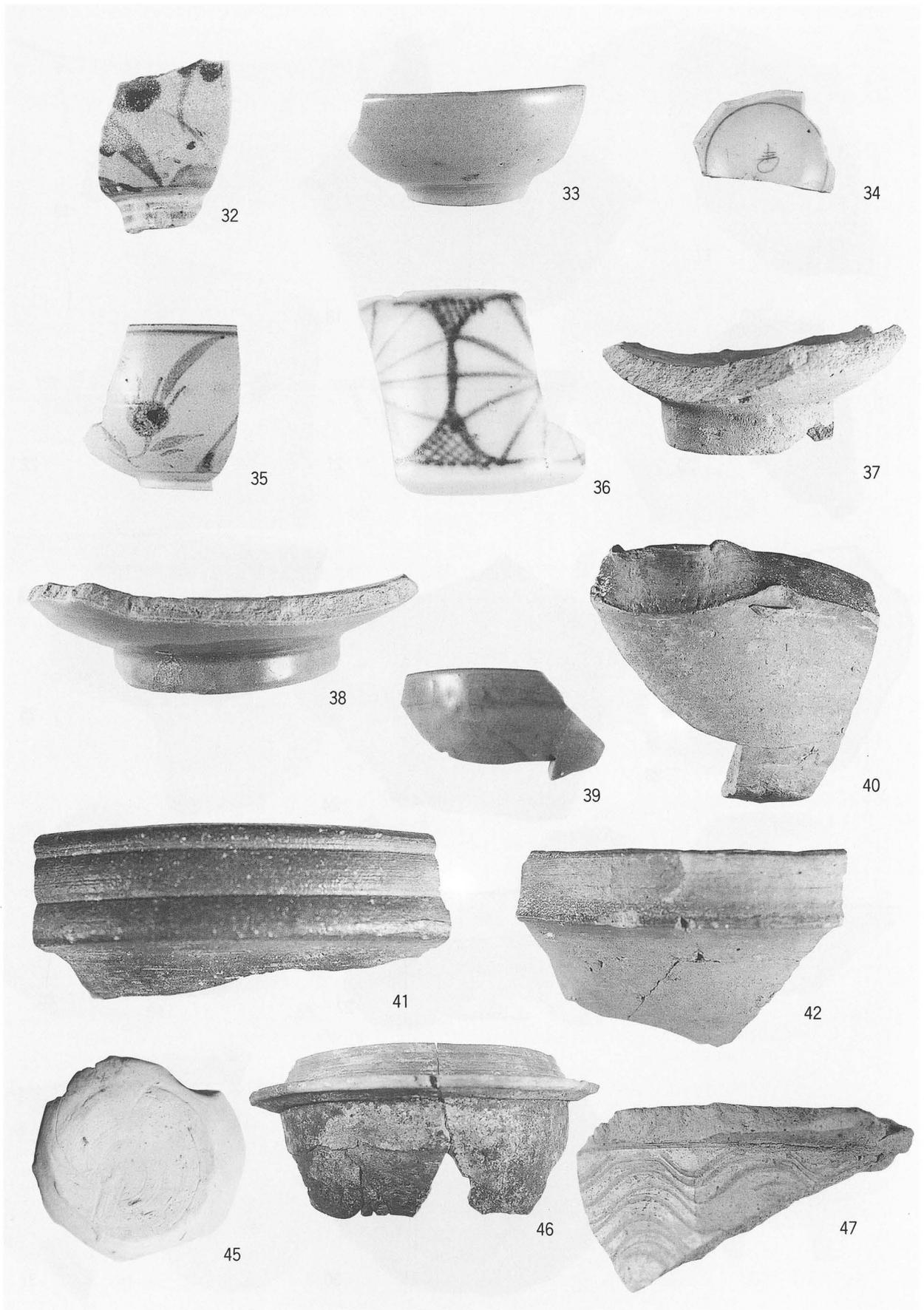




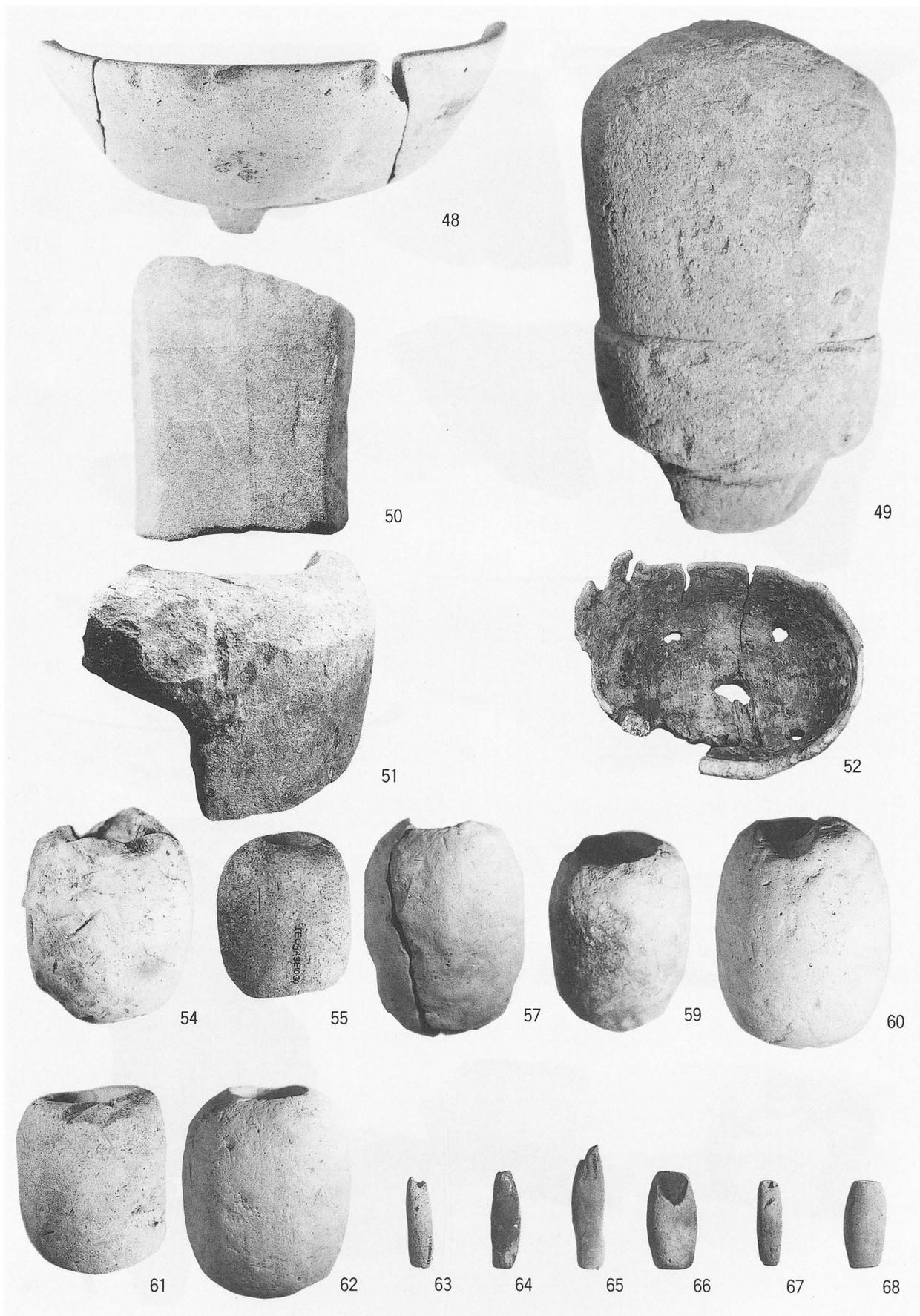
图版13 池開地区出土遺物① (陶磁器)



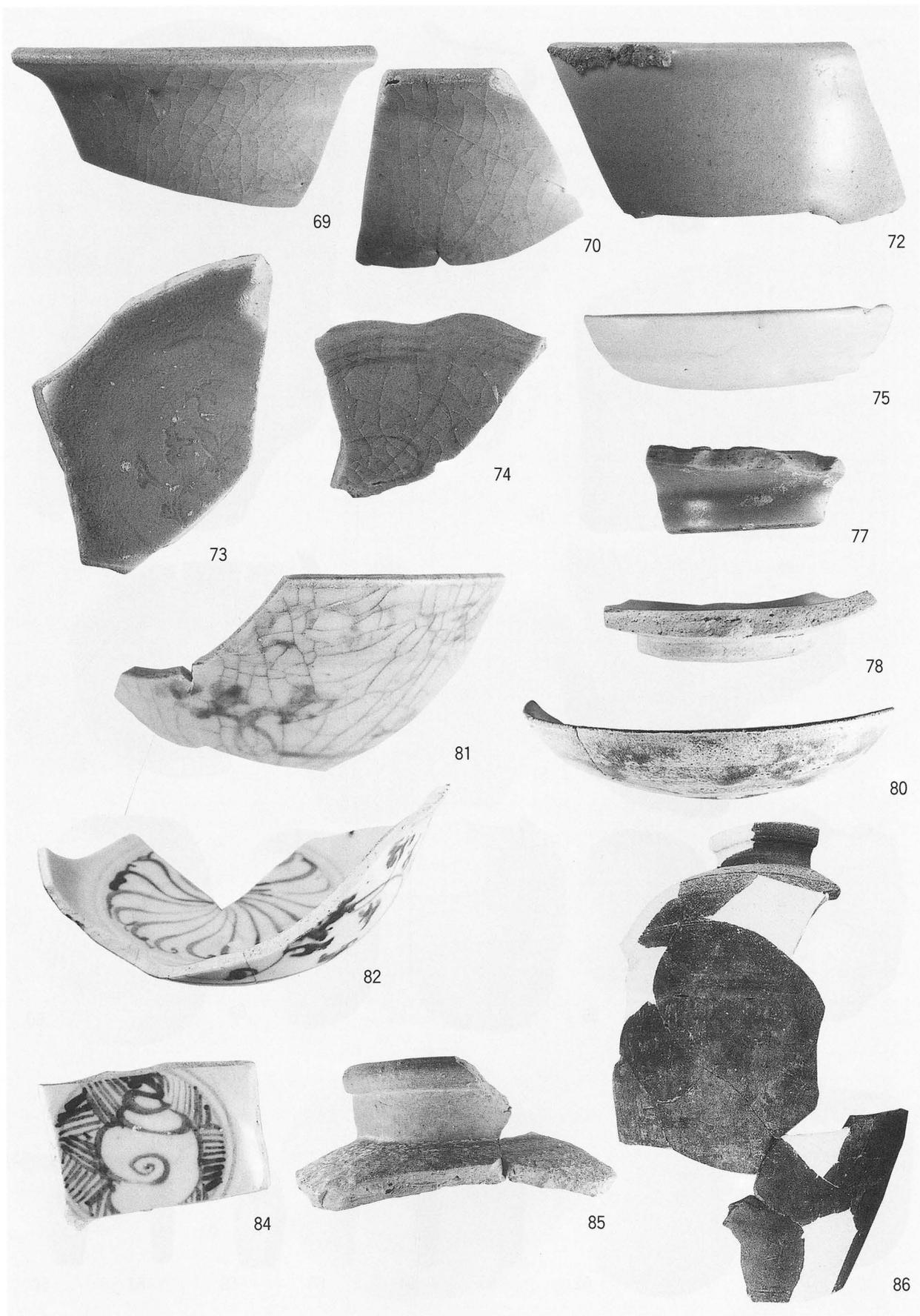
図版 14 池開地区出土遺物② (陶磁器)



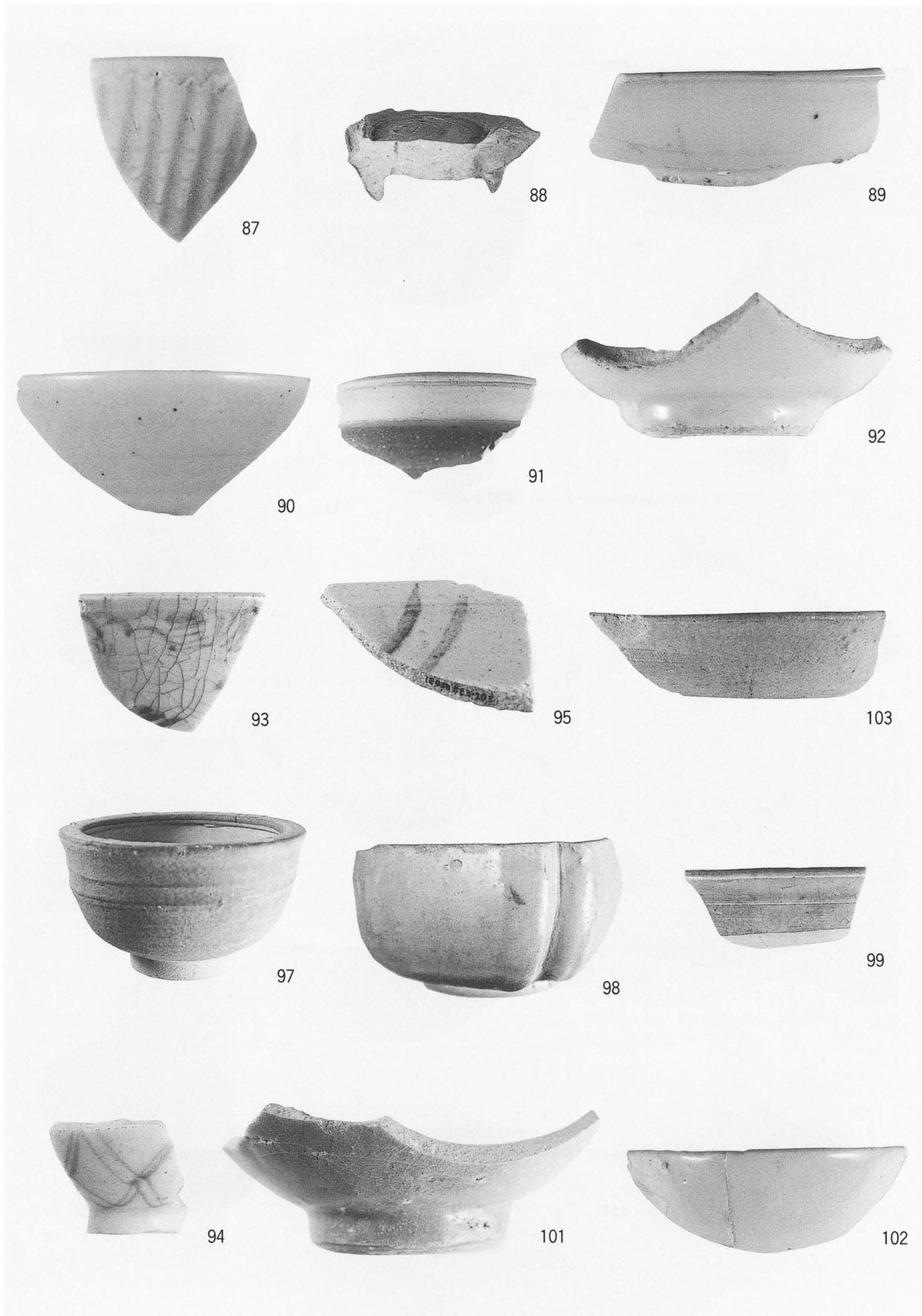
図版 15 池開地区出土遺物③ (陶磁器・その他土器類)



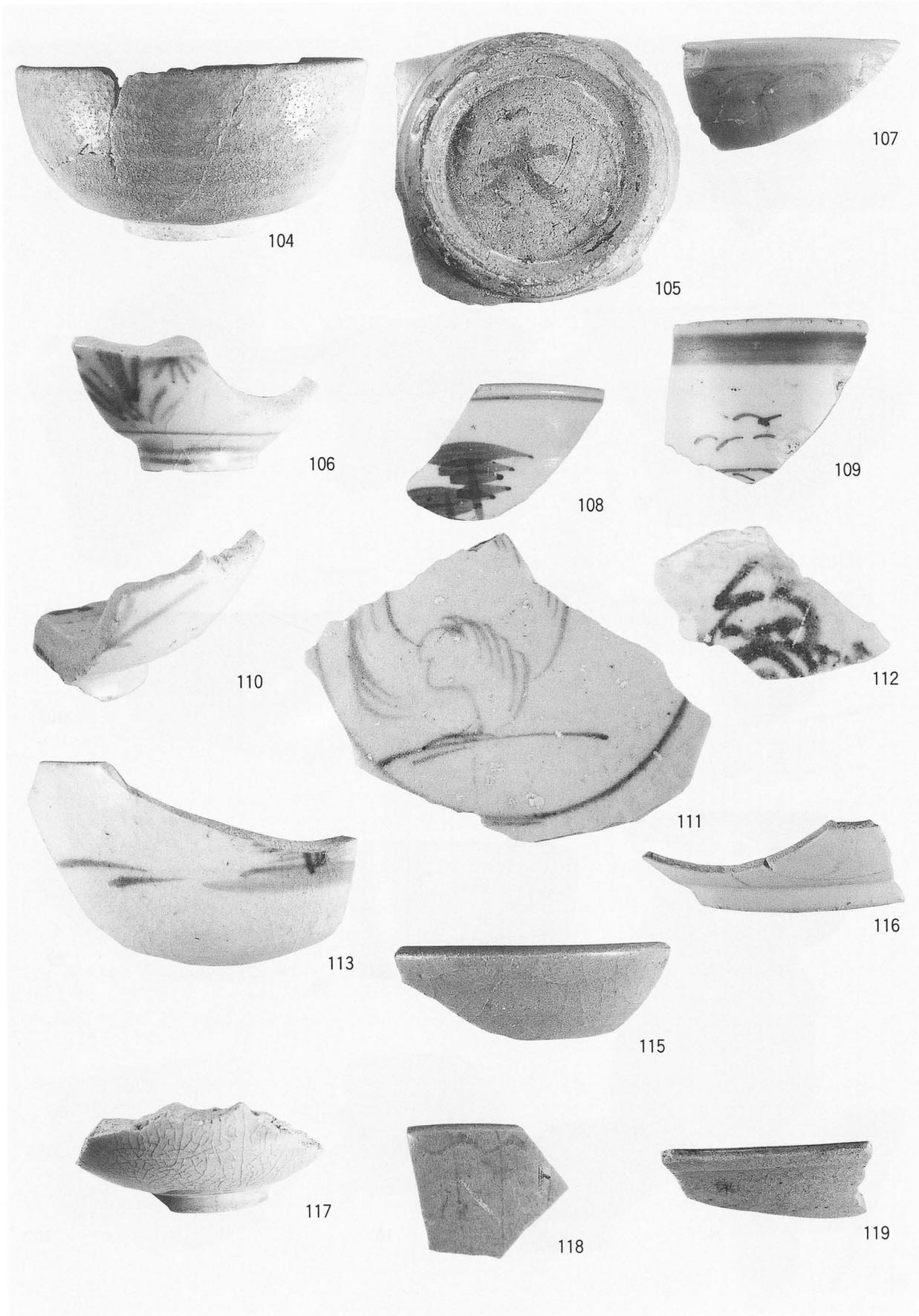
図版16 池開地区出土遺物④（その他土器類・石製品・木製品・土錘）



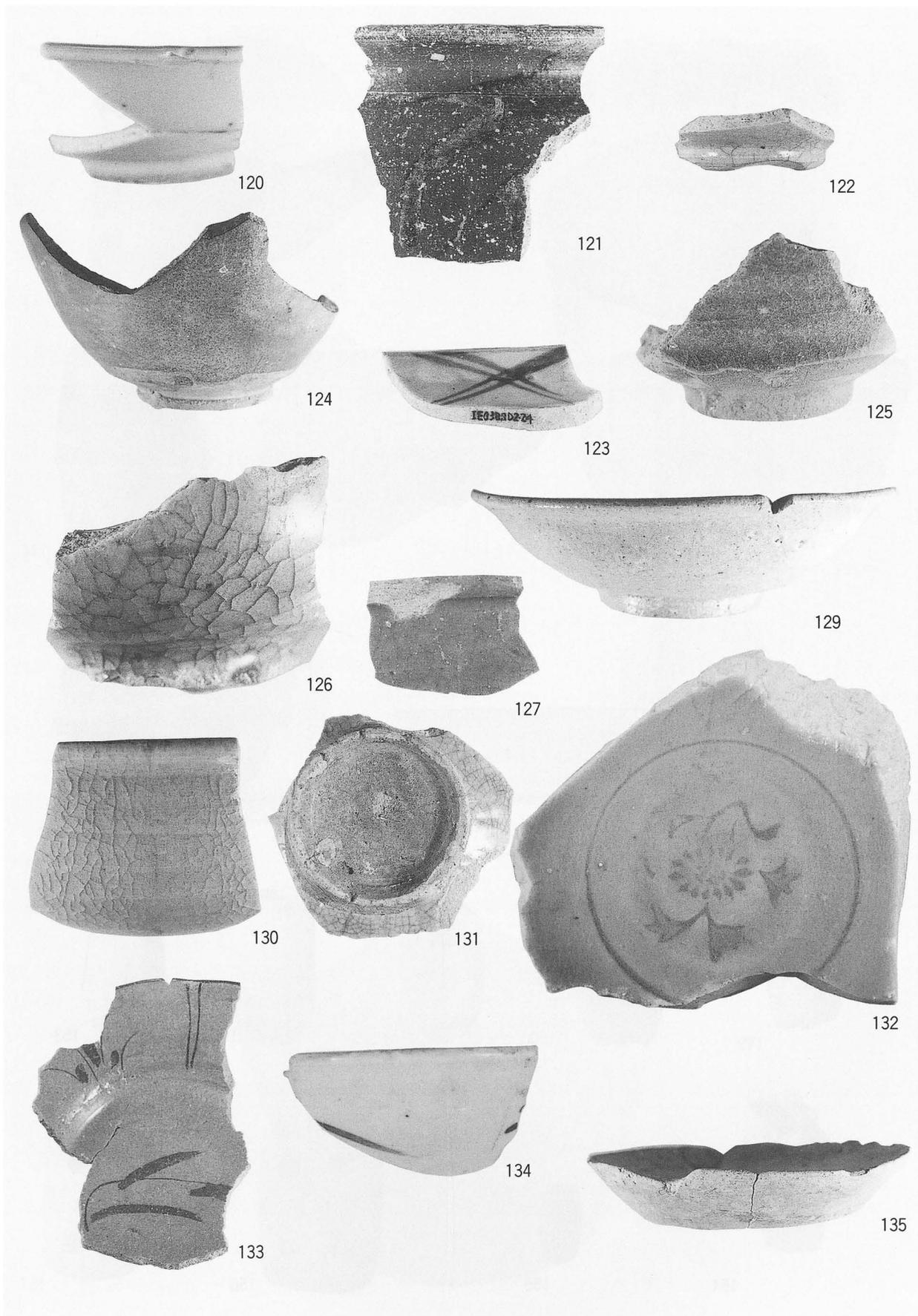
图版 17 江口地区出土遗物① (陶磁器)



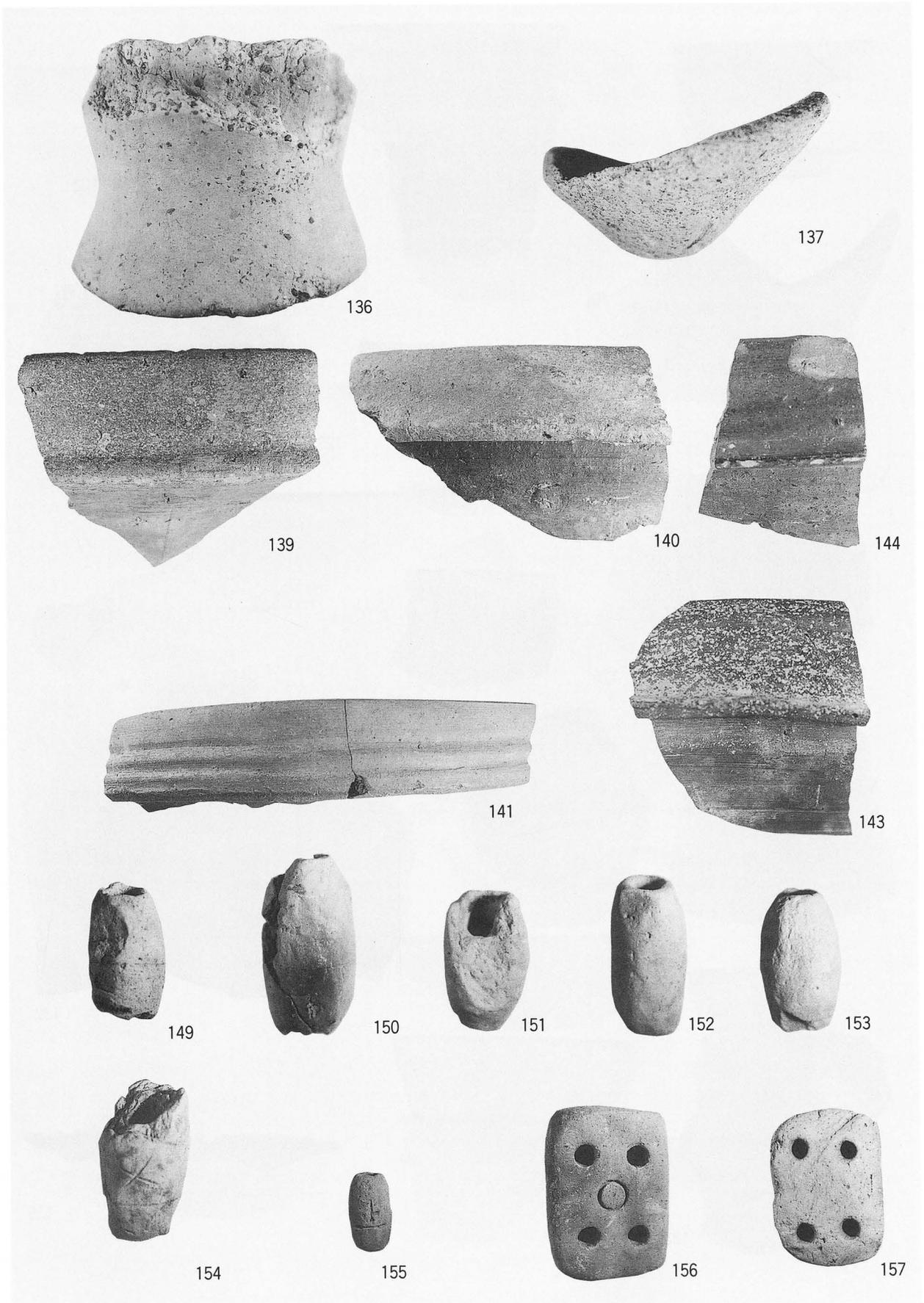
图版 18 江口地区出土遺物② (陶磁器)



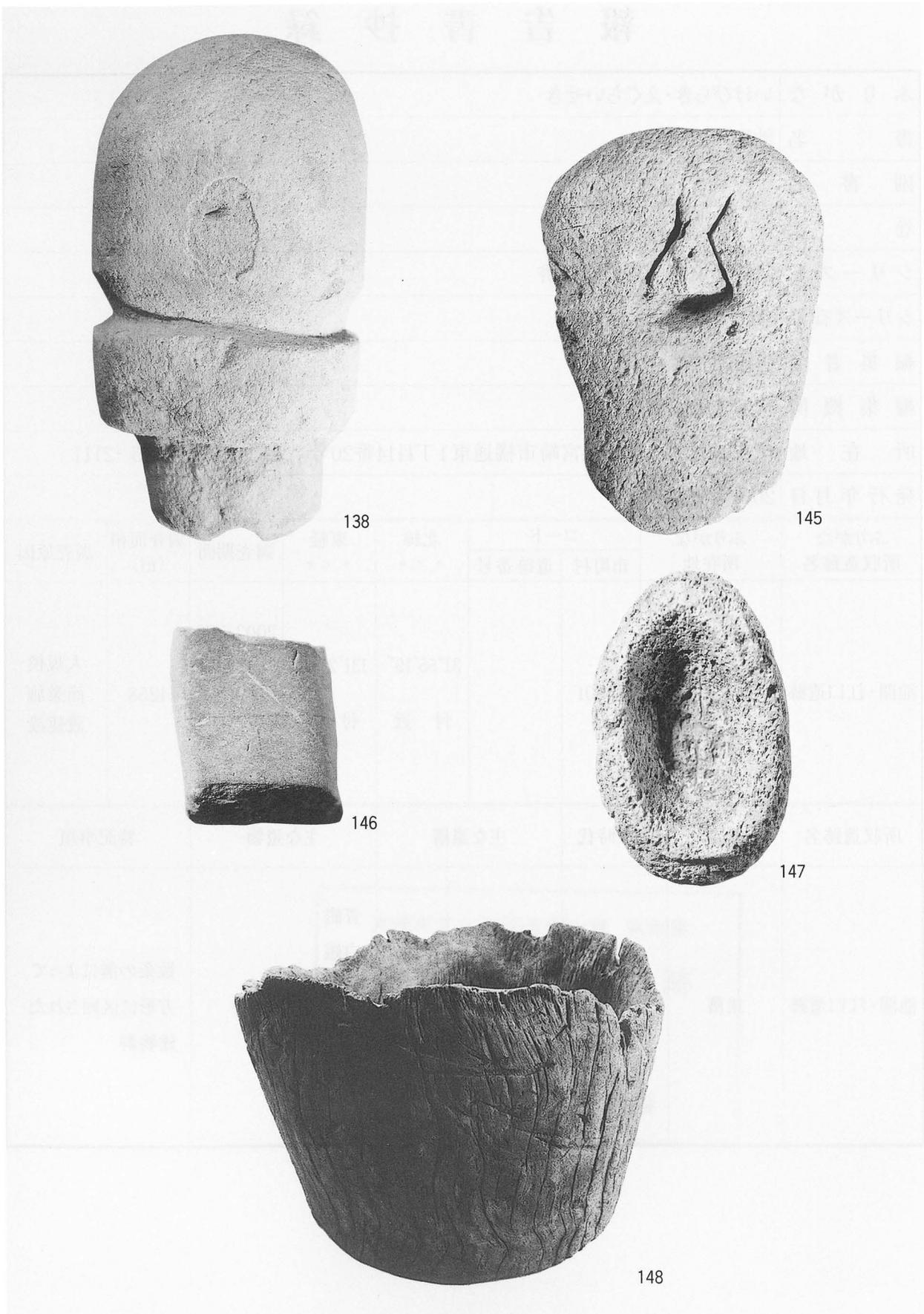
图版19 江口地区出土遗物③ (陶磁器)



图版 20 江口地区出土遗物④ (陶磁器)



図版 21 江口地区出土遺物⑤ (その他土器類・擂鉢・土錘)



图版22 江口地区出土遺物⑥ (石製品・木製井筒)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いけびらき・えぐちいせき							
書名	池開・江口遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第59集							
編集者名	竹中 克繁							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 25-2111							
発行年月日	2004年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
池開・江口遺跡	宮崎県宮崎市 新別府町	45201		31°55'19" 付 近	131°27'17" 付 近	2003.6.23 } 2004.1.30	4258	大規模 商業施 設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
池開・江口遺跡	集落	中世	掘立柱建物 溝状遺構 井戸		青磁 白磁 染付 土錘 漆器 木製井筒		数条の溝によって 方形に区画された 建物群	

宮崎市文化財調査報告書 第59集

池 開 ・ 江 口 遺 跡

2004年12月

発 行 宮崎市教育委員会